

庄内



第18号

庄内の昔を語る会



表紙写真説明（写真は福村修様提供）

庄内川平田井堰

表紙写真は、庄内川の上平田橋と平田橋の間にある可動式平田井堰です。

「昭和九年に築かれた旧平田井堰は、庄内川の改修工事にともしない取りこわされることになり、固定堰から新しく可動堰として構築されました。

旧井堰からの取水方法は、六ヶ所の水通し部を角材で締め切り水を溜め、堤の両側から取水するようになっていました。このコンクリート固定堰は、河川増水の場合に大きな障害物となって氾濫・破壊などの原因ともなり、治水管理上きわめて危険な工作物でした。

新設された可動堰は、鋼製の転倒ゲートで、この型式の取水施設としては都城最大の農業用水取水堰となっています。この可動堰は、通常に置いては機械によって倒したり起こしたりすることができ又、台風大雨の増水時に水位ゲートより三〇センチ以上になると自動的に前面に倒れる装置も兼ね備えており、洪水調節のはたらきをするので、治水上きわめて効果的な施設となっております。又、河床が下がるのを防ぐ床止工の役目も果たしております。

新しく造られた可動堰の概要は

堰 長 六三・〇メートル（可動部 三連）

型 式 半固定・転倒ゲート

ゲート高 一・七メートル（後略）

〔庄内〕第6号「私たちの庄内川◇◇改修事業のことなど◇◇」坂元庸氏の記述より）

なおこれにより、かんがい面積が、左岸地区 約三五ヘクタール、右岸地区 約五〇ヘクタールとなっている。また、平田井堰は菓子野・乙房地区農業経営者にとって農業用水の心配がなくなり、農業経営の安定的基盤ができたのである。

『庄内』十八号発行にあたって

庄内の昔を語る会 会長 山下 謙二郎

昨年に続いて十八号を発行することができました。これも庄内地区の皆さまをはじめ、遠く故郷を離れていてもなお、庄内に思いを馳せて下さる方々の賜物です。心より感謝申し上げます。

一昨年の家畜口蹄疫、続いて昨年初めの新燃岳の噴火と宮崎県全体・都城地区は全国的に報道され、故郷を離れている方々も心配されていたことと思います。その後口蹄疫は終息宣言が出され、新燃岳の活動もおさまっています。

今、「庄内地区まちづくり協議会」がつくれ活動しています。これは、各公民館、各種団体等を中心に庄内地区全体が「協働して自主的、主体的に地域活動し、住みよい地域社会の構築を目指すことを目的」として作られました。私達「庄内の昔を語る会」もその中の「教育文化活動部会」に所属して活動しています。昨年十月には、中学生に地域の歴史を知り、興味を持ってもらおうという趣旨で、庄内中学校一年生を対象に地域の「史跡巡検」を行いました。その案内役として「庄内の昔を語る会」がつとめました。以上のことについては昨年の『庄内』十七号に「庄内町情報」の中に掲載されています。今年の中学生史跡巡検は十一月下旬に計画されています。

また、私達「庄内の昔を語る会」の独自の活動として、年二回の史跡探訪を行っています。これに地域の方々が毎回四十名ほど参加されています。またほかに「歴史講座」（約二十名）も企画し、おおよそ月一回の割合で行われています。十八号にその時の講座について「歴史研究」として一部掲載されています。

今年の『庄内』十八号も昨年同様十分なものとはいえませんが、何とか発行することができました。これからも更なるご支援・御助力をお願いします。

平成二十四年十一月吉日

目次

『庄内』十八号発行にあたって	会長 山下謙二郎
----------------	----------

歴史研究

庄内地区の遺跡について	都城市教育委員会文化財課	栗山葉子	1
庄内の重要史跡「山久院跡」と「釣璜院跡」について	東区	坂元徳郎	11
地名「庄内」の誕生と変遷	鷹尾町	山下真一	23

史料

西区の前田溝	西区	乙守保正	29
還暦記念に諏訪神社へ鳥居寄贈	東区	鎌田康正	34

庄内町情報

庄内地区まちづくり協議会平成二十三年度事業報告	庄内地区まちづくり協議会	42
庄内の昔を語る会平成二十三年度事業報告	庄内の昔を語る会	45

追憶・随想

「庄内」第十八号刊行を祝して	福岡県在住	横山信美	48
回想 私の外務省時代	東区	坂元勲	50

帰郷 久保原町 宮下俊彦 60

ゆかしき、美しき庄内よ 早鈴町 七牟礼純一 69

庄内の思い出 東区 馬籠京子(旧姓原) 78

過ぎし日々 川崎 福村修 82

庄内に対する思い 西区 池田忠夫 84

じさまとガグレ 今屋 鵜島節男 85

庄内の食と習慣 西区 池田良子 87

史跡探訪

坊津・枕崎、史跡探訪旅行 町区 山下謙二郎 89

事務局だより

平成二十四年度 事業計画 92

平成二十四年度 会員名簿 93

編集後記

..... 94

表紙題字 (故)大河内浩爾

歴史研究

庄内地区の遺跡について

都城市教育委員会文化財課 栗山葉子

はじめに

都城市教育委員会文化財課では、地域の遺産である遺跡と遺跡の出土品を広く市民に活用していただけるよう、平成二十二年度より、国の補助を受け、「都城市埋蔵文化財保存活用整備事業」を実施しています。事業では、市内の出土品をいろいろな場所で開催する巡回企画展や、出土品を活用した学校での出前授業・体験学習会、市民向けの歴史講演会等を行っています。

「庄内の昔を語る会」より、庄内の遺跡について話をして欲しいという依頼があり、事業の一環として、平成二十四年二月二十四日に、庄内地区公民館にてお話をさせていただきました。今回、その時の内容を文章にして欲しいとの依頼があり、一

人でも多くの方に庄内地区の事を知っていただけるのであればと、投稿させていただくことになりました。

庄内地区といえは…

「庄内地区」というと、おそらく都城市でも歴史に対する意識が高い地区ではないでしょうか。それは、都城島津氏の元となる北郷氏が拠点を築いた地であり、安永城といった史跡等も数多く残されているため、幼少のころより歴史に囲まれて育った環境のなせる技なのかもしれません。図1は、庄内地区の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）を示した地図です。非常にたくさん遺跡があることがわかります。特徴的なのは、古墳時代のお墓がたくさんあること、中世山城や寺院があること、江戸時代の地頭仮屋跡があること、かくれ念仏洞があることでしょう。庄内地区には、現在、約八十箇所埋蔵文化財包蔵地があると考えられています。では、庄内の歴史を発掘調査からすこしだけひも解いてみましょう。

縄文時代の庄内地区

現在、庄内地区には二十箇所以上の縄文時代の遺跡があると考えられていて、庄内川の兩岸の台地の端に分布しているよう



図1 庄内地区の埋蔵文化財包蔵地（枠で囲まれた部分が遺跡）

です。これまで、実際に発掘調査が行われているのは二遺跡（伊勢谷第1遺跡、丸山第1遺跡）で、今回は、このうちの伊勢谷第1遺跡について御紹介します。

伊勢谷第1遺跡は、くまろ広場建設に伴い、発掘調査を実施しました（一九九七・一九九九・二〇〇一年）。調査面積は、一万平方メートルにも及びます。

今から、約七五〇〇年前と、約四五〇〇年前に集落が営まれたことがわかりました。

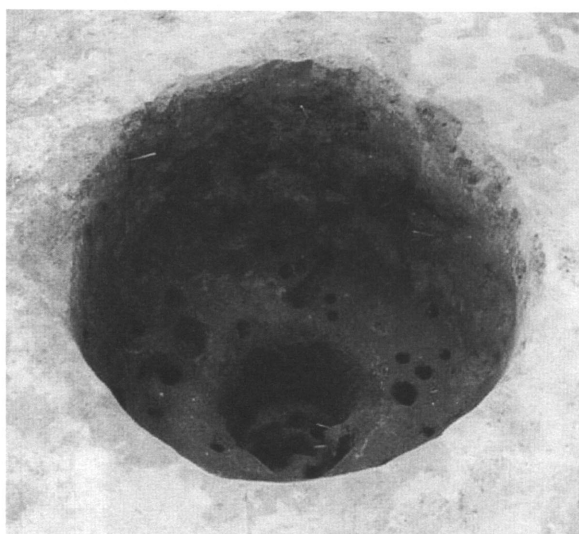
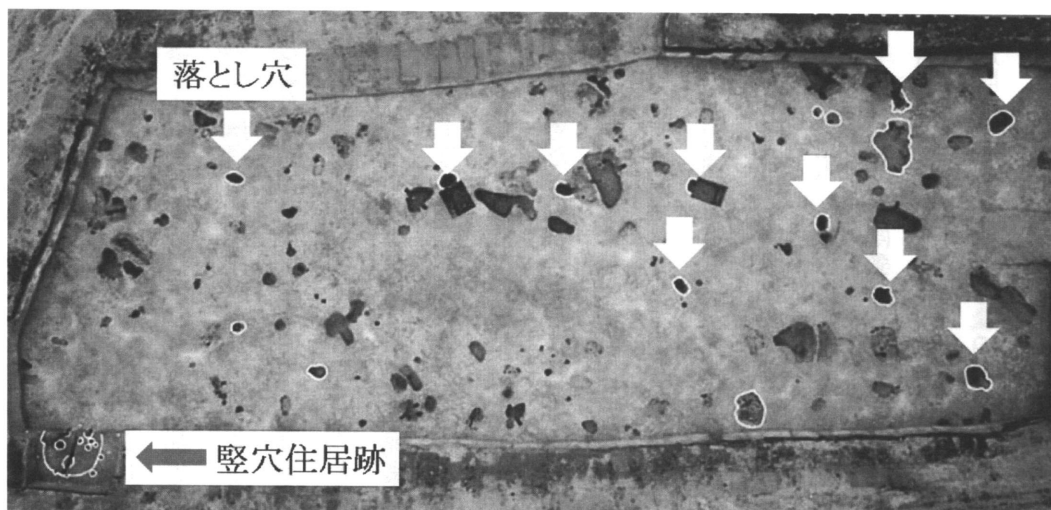
約七五〇〇年の地層からは、^{まいのうどき}埋納土器^{まいのうどき}といって、地面に掘った穴に土器を納めたものが見つかりました。土器は、口を下に、底を上にした状態で見つかっていて、土器の底は打ち割られていました。なにかの儀式を行ったのかもしれない。

出土品としては、縄文土器もたくさん見つっていますが、驚きの一品があります。それは、黒曜石の塊です。なぜこれが驚きの一品かという



埋納されていた土器（^{せのかんしきどき}塞ノ神式土器）

と、実は、この黒曜石は、現在の大分県、姫島で採れる黒曜石なのです（現在は国定公園のため姫島の黒曜石を採ることはできません）。普通、黒曜石は真つ黒いガラスの塊なのですが、この姫島の黒曜石は灰色がかっているのが特徴です。都城や鹿兒島でも小さな破片や塊はよく見つかるとは、伊勢谷第1遺跡の塊は五〇〇グラムと非常に大きく、姫



落とし穴（直径1～2m）

島の黒曜石がどのようにして他の地域に流通していたのかを考える上でも非常に貴重な発見なのです。

また、約四五〇〇年前の地層からは、落とし穴（狩りの時に獲物を追いこむワナ）や縦穴住居跡（家）も見つかっています。

落とし穴は、十基が地形に沿って配置され、穴に落ちた獲物が逃げだせないように、穴の底には木や竹を刺していた跡もありました。

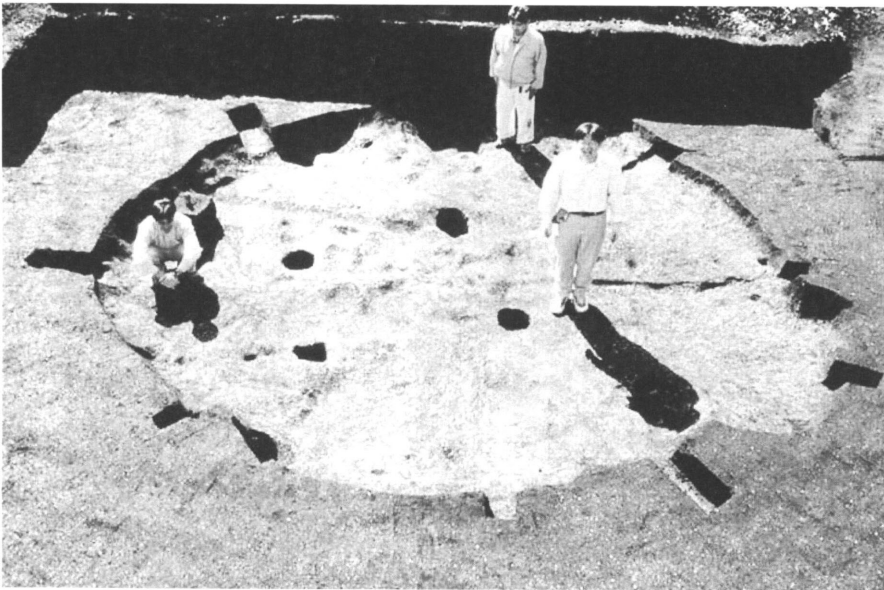
竪穴住居跡は、火山灰によって埋まった状態で見つかりました。この火山灰は、今から約四二〇〇年前に、霧島の御池が大噴火した際に降り積もった軽石です。皆さんも御存知かもしれませんが、通称、ボラ（霧島御池軽石）といって、園芸などで使われるものです。この火山灰は市内の中央部でも一メートルくらい降り積もったことがわかっています。庄内地区ではおそらく二メートルくらいあるのではないでしょうか。この大噴火の際にはすでに家には人が住んでいなかったと考えられますが、人が住まなくなってから、そう時間がたたないうちに噴火が起こったことが考えられるため、非常に貴重な発見といえます。その他に、焼いた石を集めた「集石」と呼ばれる、調理場の跡も見つかっています。

弥生時代の庄内地区

弥生時代の遺跡は、庄内地区に二十箇所程度はあると考えられ、縄文時代の遺跡よりも、若干、台地の奥にまで分布が見られるようです。ただし、このうち実際に発掘調査を行ったのは大久保第2遺跡の一例のみになります。

大久保第2遺跡は、民間の老人福祉施設建設に伴い、約四〇〇平方メートルを調査しました。遺跡からは、弥生時代の竪

穴住居跡や周溝状遺構と呼ばれるドーナツ状の溝などが見つかりました。竪穴住居跡からは、住居の屋根や柱に使われたと思われる木材が、炭になった状態で見つかりました。



弥生時代の竪穴住居

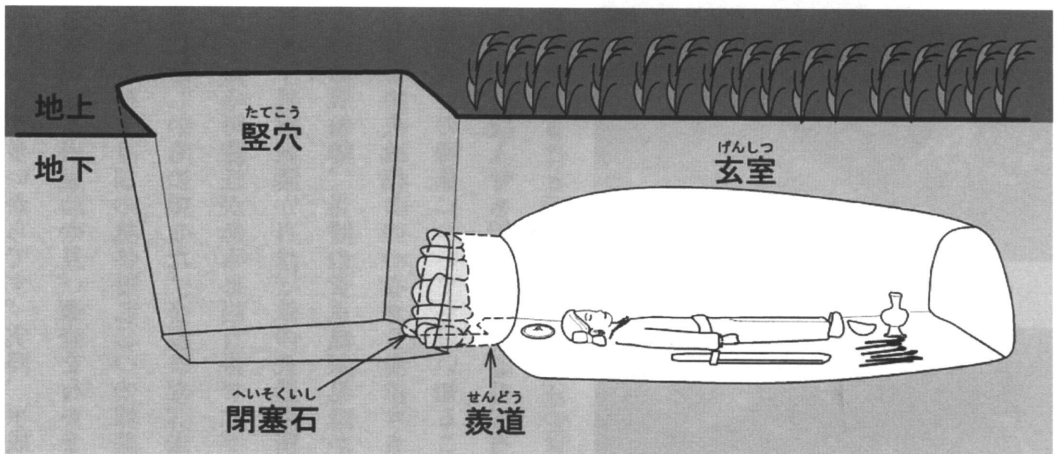
古墳時代の庄内地区

古墳時代の遺跡は、三十箇所程度あると考えられますが、実際に発掘調査が行われたのは、菓子野小学校の南側にある菓子野地下式横穴墓群で、これまで十七基が見つかり、十六基が調査されています。

地下式横穴墓とは、その名の通り、地下につくられた古墳時代のお墓の事で、九州東南部に多く見られるお墓の種類です。都城では、これまで、高崎町・高城町・下川東・志和池地区・鷹尾町・菓子野町で地下式横穴墓が見つかっています。

地下式横穴墓の特徴は、地下に掘られたお墓で、前方後円墳のように地上に大きな盛り土がないため、お墓の場所が特定されません。よって、盗掘を受けている確率が非常に少なく、墓に納められた副葬品が、そのまま残されているという点があります。また、地下式横穴墓は、ボラ層中に遺体を納める部屋（玄室）が掘られるので、遺体が土と触れず、密閉される為、骨が残されていることが多いのです。

地下式横穴墓は、ひとつのお墓に複数の人の遺体を納めるのも特徴で、菓子野地下式横穴墓群では、十六基のお墓からこれまで三十一体が見つかっています。この人骨の内訳は、男性八体、女性七体、小児六体、不明十体となっています。



地下式横穴墓の模式図

地面に竪穴を掘り、その壁面から横に玄室を掘る。竪穴と玄室の間には羨道があり、玄室の入り口は石や土で塞がれている。

先ほど、地下式横穴墓は地下に掘られ、地上に大きな盛り土が無いと述べましたが、最近の調査例からは、前方後円墳のような大きな盛り土は無かったが、多少の盛り土はあったかもしれないと言われています。また、実際、地下式横穴墓は、追葬といって、最初に無くなった人をお墓に納めてからある程度時間を置いて、また別の人を同じお墓に埋葬している例が見られます。つまり、お墓がどこにあるかわかっていなければ、出来ない事です、小さな盛り土か、木の杭かわかりませんが、何らかの目印はあったと考えられます。ただし、葺石や立石のような、後世に残るような目印ではなかったと考えられるのです。

菓子野地下式横穴墓群の近くには、昭和五十八年に指定解除されるまで、庄内古墳と言って県の史跡に指定された古墳がありました。現在は消滅しています。また、地元の方にお聞きしたところ、昔は、もっとたくさんのお墓があり、「塚」のついた地名があったという事です、当時は、もっとたくさんのお墓が築かれていた場所であったと思われます。

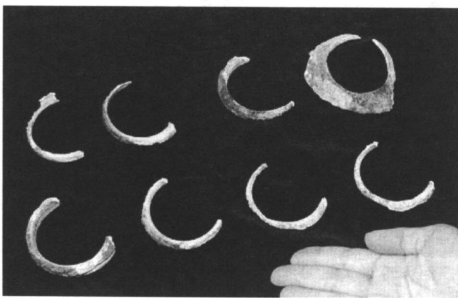
地下式横穴墓は、いつ発見されるともわかりません。というのが、どこにあるかわからないため、トラクターなどで地面を耕した際に、たまたま地下の空洞が地上の重みに耐えられずに

発見されることが多いからです。実際、平成二十三年度には二つの地下式横穴墓が見つかり、調査を行いました。そのうちの一つは、一つの入り口の坑に対し二つの埋葬する部屋を持つという非常に珍しいものでした。まだまだ、未発見の地下式横穴墓が眠っている可能性があるという事です。

菓子野地下式横穴墓からは、鉄の武器や南の海でしか取れない貴重な貝の腕輪等、当時の貴重品が見つかっています。これらは、当時の中央政権とのつながりを示すものでもある為、大和政権と都城との関係についても窺い知ることのできる遺跡といえます。また、人骨を観察することで、当時の人の身長や顔の特徴などを知ることができるのです。



竪穴と閉塞の石



貝殻の腕輪

奈良・平安時代の庄内地区

都城盆地には、非常に多くの奈良・平安時代の遺跡があります。庄内地区では、発掘調査が少ない為、あまり見つかっていませんが、大淀川流域やその支流である横市川流域では非常に多くの遺跡があります。金田町の大島畠田遺跡は、平安時代の地方豪族の屋敷と考えられていて、国の史跡に指定されています。

庄内地区には、十箇所以上の奈良・平安時代の遺跡があると考えられています。実際に調査を行ったのは二遺跡です。そのうちの一つである、伊勢谷第1遺跡では、素焼きのお茶碗



土師器の甕

やお皿が、まともに見つかっているほか、ほぼ完全な形の土師器の甕（曾蔵骨器？）も見つかっています。

鎌倉・室町時代の庄内地区

庄内は、都城島津の元となる北郷氏が都城を治める際に拠点とした地でもあるため、この頃の遺跡が非常にたくさんあると考えられます。今回は、そのうち、実際に調査を行っている安永城跡について御紹介します。

安永城といっても、発掘調査を行っているのは、安永城を構成する曲輪の一つである金石城跡です。中世の城跡で有名ですが、実は、それよりもずっと前の、縄文時代や弥生時代、古代の出土品も見つかっています。

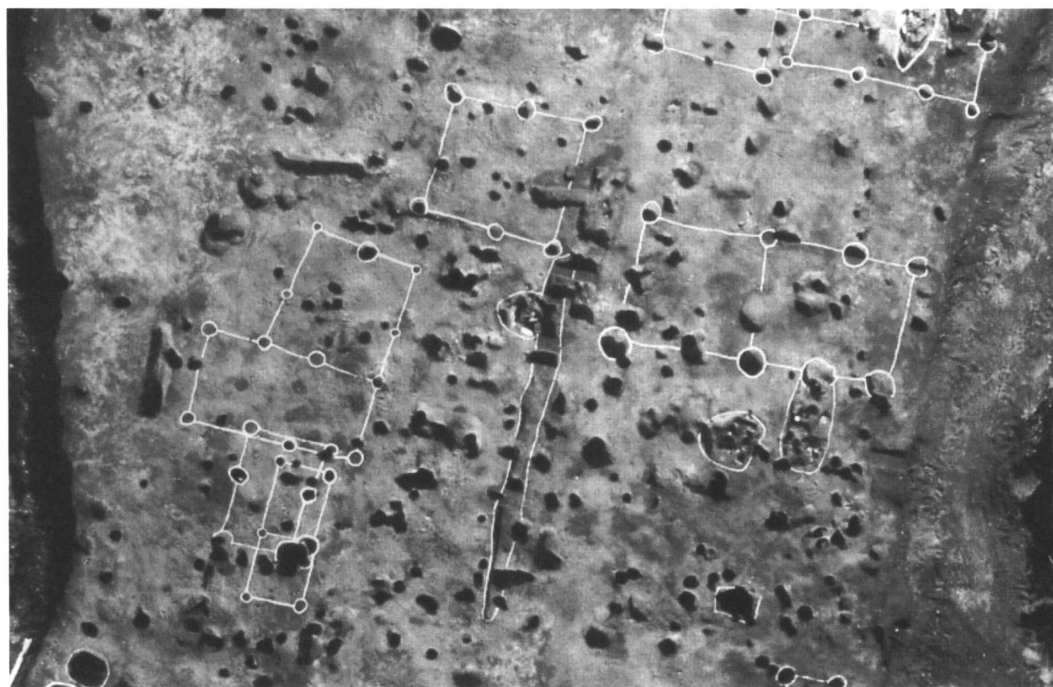
写真は、調査を行った時に撮影した航空写真です。城の中央に延びている道路と、その両側には建物がたくさんあったことがわかります。

城は大きく四つの時期にわかれて使用されています。Ⅰ期は、十五世紀前葉～中葉、Ⅱ期は十五世紀中葉～後葉、Ⅲ期は十六世紀代～十七世紀前葉、Ⅳ期が十七世紀前葉～後葉です。このうちに最も城が機能したのがⅢ期になります。

城跡からは、中国で焼かれた白磁や青花（染付）の食器類のほか、鎧の一部である小札こざねや短刀といった鉄製の道具など、当時の生活を物語る出土品が見つかっています。



金石城空撮（北から）：曲輪の中央を南北に道路跡が通り、北側で鍵状に折れる。
道路の左右には建物が立ち並ぶ。



○が建物の柱穴で、四角で囲まれた部分が建物。

江戸時代の庄内地区

江戸時代、安永城の麓に地頭仮屋があったことを御存知の方が多いと思いますが、それ以外に四十箇所くらいの遺跡があると考えられます。そのうち、これまで三箇所が調査されています。今回は二箇所の遺跡を御紹介したいと思います。

一つ目は、庄内小学校遺跡です。その名の通り、庄内小学校の屋内体育館建替えの際に発掘調査を行ったもので、江戸時代の後期～明治にかけての在有力者の屋敷跡と考えられます。遺跡からは、建物の他に井戸や池、道路跡が見つかっていました。残念ながら、近・現代の削平を受けており、出土品はそう多くありませんでしたが、薩摩焼や唐津焼等の焼き物が見つかっています。



薩摩焼の甕

もうひとつは、平田かくれ念仏洞です。一向宗が禁じられていた時代に信者たちが隠れ祈った場所と伝えられています。都城には、庄内地区以外にも、高城町田辺、山之口町田島、山田町大古川、同平山にもかくれ念仏洞が残されています。



平田かくれ念仏洞

おわりに

遺跡（埋蔵文化財包蔵地）というのは、昔の人々が利用してきた場所の事です。地下にあるので、見つからない遺跡の方が多いという事です。よく、「遺跡があるから開発できない」「金と時間の無駄」「趣味で発掘をしている」といったことを言われます。確かに、現在の法律では、基本的に遺跡を破壊する

ような開発を行う場合、開発者側に費用の負担をお願いして発掘調査を行っています。御理解いただきたいのは、埋蔵文化財行政側としては、実は、発掘調査は行わず、そのまま保存し、後世に残すということを第一に考えているということです。発掘調査を行うという事は、遺跡を破壊するという事です。こちらとしても、できれば、遺跡を破壊しないような形で開発をお願いしています。それでも、調査をしなければならぬ場合にはのみ調査を行っています。ですから、基本的に個人住宅の建設など、小規模の、地下に影響を与えない工事については、費用負担のない試掘調査と呼ばれる、数日で済む調査を行い、書類を提出していただく場合がほとんどです。

遺跡の範囲に入っていると嫌な顔をされることが多いのですが、遺跡があるという事は、昔から利用されてきた土地という事です。東日本大震災の折、津波に襲われた範囲には、遺跡は一つも無かったという市があります。つまり、昔の人々は、どこが安全で暮らしやすいかということを、現代の私たちよりも知っていたという事ではないでしょうか。

全ての発掘調査が、世紀の大発見という事はありません。しかし、地域の小さな調査の発見の積み重ねが、地域の歴史であり、そして、日本の歴史になり、今の私たちにつながっている

という事を心に留めていただきたいと思います。

また、近年、地域の歴史的遺産である史跡を活かしたまちづくりを行っている所が多いのですが、成功している例もあれば、そうでない例もあります。地域の史跡を活かすためには、地域の方々が、どれだけ正しく地域の歴史を理解するかにかかっていると思います。地域の正しい歴史を理解することで、おのずと、その地域の売りとなるものは何か、後世へと残し、伝えていかなければならないものが見えてきます。その点、庄内地区ではすでに庄内まちづくり協議会が中心となって、マップ作りや看板設置等、素晴らしい取組をされています。今後の活動も期待される地区といえます。

地域の歴史を次世代へと語り継ぎ、地域の歴史的遺産を守るのは、地域の方々です。そして、その手助けをするのが行政の役割だと考えています。文化財課としてできることは限られますが、これからも、少しでも地域の方々のお役に立てるように努めていきたいと考えていますので、何かあれば、また、お声をかけていただければと思います。

庄内の重要史跡「山久院跡」と 「釣璜院跡」について

東区 坂元徳郎

はじめに

庄内に今なお遺る都城領主北郷家(後の島津家)の菩提寺「山久院跡」と「釣璜院跡」の存在は、私たちが庄内の歴史を辿る上で、決して避けて通れない重要な史跡であります。

この寺院跡の事に就いては本誌「庄内」創刊号と十七号に私の愚稿が載録されていますが、その内容は極めて簡単で、寺院跡の存在と墓標を紹介したに過ぎない浅薄なものです。

そこで 今回「庄内の重要史跡」と言われるこの史跡の事に就いて、手持ちの史料で、私なりにもう少し深く掘り起こして、本誌「庄内」に愚稿を遺して置こうと思います。

本論に入る前に、これに関連する往時の寺院の状況を概観してみます。

(※＝筆者註)

都城領内の寺院

「都城市史通史編」を通読すると、中世から近世にかけての我が国は、仏教が盛んで全国各地に限りなく多くの寺院が建立されました。この都城の地域にも私の推量を遥かに超える数多くの寺院が建立されていた事を知りました。

都城島津家史料の中に、宝永六年(一七〇九)九月に編纂された「都城島津家領諸寺院号本末廃壊調」(※以下「廃壊調」と表記)なるものがあります。これは調査時点に於いて、領内の存立している寺院と既に廃壊している寺院を調査したもので、寺、院、坊、庵、軒に至るまで細かく記録されています。この記録で当時の寺数を数えてみました所「存立しているお寺五十九ヶ寺、既に廃壊して機能していない寺院百二十五ヶ寺」となりました。

寺院廃壊の理由を都城市史通史編では「廃壊の理由は明らかにされておらずその素材も少ないが豊臣政権期の島津氏の知行改定で寺社領の勘落が行われて、寺社領を給人領に転換させる政策が行われ、天正二十年(一五九二)には島津氏領国内の寺領四百八十町歩が没収された。経済面ではこうした関係が廃寺になった要因であろう」とあります。

安永前川内村（※庄内）の寺院

この廃壊調の中に記録されている我が安永前川内村の寺院を拾い出してみますと

存立寺院―山久院、釣璜院の二ヶ寺

廃壊寺院―文殊院、宝蔵坊、東洋軒、渭春庵、福持庵、市頭庵、

長溪庵、新田寺、即源院、大儀院、明星院、直指

庵の十二ヶ寺を数えました。

これ等廃壊寺院を、萬延元年（一八六〇）七月に編纂された「都城島津家領寺院由緒調」（以下由緒調）や弘化十年（一八三九）に編纂された「庄内地理志」（以下地理志）等でその由緒、所在地等を調べてみますと

文殊院―諏訪大明神の座主寺にて侯処、古来より敗壊仕り、委

細の儀相知れ申さず候

（※場所 地理志所載の古絵図に諏訪神社前江口板金

工業辺り）

宝蔵坊―古来より敗壊仕り由緒等全く相知れ申さず候（※敗

壊した宝蔵坊の客殿等を修理して、ここに山久院を移

設した）

東洋軒―当家五代領主北郷讃岐守持久の四男安永地頭北郷信濃

之守辰久の菩提の為建立 場所不明、古来より敗壊に

て委細の儀相知れ申さず候

渭春庵―家臣大河原備後守義房 元和三年（一六一七）死去

一寶道金居士

義房菩提の為渭春庵を釣璜院の寺畔に造立 古来よ

り敗壊にて委細の儀相知れ申さず候（※場所 古絵図

に釣璜院の脇）後釣璜院に併合

十一代領主忠虎公の御時、北郷源左衛門久観安永地

頭の節、補佐職として当城に居住し万事を取り仕切つ

た大河原備後守義房の菩提寺

福持庵―当家五代領主北郷持久の菩提の為に建立、古来より敗

壊にて委細の儀相知れ申さず候（※場所 古絵図に

釣璜院の脇）、後釣璜院に併合

市頭庵―安永地頭北郷源左衛門久観の菩提寺 初め宝蔵寺、今

山久院末、山久院馬場の下本町頭に在り、故に市頭庵

と号す 古来より敗壊にて委細の儀相知れ申さず候

（※場所 山久院馬場は現北郷馬場 従つて島田昌一

氏宅前辺りか）

久観は十一代領主忠虎代の安永地頭、先祖は六代敏久

の四男久隆。

明星院―妙見神社の座主寺（※場所 妙見神社は東区オミケン

坂の上り口付近)

長溪庵―古来より敗壞にて委細の儀相知れ申さず候 (※地理

志に金石城中にあつた金石大明神と関連する記事があるが不詳)

大義庵―(※地理志に神田家所管とあるから西区の神田家墓地

付近と推定)

新田寺、即源院、直指庵、は不明

廃仏毀釈

ところで、御承知の通り、幕末から明治初年にかけて断行された「廃仏毀釈」で当時存立していた寺院の仏堂や仏像仏具類は無惨に破壊され經典は焼かれ半鐘等の鉄器類は全て藩庫に没収されました。

この時の薩摩藩は他藩に先駆けて積極的にこれを断行、一説では藩内千六十六の寺院が宗派を問わず一つ残らず破壊されたとあります。

「都城市史通史編」に依れば、当時都城島津家領内(旧都城、庄内、西岳、山田、三股、中郷)には山久院等島津家の菩提寺十五ヶ寺を含む八十七の寺院があつたと記されています。これ等の寺院が一つ残らず破壊されたのですから、時の流れとはい

え誠に惜しい事をしたものだと思います。

前置きが長くなりましたが本稿を進めます。

一、山久院

東区北郷馬場通りの北の突き当たりに豊幡神社があります。

この神社境内の左脇の苔むした石囲いの中に二基の五輪塔が建っています。御承知の都城島

津家初代領主北郷資忠夫妻の墓

石です。「由緒調」には、

北郷前川内村 山久院、山

号・寺号相知れ申さず候 臨済

宗 二嚴寺末

右は当家元祖尾張守資忠九月

二十日卒、年号不知 法名山久

院殿月窓道明居士

右菩提の為に建立仕り候 と

あります。

「御先祖様御廟所御石塔御位牌調図入全」には、

山久院

御元祖尾張守資忠様 山久院殿月窓道明居士 九月二十日御



逝去 年号不知

御廟不詳、御石塔、御位牌（※御遺骸を埋葬した場所は不詳、墓石は供養塔である事と寺院には御位牌が納めてある事）、

資忠様御室 宮丸藏人道時之女 柏庭妙意大姉 御逝去年月

不知 御廟不詳 御石塔

御位牌とあります。

ご夫妻の石塔の外に八基の宝塔らしき残欠が建っています。

※注

1、資忠逝去の年―島津家史料では御逝去の年号不知となつて

いますが「地理志七十七巻 古江村薩摩迫」の項に「資忠

公延文二年（二三三七）閏

九月二十日御卒去 法名山

久院殿月窓道明居士 御入

部の冬年より是まで六カ

年・・・」とあります。（※

諸説あり）

2、資忠の廟（遺骸を埋葬した

所）は不詳―島津家史料で

は御廟不詳となっています

が、古江の山久院跡の形跡



がない事から察するに、客殿を庄内に移す時墓石は元より骨も掘り上げて移したのではないか。従がつて庄内の山久院は資忠の廟所とも思われます。

3、資忠の室柏庭妙意大姉の御廟不詳―島津家史料では御廟不詳となっていますが「地理志八巻興金寺」の項に「宮丸家の譜藏人道時女子壱人、北郷七郎左衛門尉資忠之御室号柏庭禅尼之廟金興寺之地に在り・・・」とあります。

4、菩提寺造立年の記載が見つかりませんが、場所が薩摩迫である事から 二代義久が都城に進出した天授元年（二三七

五）以前であると推定します。

5、庄内の山久院は宝蔵寺（※史料に依つては宝蔵坊）の敷地

内に再興され、時を経て廃壊した宝蔵寺の跡に山久院が遷されました。これ等の経緯が「庄内地理志七十五巻宝蔵坊」

の項に色々記載してありますので「まとめ」で要訳します。

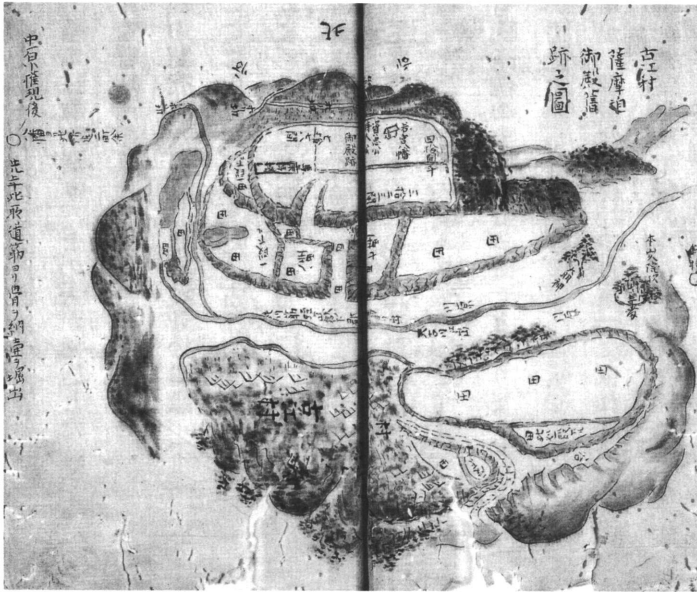
6、寺院の間取り図は仏毀釈直前の一八六〇年に編纂された

「都城島津家寺院庵画図控」に記されているものです。

まとめ

資忠は鹿児島島津家第四代藩主忠宗の六男で、正平六年九月（二三五一）筑前金隈の合戦で、拔群の戦功があったので、翌七

年四月（一三五二）足利義詮は感状を資忠に与え、日向国荘内北郷三〇〇町の地を与えて之を賞しました。かくて同年十二月（一三五二）資忠は従士十余人を率いて、現在の山田町の古江の薩摩迫に館を構え郷名を以て家号として北郷（ほんごう）と名乗りました。そして資忠は六年後の延文二年（一三五七）ここ薩摩迫の館で死去しました。



116「古江村薩摩迫御殿旧跡の図」（巻 77、本文 1098 頁）

そしてその子義久は資忠の遺骸を埋葬し法名に因んで「山久院」と号する菩提寺を建立しました。場所は古江薩摩迫の古絵図に「本山久院」と示されています。その後資忠の嫡男義久は薩摩迫を引き払い母の実家、宮丸藏人から譲られた都島に進出、天授元年（一三七五）城を築いて都城一名鶴丸城と号しました（※現在の歴史資料館のある処）。

資忠の室は古

江薩摩迫の居

館で逝去した

か、義久が都城

に移ってから都

城の居館で逝去

したか不明です

が、廟所は父宮

丸藏人の菩提寺

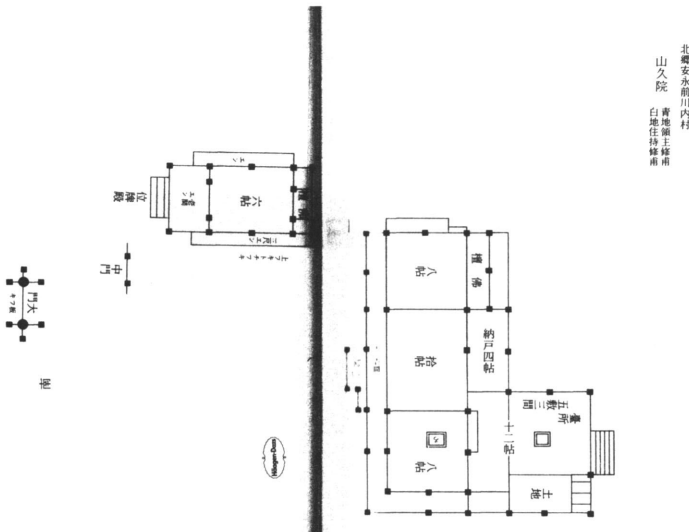
興金寺に在る事

は地理志で明らかです。

かです。

地理志に依れ

ば「それから約



二五〇年を経て安永の宝蔵寺に東岳和尚（慶長八年（一六〇三）死去）なる住職が居り、この人が隠居した時、廃壊した古江の山久院を隠居所の脇に再興した。そしてこの山久院の啓泰と言う和尚の時代に、廃壊した宝蔵寺の屋敷、客殿、庫裏を手入れしてここに山久院が移った。古江の元山久院に残っていた客殿もここに移されて茶の間になった。（※この時庄内山久院に現存する資忠夫妻の五輪の塔も移設したと推察する）。依ってこの山久院は宝蔵寺と古江の元山久院、東岳和尚が再興した寺院の諸物を覚護する事になった。そして宝蔵寺の末寺であった市頭庵も山久院の支配となった」とあります。

ついでに豊幡神社は明応九年（一五〇〇）年の創建となっていますが「都城盆地神社史料集」に依れば「宝蔵寺の開山は道顕和尚で建設年代は詳でないが頗る往時に属するものの様である。而してこの寺院に資忠を祀る一社があつたが三俣の院者志和地城内より応神天皇を奉祀した八幡神社を遷座合祀した」とあります。神仏混淆の時代、寺院の境内に神社を建立するのは不思議な事ではありませんでした。

拙宅から北に向かって百メートル十字路下付近をボノ下（坊ノ下）十字路の上あたりをフゾボ（宝蔵坊）と呼称しているのは、この辺りが宝蔵坊（後の山久院）の境内であった証です。

私達は何百年か前宝蔵坊があつた時代の呼び名を現在も使っている事になります。そして今は五輪の塔のある狭い石囲いを私達は「山久院跡」と言いますが往時の山久院の敷地はあの辺り一帯の広い場所を占めており、そして、それは元宝蔵坊の敷地であつた事が判りました。

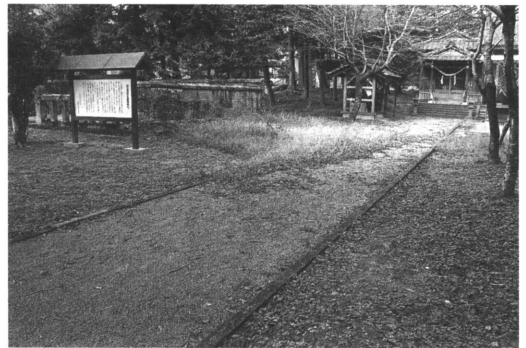
二、釣璜院

都城市役所庄内支所前の道路を挟んだ東側、JA庄内支所石蔵の裏に墓所があり、苔むした数基の墓石が並んでいます。ここが庄内の重要史跡「釣璜院跡」であります。

「由緒調」に依りますと、「北郷安永前川内村、礪溪山釣璜院 臨濟宗 二巖寺末

右は当家七代北郷尾張守数久の菩提の為に建立仕り候」とあります。寺院造立の年は調べが付きませんでした。またこの釣璜院には、数久の墓石の外に七基の墓石が建っています。

これ等の墓石を確認するに当たっては「都城島津家列祖略史」



「御先祖様御廟所御石塔御位牌調図入全」
「都城島津家領寺院由緒調」「庄内地理志」
「都城市史」等に依拠しましたが各史料
間に少々の不整合部分が散見されますの
で、この部分については各史料を総合的
に対比して私の判断で採録しました。

なお「御廟所御石塔御位牌調」の冒頭
に次の通り記されていますので転載しま
す。

一、廟所（但御遺骸を納所）

一、御石塔（但御魂を祭所）

一、御位牌（但所々に御安置）とあり
ますので要注意です。

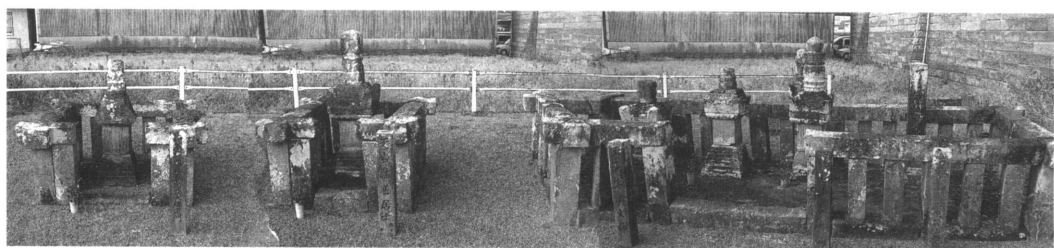
それでは並列の墓石を右廻りに辿って
いきます。

一、七代領主尾張守数久様、釣璜院殿哲

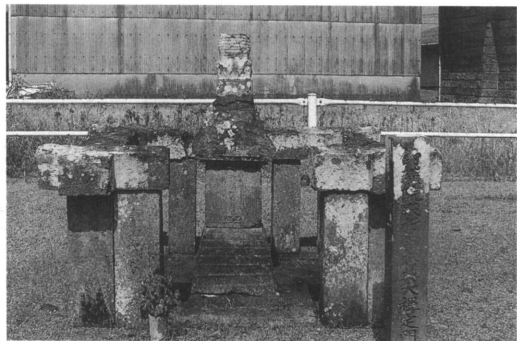
翁忠英大禪定門の御廟、※宝篋印

塔（石塔の形容）

六代敏久の長男、明応四年（二四



九五）宗家が三俣院千町
を伊東に譲った後、永正
元年（一五〇四）志布志
の新納、佐土原の伊東、
真幸の北原等が領内に侵
入を図ったがよく退け
た。永正十四年（二五一七）
は安永城に退隠 大永元
年（一五二一）三月九日
安永城で卒。



数久の廟

二、四代領主中務少輔知久様、天岩融善居士の御石塔、 宝篋

印塔

二代義久の五男、乱世に在って鹿兒島宗家と共に奮戦、年
号不知七月一日都城で卒、

六十四歳 御廟所不明

三、二代領主讃岐守義久様、無塵道端居士の御石塔、宝篋印塔

初代資忠の長男、天授元年（二三七五）城を都島に築い
た（現在の歴史資料館）。同二年八月（二三七六）今川満範

六千の大軍に囲まれた時宗家の援軍と呼応して奮戦これを
凌いだ。 年号不知六月二日 都城に於いて卒、六十四

歳 御廟は元西明寺

四、五代領主持久様の御室、和田土佐守匡盛之女、玉庵忠清大

姉の御廟、宝篋印塔

文明九年丁酉（一四七七）十二月二日 六十八歳、

五、七代領主数久様の御後室、好山妙貞大姉の御廟、委細不詳

宝篋印塔

※地理志絵図には孝山様御廟所と石囲いの外に在る。

六、十代領主持久様の長男 常陸介相久様、常德院殿了山等玄

大禪定門の廟、角柱塔

天正七年（一五七八）金石城で自刃、二十九歳。

相久は十代時久の長男で天文二十年（一五五二）の生れ、数々
の合戦に出陣し戦功を挙げた勇敢な武将でありましたが天

正元年（一五七三）の肝付勢を迎え撃った住吉原合戦の頃
から父から疑われて不和が生じ、家督は次男忠虎に譲られ
相久は金石城に蟄居させられました。疑いの晴れない相久

は天正七年（一五七八）八月父方から攻められ涙をのんで
覚悟の自刃を果たしました。

七、五代領主讃岐守持久様、福持庵殿無極道悦居士の御廟、宝

篋印塔

四代領主知久様の長男、足利義昭事件の嫌疑を受けて享徳
二年（一四五三）都城から高城に移る。更に寛正六年（一四

六五）古江薩摩迫に移る。

応仁二年（一四六八）長

男敏久と共に庄内の安永

城を築城、薩摩迫から安

永城に移る。文明二年（一

四七〇）庚寅二月十一日

安永城に於いて卒、六

十二歳

※この御廟は福持庵から

移設されたと思われる。



持久の廟

八、相久に殉死したと伝えられる相久の乳母乙守某の墓、五輪

の塔的宝篋印塔

※乳母の墓石にしては大きく過ぎると思います。近年までお乳の神様と信じられて参詣者もありお賽銭もあがっていました。

以上が島津家の諸史料に記録されている墓石です。

なお、平成四年金石城跡か

ら移設した相久自刃の場所の印石とその石囲があります。この石囲い移設の経緯は後述します。他に由緒不明の宝塔四基が建っています。

※注

「地理志」釣璜院の項に

一、当寺末寺福持庵無住廃壊に付き本尊地藏、位牌等当寺に預かり

一、当寺末寺渭春庵無住廃壊に付き本尊観音、位牌等当寺



乳母の墓

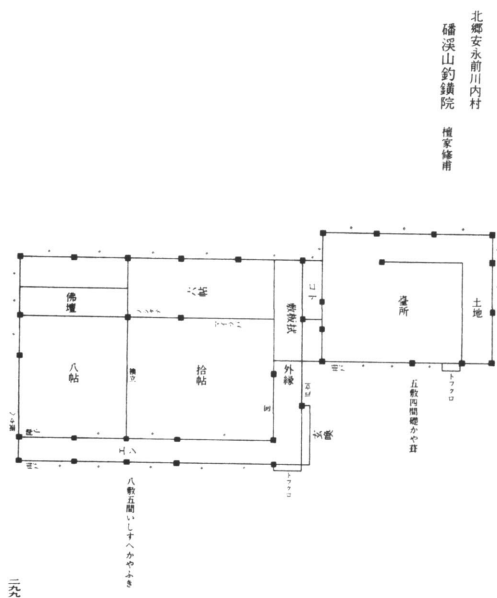
に預かり とあります。

※これは福持庵と渭春庵を釣璜院が吸収併合した事を意味します。

なお福持庵に在ったであろう持久の石塔は釣璜院に移設されて現存しますが渭春庵の義房の墓石は釣璜院には見当たらず記録にもありません。

散在する石塔の一つがそれかも知れません。

現存する墓石の内、相久の墓石のみがなぜか角柱塔であります。

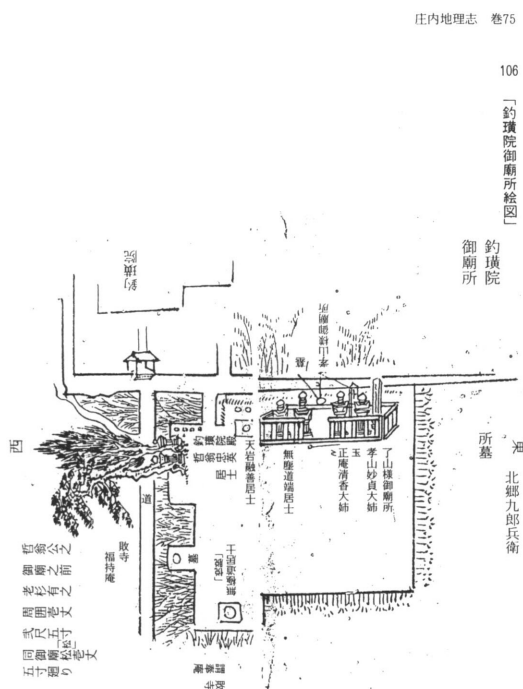


庄内地理志

釣璜院敷地の事

往時の釣璜院の建物の位置や境内の区画は手元の史料では判りませんが、終戦前、役場の裏から観瀾舎に通ずる小路の脇に雑然と放置された墓石群があつた事を記憶しています。現在の墓地区画に整備されたのは終戦直後の森林組合の製材工場建設の時か、または現在J Aの石蔵建設の時かと思ひます。

「都城島津家史料」の間取り図や地理志の絵図から見ても現在の敷地より広がった事は確実です。因みに現在のJ A敷地は昭和十年まで通称下ん学校と言っていた小学校の運動場でし



た。それ以前は明治の初め三島通庸が来た時常備隊の練兵場として造成されたものと聞いていますので多分現在のJ A 庄内支所一帯が寺院の敷地であつたと思われます。

東区の前田政右衛門翁が大正十三年に書かれた「庄内新郷立由緒記」の中に「小学校門前より南一帯の地には其の当時（注、明治二年当時）一軒の人家なし。巡查駐在所の下より町の入り口に亘り昼なお暗き一条の深谷あり、都城に通ずる旧道なり。島津家の墓地（注、釣璜院）の地勢は南に向かい傾斜地をなし、全面唐笹藪茂り狐狸の巢窟なりし」と当時（注、三島通庸が来た頃）の記憶を記しておられます。これから察しますと幕末の廃仏毀釈で破壊された釣璜院はあたかも狐狸の巢窟と言われる位荒れていたのでしょう。

相久自刃の場所の石囲い移設の経緯

「庄内地理志第七十四金石城」の項に、第十六代久定、後第十七代久長の室になられた涼屋様が金石城にお越しになった某年、相久自刃の様子を安永の古老財部新兵衛に尋ねられ、その場所を極めるため付近を掘り起こした所、金の小柄と最後の杯と思しき土器を発見した。涼屋様はこの場所を我が先祖相久自刃の場所と極め、石囲いを造らせた。とあります。

昭和六十三年私達「庄内の昔を語る会」では金石城跡を史跡探訪する計画を樹て、私と山元昭平氏、臼杵徳光氏三名で事前調査を行いました所、城跡は藪が生い茂り庄内地理志に記載されている石囲いが見当たりません。土地所有者の池田氏に話を聞いたところ「戦中戦後の食糧難時代、城の平地を唐芋畑にした時、邪魔になった石囲いを広場の隅に移動した」との事でした。私達は再度探索してこれを発見、付近の藪を刈り払い神主を招きお祓いをして後日の会員の史跡探訪も無事に済ませた次第でした。

石囲いを文化財として保存移設

平成元年二月この金石城は土地所有者池田氏から土砂採取の申請があり、市文化課では早速池田氏との間で「金石城跡における埋蔵文化財に関する協定」を結び、平成三年八月から十二月まで埋蔵文化財発掘調査が実施されました。その結果、城の機能を窺わせる遺構や遺物、縄文時代、弥生時代の土器、石器等も多数出土し、一般公開、説明会等が行われ調査は終わりました。

引き続き文化課では件の石囲いを文化財として移転保存する事になり「庄内の昔を語る会」、地区公民館長と協議の結果、

安永城本丸跡北の一隅をその移設場所と決め早速移設工事に取り掛かり程なく完成、安堵しておりました所、突然関係住民の一人から強硬な反対意見が持ち上がりました。それは「人々の憩いの場城山公園しかも児童公園の中にこの石囲いは不吉である、即刻撤去すべし」でした。私達は協議の結果、思慮の足りなかった事を認め、野海会長と伊地知公民館長が意見提供者に我々の軽率な行為を詫び、他へ移転する事に決しました。

私達は再移設先を都城島津家所管の釣璜院墓地にすべく、時の都城島津家の執事、川越 明氏と折衝し許可を頂き現在地に移設した次第でした。平成四年の事でした。

付言して置きたいのは、石囲いの中の榊の木事です。御覧の通り石囲いを覆い尽くす程の大きさですが、実は金石城にあった移設前の石囲いの中に、これこそ自刃の場所の標に置かれたと思われる無刻の小さな石は、手向けられたと思われる榊



相久自刃の石囲い

が根付き件の石を完全に抱き込み一体になっており分け離す事が出来ません。仕方なく石を抱え込んだ榊の木をウンボーで掘り上げそのまま運搬し、植え込んだのが現状であります。なぜ自刃の場所の石囲いがこの場所にあるのか語る人も少なくなりました。顛末を知る一人の記憶として後世に語り継いでおきます。

おわりに

現今、祖先を敬い祖先の行跡を訪ね、そして地域の歴史を知る事が教育方針の一つにもなっていますし、またこれこそが町づくりの基本とも言われています。その意味で「庄内の昔を語る会」の会誌「庄内」は唯一無二の郷土史教本になると思います。そんな思いもあつて毎回愚稿を寄せていますが、今回は、起稿時の思いに反して中々うまく纏める事が出来ませんでした。最後まで読んで頂いて有難うございました。

なお、現在、山久院跡、釣璜院跡、西明寺跡、二寺厳寺跡、大昌寺跡、龍峯寺跡の六ヶ寺が島津家墓地として管理されていますが庄内の山久院と釣璜院は、東区の島田昌一氏が立派に管理をしておられる事を申し添えて稿を閉じます。



地名「庄内」の誕生と変遷

鷹尾町 山下 真 一

はじめに

現在の都市で「庄内」と聞けば、多くの人は庄内町を思い浮かべるものと思います。したがって、江戸時代の初めに起こった島津家の内乱「庄内の乱」も庄内町を舞台に繰り広げられたものと考える人も多いのではないのでしょうか。しかし、「庄内」という名称の由来は古く、またその範囲も今とはずいぶん異なっていました。

それでは、その「庄内」という地名はいつ生まれて、その範囲はどのように変遷していったのでしょうか。本稿では、「庄内」という名称が生まれ、現在の庄内町に引き継がれるまでの過程について明らかにしたいと思います。

一 現在の庄内町に至るまで―明治と現代の概観

現在、「庄内」といえば庄内町と「庄内地区」を思い浮かべます。

庄内町は現在の行政区名で特に説明はいらないでしょう。「庄内地区」とは、関之尾町・庄内町・菓子野町・乙房町の範囲をいいます。こうした認識にはそれなりに歴史的な経緯があるのです。

ここでは、まず、明治時代以降における庄内についてみたいと思います。

庄内が近代の行政区名になったのは、明治二年（一八八九）五月一日です。このとき、安永村と西岳村をあわせて「庄内村」と称しました。

明治二二年に庄内村が誕生したのは、明治二一年四月二五日に明治政府から公布された市制町村制に基づいています。この市制町村制は「地方共同ノ利益ヲ發達セシメ、衆庶臣民ノ幸福ヲ増進スルコトヲ欲シ、隣保團結ノ旧慣ヲ存置シテ益之拡張シ、更ニ法律ヲ以テ都市及町村ノ權義ヲ保護スル」ことを目的として發布されたものです。それは明治政府が新たな国際環境に対応可能な「挙国一致」体制を目指して、比較的独立閉鎖的で自治的要素が強かつ面積の狭い江戸時代の村を改編するためでした。この市制町村制を受けて、宮崎県でも翌二二年四月一日の実施を目指してさまざまな調査や地元との協議を行います。その結果、明治二二年五月一日に宮崎県内に新たな百ヶ町村が

誕生したのですⁱ。庄内村もその一つです。

その後、明治二四年七月四日に庄内村から西岳村が分かれⁱⁱ、大正一三年五月一日に「庄内町」となりました。さらに、昭和三年七月一日に西岳村と合併して「莊内町」となり、そして、昭和四〇年四月一日に都城市に吸収合併されて、今日に至っています。

二 庄内村の誕生と変遷

ここではまず、明治二二年に庄内村が誕生するいきさつからみていくことにしましょう。

先日したように、明治二二年市制町村制が明治政府から公布されると、宮崎県においても新たな町村制の施行に向けて準備が進められました。当初は、明治二二年四月一日に施行する計画でしたが、作業が若干遅れたことにより、時の宮崎県知事岩山敬義は三月二九日付けで五月一日に町村制を施行すると達したのです。

その準備の過程で、いろいろな調査や地元（戸長・郡長が中心）からの意見聴取が行われたことが記録として残っています。それによると、庄内村は安永村と西岳村あわせてできた村だということがわかりますⁱⁱⁱ。そしてこの両村について、事前に調

査した「町村沿革調届」には次のように記されています^{iv}。

町村沿革調届

安永村

往古八田鹿兒島藩島津家ノ支流北郷氏ノ領分ニシテ、日州庄内
都城中一外城ノ総称ナリ、而シテ安永村ヲ四ヶ名と称ス、南前
川内、北前川内、西岳村、中霧島村（以上命名年月日不詳）之
ナリ、明治三年午正月、鹿兒島藩庁ノ政令ニヨリ、都城ヲ分割
シテ上庄内、下庄内、三俣ノ三ヶ郷トナシ、明治三年午三月上
庄内郷建設ノ際、西岳村ノ小部分（関ノ尾川崎部落）ヲ裂キ中
霧島村ヲ分別シ、安永村ノ内南前川内、北前川内ニ合セテ一村
トナシ、安永村独立村トナル、明治五年廃藩置県ニ際シ上庄内
郷ヲ庄内郷、下庄内郷ヲ都城ト改称セラル、村名ニハ変更ナシ
西岳村

往古上文ニ同シ、明治三年午正月上庄内郷ノ所属トナリ、
明治三年午三月安永村四ヶ名ノ部分ヲ分離シ、西岳村ノ小部分
（関ノ尾川崎部落）ヲ安永村ニ附属シ、其ノ余分ヲ以テ西岳村
独立村トナル、明治五年廃藩置県ニ際シタルモ村名ニハ変更ナ
シ

（中略）

右之通取調及御届候也

明治二十一年十一月六日

安永村外二ヶ村

戸長

鬼塚棟五印

宮崎県知事 岩山敬義殿

まず、安永村については、もともと北郷氏の所領であり、江戸時代には庄内都城の中にあつた一つの外城の総称であつたとしています。そして、その中には当時「四ヶ名」と称した、南前川内・北前川内・西岳村・中霧島村を含んでいました。つまり、当時の安永村は現在の庄内・西岳地区に加え、山田町の中霧島を含んだものでした。それが、明治三年（一八七〇）正月に都城が分割されて、上庄内・下庄内・三俣の三ヶ郷が設置されますが、同年三月に安永村が上庄内郷に所属した際、西岳村の一部である関ノ尾と川崎を安永村に入れ、これに南前川内と北前川内を合わせて一村とし、新しい安永村となりました。なお、このとき中霧島村についても分別しています。明治五年の廃藩置県に際しては、上庄内郷を「庄内郷」、下庄内郷を「都城」と改称しますが、村名についての変更はなかつたようです。

次に西岳村についてみると、江戸時代は安永村の一部でしたが、明治三年正月に上庄内郷の所属となり、同年三月に「安永

村四ヶ名」を分離して、西岳村の一部であつた関ノ尾と川崎を安永村に付属して、そのほかを西岳村として独立させたとしています。そして、明治五年の廃藩置県の際にも村名に変更はありませんでした。

ここで注目されるのは「庄内」という名を冠した郷が登場していることです。すなわち、まず明治三年に都城を分割して、上庄内・下庄内・三俣の三ヶ郷ができたこと、明治四年の廃藩置県に際して上庄内郷を庄内郷、下庄内郷を都城と改称したことなどです。こうした状況を経て、明治二二年に「庄内村」という「庄内」の名を冠した行政村が正式に誕生しました。この村名の由来について、明治二二年の「北諸県郡新町村区域調」の「新村名選定ノ事由」^vでは「庄内村ノ名ヲ付スルハ、該地方ヲ総称シテ庄内郷ト唱フルヲ以テナリ」と記しています。つまり、明治初期にこの地域を庄内郷と呼んでいたことが理由であつたのです。

なお、西岳村が庄内村と合併して「庄内村」となることについて、西岳村の住民からは独立したいとの意見が出されていました。しかし、それは採用されませんでした。その理由については、同じ史料で次のように述べています。すなわち、「両村（庄内村・西岳村）ともその戸数をもつてみると、やや大村のよう

に見えるけれども、西岳村は資力が十分といえない。住民は今後、荒蕪地を開墾するという漠然とした空想でもって概算して、一村立ちしても不足なしと申し立てて来たが、こうしたことはとても採用できるような申し立てではない。この二村は地形だけでなく、人情においてもあえて差異はないことから合併させて一村とした。」とされています。

以上、ここで述べたことをまとめると、明治三年、三島通庸が地頭として赴任した時に都城盆地を三つに分割し、上庄内郷・下庄内郷といった庄内を冠する郷ができました。明治四年には、安永村を中心とした上庄内郷が庄内郷となり、そして明治二三年に行政村である庄内村が誕生したのです。

三 江戸時代以前の「庄内」

それでは、明治以前、すなわち江戸時代までの「庄内」という地名はどのようなものだったのでしょうか。ここでは、江戸時代以前における「庄内」という名称についてみていきます。「庄内」の名称は南北朝時代（一四世紀中頃）にはみることができるようです。それは、永和二年（一三七六）六月五日付けの野辺盛久書状に、九州探題今川了俊の大将今川満範らが「庄内」へ下向することが記されています^{vi}。

下つて、天文一二年（一五四三）八月には、北郷忠相・忠親より霧島山へ山田の水田を寄進したとあり、その願文に「右祈願者、為武運長久・家門繁栄・庄内泰平・万民快樂」と記されていることから^{vii}、彼らが「庄内」を自らの領地として意識していたということがうかがえます。

その後、江戸時代の初期の慶長五年（一六〇〇）、北郷氏が庄内に復帰した後に藩主島津忠恒から北郷忠能に宛てた史料には、「庄内之儀、雖為譜代之地」とあり^{viii}、「庄内」を北郷氏が代々所持してきた地として記しています。また、島津家老から北郷家の家臣に宛てた同年の史料には「庄内之儀、北郷殿依為御旧地、幸侃被改無道、始都之城所々被返遣候」とあり^{ix}、「庄内」は北郷家のもともとの所領であるので返還する」といった旨のことが記されており、ここにも庄内が北郷家、のちの都城島津家が支配する所領であったことをうかがうことができるのです。

さらに時代が下つて、寛文一二年（一六七二）の藩主島津光久から都城へ宛てた書状をみると、藩主光久の実子である忠長が相続した都城島津家について、「庄内跡職」と記しています^x。このように南北朝時代には「庄内」が地名として現れており、一六世紀中頃から「庄内」は北郷氏の領地として意識さ

れていたことがわかります。

ところで、江戸時代後期に都城島津家の記録方によって編さんされた地理・歴史の書物として『庄内地理志』という史料があります。これは全一一三巻からなる大部なものです。その中に「庄内」という地名について、その誕生のいきさつが述べられています。

これによると「庄内称号、太古は嶋津御庄内と相唱申候処、嶋津御家号と成に付、中比より庄内と唱来、御庄内を霧之海と申候、朝霧不晴之間、高山より庄内を見降し候得は、則大海に無紛相見得、其内之高山故霧嶋と唱候由」^{xi}とあります。すなわち、「庄内」の称号について、太古は「島津御庄内」というていたが、島津氏の家号となったために、「庄内」と呼ぶようになったとしています。この太古というのは、「島津御庄内」が「島津荘の内にある」という意味であると思われるので、島津荘が誕生した一一世紀以降のことと思われます。そして、「庄内」と呼ぶようになったのは、「島津氏の家号となった」という記述から考えると、島津家が誕生した鎌倉時代以降でしょう。また、庄内は「北郷・中之郷・南郷」から成るとされていることから、その範囲は、現在のほぼ都城盆地を指すものであることがわかります。

この記事から『庄内地理志』について考えると、都城島津家が作った『庄内地理志』の「庄内」とは、都城島津家が治めていた都城盆地一帯のことです。この書物は都城島津家が治める都城盆地の地理・歴史について記録されたものということになります。

以上のことから、江戸時代までは「庄内」といえば都城島津家の所領で、その範囲は都城盆地一帯であったと理解できるでしょう。

ただ、江戸時代は都城島津家が治めていた都城盆地を指して「庄内」と言っていました。が、「都城」という呼称も併用されていました。それは、北郷氏（都城島津氏）の所領という意味で使用され、古文書にもよく鹿児島島の島津本家から都城島津家のことを「都城」と呼んでいたことからもうかがえるのです。

おわりに

以上、地名「庄内」の変遷について述べてきました。最後にまとめると次のようになります。

江戸時代までは「都城」と「庄内」が併用されており、「庄内」とは都城盆地全体のことを指していました。それが、明治三年、三島通庸が都城盆地を分割したときに郷名として「庄内」が現

れ、安永村を中心とした「庄内郷」が誕生します。そして、明治二二年に西岳村と庄内村を合併して「庄内」の名を冠した行政村「庄内村」が誕生し、以後、当地域が「庄内」と認識されるようになったのです。

- i 「宮崎県史 史料編 近・現代3」〔解題〕五〇頁、宮崎県、一九九五年）
庄内村から西岳村が分かれたことについては、明治二二年、町村編成の中ですでに西岳村住民から独立が望まれていたが、独立するだけの資力がなかったことを理由に庄内村に編入されることになりました。ちなみにこのとき横市村は庄内村との合併を望んでいたが、五十町村だけでは一村立ちが困難としてこれも採用されませんでした（明治二二年一月二四日付「町村制施行につき内申」〔宮崎県史 史料編 近・現代3〕一三五号文書）。
- iii 前掲、明治二二年一月二四日付「町村制施行につき内申」（『宮崎県史 史料編 近・現代3』一三五号文書）
- iv 明治二二年一月「北諸県郡町村沿革調書」（『宮崎県史 史料編 近現代3』一五四号文書）。
- v 「宮崎県史 史料編 近・現代3」一八九号文書。
- vi 「宮崎県の地名」六四二頁（平凡社、一九九七年）。
- vii 「北郷忠相・忠親連署寄進状」（『都城市史 史料編 古代・中世』中世一五九八）。

viii 「島津忠恒宛行状写」（『御文書令臨乾』…『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ6』「北郷文書」五五）。

ix 「島津家老中平田増宗・鎌田政近連署知行宛行状」（『都城島津家史料』三一―二七）。

x 「島津光久仰出書写」（『御文書令臨附録二』…『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ6』「北郷文書」二〇六）。

xi 「庄内地理志」卷六十六（『都城市史 史料編 近世3』五三九―五四一頁）。



史料

西区の前田溝

西区 乙 守 保 正

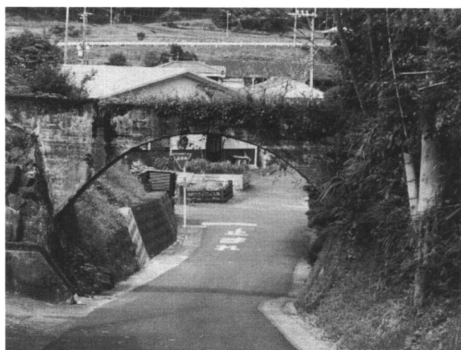
とは殆どありません。

名前の由来？昔は前田と言う地名がありました。（後掲の地図参照）この前田溝の前田、現在多くは住宅地に成っています。が、終戦直後までは今の西区消防詰所南側一帯は水田でした。（詰所横の県道への道は無く水田の畦道） また大橋クリニック（前宮下医院）南側から前之馬場住宅地までは水田でした。住宅化が進む中、昭和四十年代になると水田の休耕政策が始まり、水田用水が不要となり、残った用水路の一部が目につきます。上の写真は県道霧島線白坂畳店の手前七牟礼さん宅の門前、道路側溝とブロック積みの上に水路があります。

左の写真、上は西区の共同墓地慈照院への途中、坂中にある



西区に「前田溝」というのがあります。この西区のマエダミゾに関わったことのない人は、前田用水（前田正名開削）と混同したり、前田用水系の一つと思われたりしています。この混同を避けるため「庄内土地改良組合」には水源地の字名を取って「花立原用水」として届けてあります。普段私たちは「マエダミゾ」と呼び、「花立原用水」と呼ぶこ



アーチ型の水路。昭和三十四年建設と刻字されています。（それまでは丸太を組んだ櫓の上に厚板のU字溝、古くなって水が漏れ落ちていた）下は安永城址（本丸）西側を通る農免道路中ほどにある金石城址への橋と前田溝（建設時不明 農地保全工事時では？）いずれも現在使用されていません。



上の写真は使用されなくなつた前田溝の最終排水路口です。池田平八郎氏宅（前田溝の最終水田だったのを盛土して宅地化）門北側の境界で、北前用水（水源 関之尾女滝落水）に開口しています。五十mぐらい奥に小さな湧水沼があり、現在も少量の水が流れ出ています。

途中二、三mの高さの所に水路跡があり土管が下りており、更に二mぐらい上がると畑や宅地が広がっています。

前田溝の水源

庄内の霧島線と関之尾線が別れる信号を右折すると農免道路、城山の西端に差し掛かる所で小田川沿いに左折、通称カシ



タンタン道路に出ます。これを進みトンネル（上は前田用水路）を抜けると右手にイケン谷、橋を渡ってY字路を右折、ここらをスガムタと呼んでいます。この道路脇小田川に「前田溝の水源堰」があります。平成九年当時の水系委員長の長谷場次夫氏が「自動水門施設の設置」に関する

要望書を庄内土地改良区に提出され、平成十二年中満和平氏の関係機関への働きかけで現在の「半自動転倒堰」（写真）が設置されました。それまでは中央で分離され東半分はハンドルを回す巻上げ式（改造年不明 雷鳴の時の操作が一番怖かった。岩切数秋氏談）西側半分は堰板一枚一枚を取外す方式で、流失防止のため1mぐらいの長さの八番線それぞれ結び付けられていました。記念碑はそれまでの絡み堰を石造に改造した時のものです。

記念碑の刻字

正面 堰埭改築記念碑

左側面 工事委員 乙守善兵エ 大神伊助 中村浅四郎

東藤吉 末原利夫 七牟禮傳七

担当委員 岡村彦二 蒲生傳七

溝見廻 中村甚作

背面 □□□ □□

堰埭ナリ□モ年々ノ修

理ニ堪エズ故ニ地主相

謀リ工費五百五十円ヲ

□□茲に石造堰埭ニ改

□□ 請負者大石松太郎

右側面 起工 昭和四年三月二日

竣工 全年四月三十日

総反別六町歩

地主 四十五名

池ノ谷の排水堰

池ノ谷の湧水も用水として利用しており、大雨の時などの排水、堆積した土砂の排土のために堰が作られています。左の写真のように高い土手の上にあります。給排水時は堰板を一枚一枚はめたり外したりしていましたが、外す時が落ちそうで危険でした。平成八年現在のチエンブロックの巻き上げ式に改造(得能鉄工所)されました。排水路は埋め込まれています。

記念碑の刻字

正面 水神

左側面 溝見廻 蒲生治平衛

明治三十四年四月吉日

背面 用水役 七牟禮傳七

外二名

石工 折津源九郎

右側面 監督 中村浅四郎

同 安田文蔵



現在の前田溝の最終排水路

右の写真は農免道路からカシタンタン道路に入った新口で



記念碑崩落流失

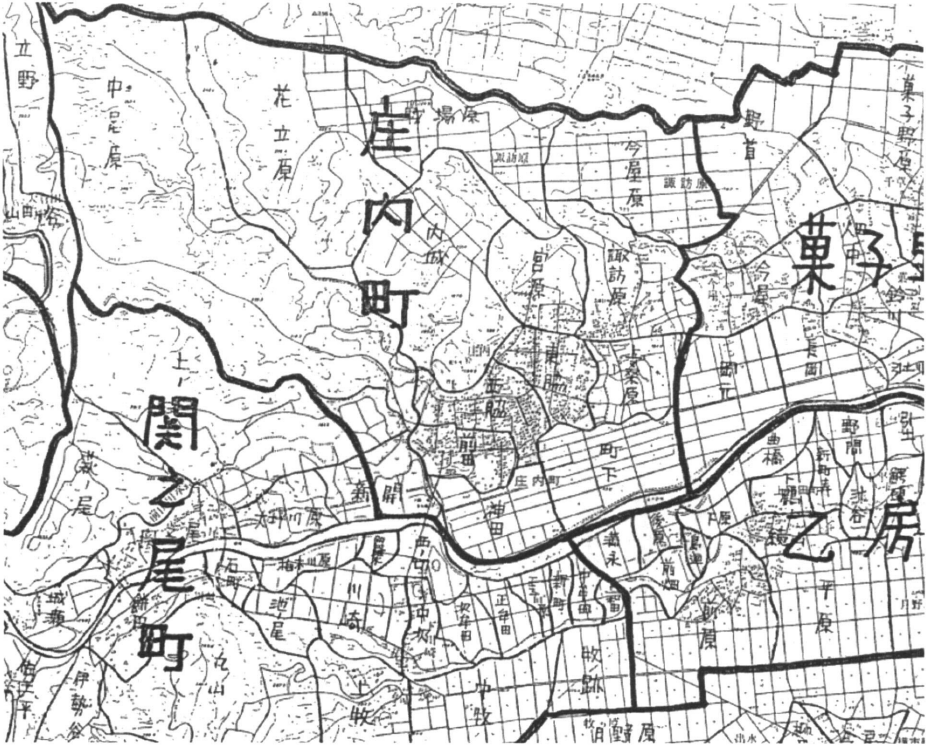
す。ここが現在の前田溝の最終田で中央が最終用排水路です。小田川へ開口しています。「前田用水路」は取添城址と金石城址の間を通っております。

平成五年・二十二年と豪雨に見舞われ、堰や橋に流倒木が掛り川を堰き止める形になり、水田の埋没・山林の崩落など甚大な被害を受けました。平成二十二年には水源堰の直ぐ上流の橋が川を堰き止め、道路が流路となり、堰の直ぐ下が崩落（左の写真）、記念碑が流失しましたが、百mぐらい下流の堰で見つかりました。（発見者永岩実秀氏）当局の援助によりカシタンタン一帯の水田は復旧され、水田はたわわに稔るようにな

りました。平成五年当時、「土地改良組合」に未加入だったので、当局の世話になるのだからとこの年加入を決定しました。「前田用水」との混同を避けるため「花立原用水」と登録したことは前述の通りです。加入資金として共同所有の山林を処分し、残りを受益地主に分配しました。

以上前田溝の概要を述べてきましたが不明点が多く、関係者到大変お世話になりました。有難うございました。

次ページの地図は旧庄内町を四町分割する時の基礎資料ではないかと思われます。現在の西区の南半分は「前田」となっています。水田「神田」とは一段高くなっており、南面は北前用水路に取り囲まれる形になっています（北面境界は旧西岳往還？）。この一段高い土地への水路が開削されて水田化、「前田」の地名が生まれ、そして用水路名も「前田溝」となったのだらうと短絡的ではありますが、こう推定したいです。前田が無くなった現在の前田溝（花立原用水）に登録の実面積六・三ha、組合員三十二戸となっています。時移り人変わってマエダミゾの名称はどうなるのでしょうか？このままの前田溝であってほしいものです。



池ヶ谷 落し
 明治三十四年四月竣工
 水用役員 七半乳傳七外
 監督 中村浅四郎蔵
 水路見廻 薄生次兵衛
 石工 折津原九郎
 前田溝取入口
 昭和四年四月竣工
 役員 乙守善兵衛大神伊助
 中村浅四郎東棟吉
 米原利夫七半乳傳七
 担当委員 岡村孝二 薄生義憲
 水路見廻 中村甚作
 工事費 五百五拾円
 総反別六町歩 地主四五名
 石工 大石松太郎

新成 昭和五十四年 839 20

※1 上表 庄内土地改良区に残されていた前田溝に関する唯一の資料です。

※2 上の地図 西脇・東脇など初めての地名がいっぱいです。この地図の作成に携わられた方のご苦労話が聞きたいです。

還暦記念に諏訪神社へ鳥居寄贈

東 区 鎌 田 康 正

賑やかな夏祭り（六月灯）に子供達と一緒に参りした事や、

冬は正月元旦の初詣で厳かな雰囲気の中、家内安全を祈願した若い頃の思い出がたくさんもった諏訪神社です。この神社の

第二鳥居の基礎の部分に「平成二年度・還暦記念」とステンレ

ス鋼板で掘り込みがしてあります。この鉄骨の鳥居は昭和五年

（六年生まれで、平成二年度（平成三年一月二十八日）に還暦

を迎えられた多くの有志による寄贈と、同窓生役員による労力

奉仕があつて建立が実現したのです。あれからもう二十二年、

この鳥居奉納の企画がなされてから、完成するまでの成り行き

を、私の古びた昔の日記帳を頼りに、毎日少しずつ思い出しな

がらペンを執ることにしました。

先日（八月三十一日）神社へ写真撮りに行き、帰りに野崎俊

春宮司宅へ立ち寄り、第二鳥居建立について会誌「庄内」に投

稿する事を伝えました。平成二年当時の神社地区役員は、乙房

区四名、川崎区二名、他の区は一名ずつで計十四名だったそうです。現在は十名になったそうです。平成二年当時の役員総代は宮島区の万代正雄氏で、会計が私達と同窓生で町区の来住芳照君だったそうで昭和六十年から平成八年まで役員をしていたそうです。電化店を経営していたので、その当時の夏祭りや城山での戦没者慰霊祭などに使われた拡声器の音量が高く、賑やかであつたあの頃が懐かしいですね。

長年神社の役をしていて、神社の事を良く理解していたのでしよう。神社第二鳥居が木製で腐食が早い事など知っていたのでは。平成二年度は自分達の還暦がもうすぐだ。平成二年九月二十六日（水）夜、帖荘園に於いて、同窓会役員の召集あり、男子十二名、女子九名。「元氣じゃったね」が挨拶で久しぶりです。今晚は芳照君の話が始まる。「後四ヶ月で還暦祝の日がくるので、当日還暦同窓会を計画しているのですが、皆さんのご意見を聞きたいのですが。」

賛成多数で直ぐ決まる。同窓会名簿を作成するので、自分の地区を県外居住者全部調べて（県・町・区・番地・電話番号）十一月末までに来住電化店まで提出すること。場所・帖荘園、会費千円、前払いで終了する。平成三年一月十日（木）夜、来住電化店で役員会、名簿作成完了お礼、男子八十二名、女子九

十五名、計百七十七名、乙房区が役員がいないので誰か回ってくれないかと言うので、内村重光君と益田正人君と三人で乙房地区を回る。乙房地区は乙房小卒業生で毎年同窓会を実施しているの、還暦同窓会には参加しないという事。ただし諏訪神社での還暦祝賀祭には参拝するという事であった。

各役員は県外への往復葉書出しを早急にすること。ここから鳥居の話になる。「現在諏訪神社の第二鳥居が木製で腐食が早いので鉄製で作ればと、役員会でも話が出たのですが、今日は皆さんに相談したいのは、この鳥居を私達の還暦記念に奉納したらいいのでは」と、芳照君が言ったら、みんなびつくりして経費の問題で話し合いが長くなる。

「鎌田君が農機具修理関係の鉄工所を営んでいるのでどげんけ。鉄骨の加工をお前がしてくれんね」と芳照君が私に言った。「鳥居を作ったことはないが」と言ったら、「今ちょうど正月じゃが、霧島神社へお参りして、形や色



を見れば出来ないこともないだろう」と言ったので、「建立時の工事が大変だろう」と言うと、「工事関係は男子役員がみんな協力すれば出来るのでは。砂利・砂は俺が都合する」と芳照君が言った。

計画を立てるということで決まる。この話は、二十八日の還暦祝賀終了後の挨拶で芳照君が参列者に、役員会で決定した事を報告とお願いをするという事であった。還暦祝当日は役員は全員朝九時までに庄内小学校へ集合すること。

一月十八日、東区女子役員花村テツさん宅より電話があり、直ぐ行ってみると女子役員、前田ミエさん、久保ヨシ子さん、瀬戸山チ子さん、今井フミ子さん、宮元フサ子さんの五人が来ていた。同窓会時の準備や、もし鳥居が出来た時の女子役員がする色々な仕事の事であった。

二十三日は私一人で同窓会名簿落ち記入や、出席者名札書きなどする。二十四日（木）夕方、益田正人君と都北町の私の兄宅へ（学心塾）会場用の横断幕を二枚書いてもらいに行く。二十七日（日）夕方正人君と帖荘園に行く。芳照君も来ていた。三人で玄関入口と舞台正面に横断幕を取り付けなど明日への準備をする。

一月二十八日（月）晴天、朝少し冷え込む。還暦祝の日にふ

さわしい朝を迎える。正人君が朝早く「おーい」と言って出て来た。時間が早かったのでお茶を飲みながら、鳥居作成などの話をしながら九時前まで家に居る。

小学校へ行ってみるとほとんど役員が来ていた。久し振りの小学校、みんな子供の頃に帰って話がはずむ。卒業式（昭和二十年三月）の時、空襲警報が鳴り中断した事や、プールの話や想い出話が一ぱいあった。時間が来たので御軍神など拝んで、諏訪神社へ向かう。丁度良い時間に到着。社務所前に大部分の参加者が来ていた。

久し振りに会う人が多く「元気じゃったね」の連発。第二鳥居の基礎部分を見てみたら大分腐食していた。神社の参拝は鳥居をくぐった時点から始まっていると、ある本に書いてあった。手水舎で手を洗い、上の本殿まで九十九段の石段を登るのに二回ほど休み、木々にかこまれた奥ゆかしい本殿へ着く。

神社関係の人や役員などで拝殿の間が一ぱいになる。十時過ぎより還暦者お祓いの儀式が始まり約一時間位で終了。十一時頃迄に下の社務所へ還暦者全員集まり、野崎宮司、総代万代正雄氏外役員の方々同席の上、全員にお守りや記念品が渡された。総代からの挨拶の後、来住芳照君から記念撮影と還暦同窓会の開催の説明があり、そのあと直ぐ「一月十日の同窓生役員会で

還暦記念寄贈について、社務所前にある第二鳥居が腐食がはげしいので、鉄製の鳥居を建立するよう決定しました」と話すと、参加者の中で色々御意見がありました。芳照君が「私も同窓会の役員もしているし、神社の役員もしているし皆さんにお願いします。お一人二千円の寄付を頂ければ、二十数万円で出来るのでは」と言いますと、参加者の中から「それだけで出来るかな？金銭的に無理じゃないの」と意見がある。

芳照君が「建立時と基礎工事関係は男子地区役員が十数名いるので、全員で協力して三月の春祭りまでには、立派な鳥居を建立しますので、御賛同宜しくお願いします」で拍手があり、満場一致で決定する。野崎宮司、総代万代正雄氏同席の上終了。そのまま第二鳥居階段に集まり、記念撮影に入る。百十二名であつた。

終了後（十二時半頃）帖荘園に於いて還暦同窓会が始まる。役員は男女共大変忙しい。受付・案内・接待・進行など、県外から帰省している人もたくさんいた。恩師の出席者は川島先生、森田先生、野海先生、岩佐先生、帖佐先生の五名であつた。踊りやカラオケで会が盛り上がる。舞踏する人も多かった。賑やかな同窓会であつた。疲れたが有意義な一日であつた。役員は後片付けが夕方まで、女子役員の久保ヨシ子さんは帖荘園に勤

めていたので夜遅くまで大変だったと思う。鳥居作成がこれから始まることになる。

二月に入ると芳照君から鳥居加工に入るのは何時頃になるのかと、催促の電話が何回もある。私も農業機械の修理だけでなく、加工・溶接などが忙しかった。二月十一日（月）鳥居鋼材が入る。芳照君へ連絡して神社へ行き、古い鳥居の高さ・幅など寸法を取り、切り込みに入る。建立時に必要なユニック車を借りて東区妙見坂上の鍋倉鉄筋工業（鍋倉文雄君、私の従兄の息子さん）へ行く。諏訪神社鳥居建立の話をして、運搬と建立日の吊り上げに協力をお願いしたら、何時でも良いと言ってくれた。夜は同じ協同班の瀬戸口建設（瀬戸口武光君）宅へコンクリートミキサーを借りに行く。「何時でもあいているから使いなさい」と言ってくれた。

二月二十一日（木）午前十時、ユニック車で鳥居鋼材を神社まで運搬してもらう。二十四日ミキサーなど神社へ。二十五日（月）古い鳥居取りこわし・基礎打ち七名、来住、益田、内村、久保田、福永、長友、鎌田。女子、前田、久保、花村、今井、宮元五名。三月三日が日曜で大安であるので、この日に建立することに決まる。

三月二日（土）午後より明日の準備など。一輪車、補強用木

材、梯子、三脚、仮枠用材料、大工・左官用道具など。古い鳥居の片付け。夕方野崎宮司宅へ明日の建立についての報告に行く。

三月三日（日）大安、晴天に恵まれた、諏訪神社の第二鳥居建立日である。朝、準備をしていると椎屋国治君が「今日は会社が休みだから俺も工事の加勢に行く」と言ってきたので神社までいっしょに行く。役員全員集まっていた。直ぐ鳥居組立などして基礎周辺、鳥居などにお酒と塩でお祓いをすませ、三・四人位ずつに組んで、ミキサー係、一輪車、砂利、砂、水、こんな仕事をした事のない人もいた。仮枠作りは福永春夫君が専門で、「俺の弟子にならんけ」と言ってみんなを笑わせていた。

鳥居組立も立派に出来た。鍋倉文雄君がユニック車で来る。直ぐ鳥居を吊り上げる用意が出来た時、女子役員から「お茶の準備が出来た」の声、「休息」と誰かが大声で言った。女子役員六名、前田ミエ、久保ヨシ子、花村テツ、今井フミ子、宮元



フサ子、瀬戸山チヅ子。千草の臼杵道夫君も出て来てくれた。男子は十四名であった。

仕事の手分けなどして仕事にかかる。ユニックやミキサーが動き出す。慎重に慎重に吊り上げた鳥居を基礎に降ろし、福永君が仮枠を取り付け、コンクリートを流し込み、木材や梯子で柱を動かぬよう固定する。ユニックは吊ったままで時間を置く。昼食は社務所で女子役員の美味しい手作り料理であった。

午後は基礎周辺のコンクリートで補修や、鳥居に足場を作成、ミキサー返納など。建立は三時頃までにはユニックのロープを取りはずす事が出来た。三時半頃より休息。お茶を飲みながらみんな「ヨカッガデケタネエ（良いのが出来たね）」と喜んでいった。来住君がヒトンギョ（お祓い）の用意がしてあるので二・三人で鳥居足場から、あとの二・三人は階段から投げて下さいとのこと。女子役員による手作りの赤・白の餅と五円硬貨、飴、駄菓子などたくさん用意がしてあった。

現場を片付けたり掃除をしていると、参道入口付近が賑やかになって来た。ヒトンギョがある事を知っていたのか子供達や大人で第二鳥居下はいっぱいになる。ヒトンギョが始まる。大騒ぎとなる。あつと言う間に終わる。みなさん大喜びで帰って行った。鳥居建立も無事終了。多くの有志の方々、男女役員に

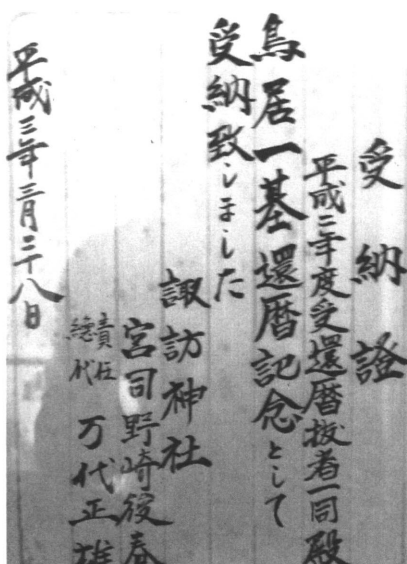
よる奉仕のお陰です。

三月十日（日）神社、片付け、鳥居二度目の塗装、本殿までの階段横の雑木・草など刈払い、基礎洗い出し。五名、来住、鎌田、内村、益田、椎屋。

三月二十三日（土）原口製材所より幅三十五センチ、長さ一米ートル五十センチ、厚さ三センチの板をもらい、寄贈者名の記入を私一人でする。来住君と二人で二十七日夕方社務所内に写真と名板を取り付けに行く。

三月二十八日（木）午前十時より本殿に於いて鳥居引き渡し式の神事が行われた。出席者神社役員、同窓会役員、鳥居建立に携わった関係者約四十数名であった。十二時より帖荘園にて食事会あり。

この鳥居寄贈の執筆にあたり、多くの昔の思い出を、話を教えて頂いた役員の内村重光君、久保ヨシ



子さんに感謝致しております。多くの有志による寄付と役員一同の温かい奉仕で無事引き渡し式も終わりました。振り返って見ると来住芳照君の企画が良く出来ていて、還暦同窓会も思ってたより多くの同志が集い、今だかつてない素晴らしい同窓会であつた。思考力にあふれて、実行力のある来住君であつた。

緑の木々にかこまれた、お諏訪神社の境内に立つ朱塗りの第二鳥居が何時までも末永く、参拝者へ幸を呼ぶ鳥居であつてほしい。今後の諏訪神社の発展をお祈り申し上げ、ペンを置くことにします。有難う御座いました。

奉納者名簿 ○は同窓会地区役員

東区

今村 功	○鎌田 康正	梶原 節
○益田 正人	竹下 文夫	椎屋 国治
阿久井芳治	井之上幸男	阿久井良幸
坂元 誠	福留 光英	阿久井好子
○花村 テツ	奥田 ミキ	中島 芳子
久保田洋子	今村 トミ	鬼塚カツ子
塚野トキ子	菓子野ヨシエ	益田 ツミ

町区

内田 律子	椋田 香子	山田 和子
樋口ミイ子	山下 和子	有馬 ナミ
杉村 和子	力丸 照子	

西区

来住 芳照	山元 一信	立野雄一郎
久保田久良	○今井フミ子	有田セツ子
宮迫 サチ	溝之口トミ	

川崎

大神 哲	清水 五男	○宮元フサ子
丸山美代子	中村千鶴子	江口ミツエ
蒲生多加子	有島 光子	

○竹中

文男	花原 重治	佐土平正雄
----	-------	-------

岡元 貞男

川崎 秋義

○宮田 春子

徳重フミ子

平川 節子

迫田チヨ子

大村フサ子

川崎アサ子

福留タミ子

関之尾

○末原 鶴雄

坂元 賢一

田川 一郎

坂元 信一

猪ヶ倉カズ子

○瀬戸山チヅ子

堀之内ムツ

谷口ミイ子

今屋・菓子野

○菓子野重隆

原口 明

田村 初男

川久保 巖

岡元 俊哉

前田 ミエ

○久保ヨシ子

長岡美代子

山元テル子

徳丸セツ子

西原ミサ子

落合ウメ子

崎山ミツエ

別府マツミ

鶴村美恵子

千草

臼杵 通夫

○長友 幸雄

志々目清二

平山 次義

鎌田 夏雄

○満木 アキ

平山 ミエ

宮島

○内村 重光

今村 辰夫

福田 義男

有馬 アイ

原口 ヤエ

乙房

有田 正照

細山田初男

宮元 義則

満行 貞雄

益留 照夫

黒木 正巳

内 藤則

立野 四男

川畑美樹男

長倉 浅茅

馬込チヅ子

定益ミサ子

平田

○福永 春夫

森山 利國

福永 忍

徳留 玉善

福留 義輝

新町 清治

西原 義美

徳丸 隆

竹之下正人

永井 義治

○平島 秋義

○田中 泰子

蔵満トミエ

加藤キヌエ

内村セツ子

遠矢ノキ子

徳丸ミチ子

吉永サダ子

蔵満フミ子

平田 ハツ

横市町

今山 光則

還暦者外寄付協力者

池田 義雄(大阪)

福永 忍(都城)

森島サツキ(都城)

有田 久夫(庄内)

帖佐 トキ(庄内)

有馬 福美(庄内)

山崎 有高(庄内)

徳永 至彦(庄内)

機材協力者

砂利・砂

都北産業(株)

コンクリート用ミキサ―

瀬戸口建築大工

代表 瀬戸口 武光

ユニツク車

鍋倉鉄筋工業

代表 鍋倉 文雄

名板

原口製材

代表 原口 豊彦

還暦祝に諏訪神社へ鳥居寄贈の記事が平成三年四月十四日付け宮崎日日新聞に大きな見出しで掲載された。

「高さ四・五メートルの新鳥居

都城市 還暦記念し諏訪神社に」

庄内小噺

庄内の村かい親子二人連れで都城みやごんじよン金御岳せえ 夜が明
くい前、出かけっ行っきやたげな。

フウフウゆっせ金御岳みやごんじよン頂上せえ上がっきやった。朝日
が東かい上がっ、都城みやごんじよン盆地が霧きりン中なにあつた。

そんな中高千穂ちのほン峰が海うみの中に浮かんじよいごっあつ
た。

親おやっどんが

「見てみよ。霧島ちゅあ ゆう言たもんじゃ。霧きりン中な浮
かんじよいごっ あいがね。」

息子が

「ほんなこっじゃ。こっかい 見っと 下したん方は 海うみのご
たいな。」

日が高ウ 登のぼつくつと、霧きりが晴はれつ、都城みやごんじよン町まちが 広々つ
見えつきた。

「ワ。おっちゃん。日本な ひりな。」

「なぬゆちよつとよ 馬鹿ばかが。こき見えちよつた 都城
じゃつど。日本な こいの三倍ばつかつ あつとよ。」

庄内町情報

庄内地区まちづくり協議会

平成二十三年度事業報告書

(平成二十三年四月一日から平成二十四年三月三十一日まで)

東庄内地区まちづくり協議会 会長 釘 村 美千也

一・事業概要

協議会発足一年目の平成二十二年度は、県内では口蹄疫や鳥インフルエンザの発生、新燃岳の噴火があり、さらに追い打ちをかけるように平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災は、未曾有の被害をもたらし、一年を過ぎた現在でも東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染の問題や膨大ながれきは復興の大きな妨げになっています。被災地において復旧・復興の取り組みを進めるうえで、地域づくりにおいて要となる地域の絆やコミュニティの再生・活性化が求められています。それは、一朝一夕に出来るものではなく、普段から住

民が参加しいろいろな意見を出し合い、行動することが大切であると考えます。

このような中、協議会では各専門部会が協議を行い基本方針の確認や地域の歴史や観光資源を活かした特色ある計画が立案され、当初計画として五年間の事業計画を策定しました。そして発足二年目の平成二十三年度は、この計画に基づき各部会ごとに本格的に事業を実施してきました。幾つかの事業については、新聞やテレビ等のマスコミでも取り上げられ協議会のPRも図られたと思っています。今後も協議会キャッチフレーズの「みんなでつくる 住みよいまち 庄内」を目指し、二十四年度も事業を展開して参ります。(平成二十四年度庄内地区まちづくり協議会役員は表一を参照。)

二・主な事業内容

① 庄内川堤防こいのぼり看板作製・設置

庄内地区の春の風物詩である「庄内川こいのぼり」を、安全に見物して頂くために、エムズガーデン様駐車場への案内看板を作成しました。(こいのぼり設置は庄内商工会青年部)

② 関之尾滝ライトアップの実施

夏の風物詩で、幻想的な風景が訪れた人たちの目を
楽しませている、関之尾滝ライトアップは例年、地元
有志でつくる「関之尾滝ライトアップ実行委員会」に
より開催されていましたが、二十三年度からは、庄内
まち協が主催することになりました。

③ 庄内みどころ看板の設置（七ヶ所）

地区内小中学校四校、地区公民館、市民広場、日向
庄内駅前設置しました。

④ 「心のプレゼント運動」のぼり旗作成

地区内の小・中学校四校では、毎月「心のプレゼン
ト運動週間」を設け、明るいあいさつ（やさしい心）・
ありがとう（感謝の心）・人が喜ぶこと（思いやりの心）
の三つの柱で運動を進めています。今回、学校と家庭
と地域が一体となって、この運動を推進しようという
目的で、のぼり旗六十枚を作成しました。庄内中美術
部員がデザインし、ピンクを基調にハートのマークや
文字があしらわれた、とても温かみのあるのぼり旗が
完成しました。各自治公民館にも掲示します。

⑤ 中学生を対象に郷土学習事業を開催

地域の子どもたちに自分たちの住む庄内の歴史や良

さをもっと知ってもらおうと、庄内中一年生を対象に
した郷土学習を十月二十一日に開催しました。『庄内
の昔を語る会』会員の方三名を講師に招き、マイクロ
バス三台に分かれて、地区内の史跡等について説明を
していただきました。

⑥ 庄内中学校庭に標語看板を設置

庄内中では「心のプレゼント運動」をさらに一歩進
めるため生徒会が中心となって標語を作成し、校門か
ら入った正面に設置しました。「さあ、発信しよう
心のこもった あいさつを」と大きな字で書かれてお
り、学校の登下校時にしっかり目に入りそうです。

⑦ 庄内地区三大イベントへの協力

庄内地区スポ・レク大会、庄内ふるさと祭り、庄内
川一周YOU遊駅伝大会に協力しました。

⑧ 城山公園管理受託作業

協議会発足一年目に引き続き、今年度も市と地区内
公園（約四ヘクタール）の管理受託を締結し、年六回
の草刈り清掃作業を実施しました。併せて、市に対し
て眺望改善の要望を行い、杉の伐採をしてもらいまし
た。

⑨ 「庄内地区まちづくり協議会ホームページ」の開設

庄内地区と協議会の取り組みを広く知っていただくために、ホームページを開設しました。協議会の活動や、地区の各種イベント等を随時掲載中です。

⑩ 「庄内地区まちづくり協議会だより」の発行

八月、十月、十二月の三回発行

表1

(平成二十四年度庄内地区まちづくり協議会役員)

役職	氏名
会長	釘村 美千也
副会長	福村 修
〃	馬籠 英男
〃	今ヶ倉 毅
自治公民館活動部会長	今ヶ倉 毅 兼務
地域づくり部会長	福田 定見
教育文化活動部会長	大川原 紀美生
健康福祉部会長	大河原 弘子
環境整備部会長	徳丸 義彦
事務局長	朝倉 脩二
監事	田川 豊
〃	萩原 忠子



中学生郷土学習事業



環境部会開催のようす



防犯ベスト贈呈式



庄内中標語看板設置

平成二十三年度事業報告

庄内の昔を語る会

一・季刊誌「庄内」第十八号の発行

発行日…平成二十三年十二月二十日

発行者…庄内地区まちづくり協議会、庄内の昔を語る会

発行部数…三百冊

印刷所…(株)文昌堂

内容…再刊にあたって

野海正治先生を悼む

歴史研究

史料

庄内情報

追憶・随想

史跡探訪

事務局だより

編集後記

投稿 頁数

一名 巻頭

一名 巻頭

二名 十二頁

三名 三十七頁

三名 十三頁

十名 二十一頁

一名 二頁

六頁

一頁

二十一名 九十二頁

販 売…一冊千円

庄内地区まちづくり協議会一括購入

配布先 冊数

市役所関係各課 五

地区小・中学校 四

報道各社(市政クラブ) 十一

願心寺(題字) 一

執筆者・関係者 三十九

まちづくり協議会 四十

合 計 一〇〇

二・史跡探訪(庄内地区ライフセミナー)

① 日 時…平成二十三年九月二十六日(月)

八時出発、十九時三十分帰着

探訪先…高千穂峡、天岩戸神社、天安河原

参加料…四千元(昼食代、入場料含む)

参加者…三十九名

② 日 時…平成二十四年三月二十二日(木)

八時出発、十八時三十分帰着

探訪先…吉野ヶ里遺跡、立花邸御花

参加料…五千円（昼食代、入場料含む）

参加者…四十一名

三、庄内歴史講座

開講式

日時…平成二十三年十一月二十七日（日）

十九時～二十時三十分

場所…庄内地区公民館

内容…なぜ地域の歴史を学ぶのか、講師紹介、講座内容の

説明、意見交換

第一回

日時…平成二十三年十二月十日（土）

九時～十五時

場所…車に分乗し各史跡を回る

内容…釣璜院跡―伊勢谷遺跡―丸山遺跡―平田隠れ念仏洞

―乙房神社―菓子野地下式横穴墓―菓子野古墳跡―

安永城址・仮屋跡―戦場原―薩摩迫―稚児桜―諏訪

神社―山久院―豊幡神社

講師…坂元徳郎氏、山下謙二郎氏、都城市教育委員会文化

財課（菓子野横穴墓の説明）

第二回

日時…平成二十四年一月三十日（月）

十九時～二十時三十分

場所…庄内地区公民館

内容…庄内の歴史古代① 先土器時代、縄文時代、弥生時

代、古墳時代

講師…山下謙二郎氏

第三回

日時…平成二十四年二月二十四日（月）

十九時～二十時三十分

場所…庄内地区公民館

内容…庄内地区の遺跡について

発掘状況の写真や発掘された土器、石器、腕輪、刀

剣類なども展示

講師…都城市教育委員会文化財課 栗山葉子氏、武田浩明

氏

四、会議等

平成二十三年通常総会

日時：平成二十三年七月二日（土）

十九時三十分～二十一時

場所：庄内地区公民館

内容：①会則について、②役員案について、③今年度計画

について、④その他

出席者：二十九名

理事会

① 平成二十三年五月二十二日

② 平成二十三年六月二十日

③ 平成二十三年七月十一日

④ 平成二十三年十月六日

⑤ 平成二十四年二月十六日

五. その他

① 道守みやざき交流会二〇一一inn都城

日時：平成二十三年十月八日（土）

十三時四十五分～十五時

主催：道守みやざき会議 国土交通省宮崎河川国道事務所

内容：「庄内の街歩き」を「庄内の昔を語る会」と「関之

尾むかえびと」でガイド

② 庄内中学校地域巡見学習

日時：平成二十三年十月二十一日（金）

十四時～十六時三十分

主催：庄内地区まちづくり協議会

内容：庄内中学校一年生（七十名）を対象とした歴史伝承。

バス三台に分乗し庄内地区の史跡などを巡った。

ガイド役：坂元徳郎氏、坂元勲氏、山下謙二郎氏

③ 宮崎県政策課題研究研修

日時：平成二十三年十月二十六日（水）

十三時～十四時

主催：宮崎県

内容：宮崎県職員研修の一環として庄内町を訪問。山下会

長が庄内の歴史や持永邸の歴史、庄内の昔を語る会

の活動などについて講演

④ 庄内ふるさと祭り

日時：平成二十三年十一月五日（土）～六日（日）

主催：庄内ふるさと祭り実行委員会

内容：庄内小学校体育館に庄内地区の遺跡や神社・人物な

どの写真を展示

追憶・随想

「庄内」第十八号刊行を祝して

福岡県在住 横山 信美

この八月、庄内の昔を語る会の前会長坂元徳郎さま並びに現会長の山下謙二郎さまから第十八号への寄稿要請を頂きありがたくお引き受けた次第です。

ふるさとの山は

ありがたきかな（啄木）

朝な夕な眺めた高千穂の峰

雄大な霧島連山です。

私は昭和十二年庄内小学校に入学して、あの忘れることができない戦中・戦後の厳しい社会生活を体験してきた者の一人です。

今こうしてペンを走らせている瞬時も六十七年前の八月六日

の広島市、八月九日の長崎市への原爆投下、そして間もなく八月十五日の信じられなかった敗戦の日、当時の状況を想い浮かべているところです。

我が国は終戦を機に旧憲法（大日本帝国憲法）を廃止、新憲法（日本国憲法、昭和二十一年十一月三日制定公布、昭和二十二年五月三日施行）を頂点に民主主義日本に生まれ変わって今現在に至りました。

これを機に私は当時の郵政省国営の専門学校を受験、二年間戦後の新しい教育を受けました。そして九州最大都市に転出し、福岡県立福岡高等学校に入学、卒業と同時に大学法学部（法律学科）へ進み、当時の「法学士」と県の「教職員の免許」取得し、ようやく人並みに社会人として務める立場になりました。万事に感謝しています。

歴史に目を閉ざすものは

未来に盲目である

（一九九一年六月、東西ドイツ統一の大統領

バイツ・ゼッカーの連邦議会での演説）

彼は歴史というものの大切さを述べています。私の手元には送って下さった「庄内」第三号から第十六号まで本棚に並べてあり、必要な時にいつでも取り出して目を通せるようにしてい

ます。古文書や貴重な日誌からの記事、又庄内ふるさとの方言で述べてある記事、知っているつもりが全く知らなかった事実など、なつかしく大変勉強になっています。

「庄内」発刊以来、諸先輩がたのたゆまざる存続の努力と情熱のたまものによって、現在も価値高い評価があるものと信じます。

私たちは過去を振り返り、生きるとは、学ぶとは何かを考察し、若き時代に恵まれなかった数々の事を克服して、今ようやく平和な社会に恵まれ、自助努力すれば希望達成可能な時代を迎えています。そして現世代の私たちに出来ることは、教科書にも無い貴重な各自の体験を、若い世代の皆さんに語り伝える事が大切ではないでしょうか。そう思いませんか。

青春とは年の数ではない

希望ある限り人生は若い

(サムエル・ウルマン)

「継続は力なり」

「温故知新」

「女性のスマイルは金なり」

右の名言は種々な場面で前向きの例で用いられます。私も学生時代から現在もあらゆる機会に活用しています。

ふるさと都城の市長、長峯誠さまに対しては都城市長初当選の際に祝辞を申し上げたところです。それを機に平成二十年七月には都城市の一層の御発展を願って、五項目に分類して私なりの提言を申し述べました。それについて同年九月にご検討の結果と実現について親しくご回答を頂き、都城市庄内出身、福岡県在住の私にとっては、この上ない感動を受けました。略称「ボンパク」「軽トラ市」等々でした。

以上「『庄内』第十八号刊行を祝して」と題して私なりに想いのまんまを述べさせて頂きました。終りに会長さま他役員の方がた、会員の皆様がた、そして読者の皆さまの一層の御多幸を祈ってペンを置きます。

平成二十四年九月吉日

朝日たださす霧島の南麓に地をしめて

大淀川の川上に模範の里と仰がるる

わが庄内のゆかしさよ

庄内小学校の校歌を口ずさむ時、いつも我が学び舎の名をあげむと勇気づけられますね。

回想 私の外務省時代

東 区 坂 元 勲

はじめに

私は昭和二十七年、二十歳のときに外務省に入り、四十三年間勤めて平成七年、六十三歳で定年退職してその翌年、故郷庄内に帰って来ました。それから十六年間、ふと気がつけば若いとばかり思っていた私も今年で八十歳。そろそろ身辺整理をするトシになり、この機会に自分の人生の来し方を振り返ってみようと思うようになりました。

それと言うのも「陸の孤島」と呼ばれるほど中央から隔絶した宮崎県の、そのまた山奥の庄内出身の私が、思いもよらず中央官庁の花形とも言われる外務省に入り、しかもアメリカを振り出しに五カ国十八年間を海外勤務で過ごせたこと、また、沖縄返還交渉とか、日中平和条約交渉など戦後の重要な外交案件に、下積みの身ながらいくらかでも関わったことなど、外務省の中でも私ほど色々な体験をした者もあまりいないのではない

かと思いい、この機会に回想の筆をとることとした次第です。

上京・大学受験

思えば今から六十年以上も前の昭和二十五年、高校を卒業したものの大学進学の間ではなく、庄内の同級生、北郷、持永、末原の諸君が皆東京の大学に入っていたのに、私一人取り残された思いで、庄内町役場の書記として町民税などの徴収に走り回っておりまして。そのような折、さきに上京してアルバイトをしながら東京の大学の夜間部に通っていた次兄の勧めがあり、役場を二年間勤めた後退職し、昭和二十七年上京して東京外国語大学を受験しました。受験の動機は、私が十歳の時満州国（現・中国東北部遼寧省など）に家族で旅行したこともあって子供の頃から外国への関心が強く、また中学・高校を通じて地理、歴史に加えて英語が好きで、また多少得意でもあったからでした。

ところが何と肝心の英語の試験でももの見事に落第したのでした。

試験官の話す英語を聞いてそれを書取る試験ですが、試験官の話す言葉が全く聞き取れない。かろうじてラビット（ウサギ）と云う単語だけ分かって、もしかして「兎と亀」の物語かなと

思ったのですが、答案用紙には受験番号と名前だけを書いて白紙で提出しました。そんな私がその後何と外務省に入るようになるのですから。

外務省入省

その経緯というのは次のような次第です。

私の高校時代の親友だった財部の花房君が東京の早稲田大学に入っていて、アルバイトに参議院のエレベーターボーイをしていました、その時に知り合って仲良くなった参議院事務局の荻原さんという方のお父さんが外務省の人事課に勤めておられました。こうした友人・知人たちの紹介があつてとりあえず、外務省事務官の試験を受けることになったのです。係官の面接のあと簡単な常識試験がありました、忘れもしないその中に「一ドルは何円か」という問題がありました。宮崎県の山奥から出てきた私がそんなことを知る由もありません。困って居たら、人事課の試験監督の人が、「一ドルは三百六十円だ」とそつと教えてくれました。カンニングして試験に受かったに等しく、裏口入学で外務省に入ったような次第です。

先程宮崎の山奥と言いましたが、なにしろ当時都城から東京まで急行列車でも三十二時間はかかっておりまして、東京の

人に自分は宮崎県出身だと言っても知らない人が多かったものです。そんな私が思いもかけず外務省に入り、しかも、最も華やかな情報文化局に配属されたのですから戸惑い、かつ驚きです。もつとも最低ランクの「外務省雇」という身分で、月給が安くて生活は大変でした。それでも何とか大学だけは出てなければと思い、翌年の昭和二十八年に早稲田大学法学部の夜間部に入りました。大学の二年生からは文部省の奨学金をもらえるようになって授業料の心配もなくなり、庄内のおふくろさんには迷惑をかけることもなくなりました。

ところで、日本の役所、中央官庁は身分社会というか、年功序列というか、そういうものにきびしく、とくに外務省の場合、外交官上級試験、外交官中級試験というのがあつて、それらの試験に受かったものでなければまず将来の見通しはなく、一生下積み of 役人生活を余儀なくされるのです。

外務省というのはこういう一種の身分社会ですから、試験を受けず裏口入学ではいったような私の先行きは知れています。そこで昭和三十三年大学を卒業した機会に民間企業に就職しようと思ったのですが、その年は「なべ底景気」という戦後最悪の不況のときで、私立の夜間部を、人より三年遅れて入学し、五年もかかって卒業した者の就職先などあるわけがなく、やむ

なく外務省にそのまま残るということになった訳です。

私が外務省に入った昭和二十七年という年は、サンフランシスコの対日講和条約が発効し、敗戦国日本はアメリカの占領から解放され真の独立国となった年です。それまで占領軍とか進駐軍と呼ばれていたアメリカ軍は、講和条約と同時に結ばれた安全保障条約のもとで駐留アメリカ軍となりました。

以来四十三年間、思いもかけない貴重な体験をすることが出来ました。先にも述べた沖縄返還交渉とか中国との平和条約交渉などのほか、東京で初めて開催された先進国主要会議いわゆる東京サミットや、日米経済閣僚会議などの重要国際会議のいくつかに事務方の下働きとは言え関与できたことなど、今では良き思い出となりました。また、総理大臣や外務大臣がアメリカや東南アジアなどを訪問する時には随員の端くれですが度々同行することができました。

たびたびの海外出張

こうした外国出張で最も印象に残っていることが二つあります。その一つは、今の天皇陛下が皇太子であられた頃、昭和天皇のご名代で東欧のルーマニアとブルガリアを訪問されたとき、宮内庁に頼まれて両殿下に随行したことです。当時この両

国は共産主義国でしたからこのような機会でもなければ私などがとてもいけなかったところでしたので幸運でした。

もう一つは、昭和四十四年、沖縄返還交渉で佐藤総理がアメリカ訪問されたとき同行できたことです。随員末席の荷物がかりのようなものでしたが随員であることには違いありません。今年は沖縄が日本に返還されて四十年の節目の年ですが、このとき佐藤総理とニクソン大統領との会談で沖縄の日本返還が決まりました。私達は特別機がアメリカ西海岸サンフランシスコを離陸して帰国の途についた時、愛知揆一外務大臣や木村俊夫官房長官など皆で盃を挙げて喜び合ったことでした。

佐藤総理はこの二年前の昭和四十二年の十一月にも訪米しており、そのときは沖縄返還に先立ち小笠原諸島を返してもらった約束を取り付けました。当時小笠原の父島にアメリカ海軍の通信基地がありましたが、十二月に海軍の輸送船が物資補給のため横須賀の海軍基地を出発する、については日本側の報道関係者の取材を許可するということになりました。それに政府関係者としては外務省から私、海上自衛隊から三等海佐の方、総理府から沖縄担当の事務官一人の計三人がその輸送船に乗って行くことになりました。これが戦後初めての政府関係者の小笠原視察となりました。横須賀港を出港して三日後の朝、小笠原父島

の二見港に着きました。そこで二泊し、島内視察のほか、そこに住むことを許可された少数の欧米系日本人の代表の方から政府への要望などを聞きとり、それから四日かけて Guam 島に着きました。いま Guam 島は沖縄に駐留するアメリカ海兵隊を移転させる問題などで注目を浴びており、また観光地として、大勢の日本人が訪れることでも有名ですが、当時はまだロクなホテルはなく、私達はアメリカ海軍基地の宿舎に泊めてもらい、翌々日週二便ある飛行機で東京に帰りました。行きは一週間の船旅が帰りは五時間、こんな海外出張をした者は外務省では私しかありません。よい経験をしたものだと思っております。

オーストラリア勤務

この後、オーストラリアの日本大使館に赴任して三年五ヶ月駐在しました。担当は日本文化を紹介する広報と文化で、下手な英語で講演しなければならなかったりしてそれなりに苦労しましたが、私の家内などは日本食では少しく不自由はしていたものの、アメリカで生れた二人の男の子が現地の小学校に入り、あつという間に現地に溶け込み、自分もこのままここで住んでいたなどすっかりオーストラリアの生活を楽しんでおりました。そして昭和五十年に帰国の命令を受けて日本に帰り、昭和

五十七年、中東イラクの日本大使館に赴任するまで外務省の報道官の補佐官などとして七年間東京勤務となりました。

この間、昭和五十七年、これまでの私の仕事振りが少しは認められたのか、「外交官中級試験合格者と同等の資格あり」、として中級職に登用されました。正規の公務員試験を受けずに謂わば裏口入学で外務省に入った私が、中級とは言え外交官として認められた訳で、庄内の山奥から出てきた私としては全く思ってもいないことでした。

戦乱のイラクへ

昭和五十七（一九八二）年、中東のイラクに行くことになりました。人事課の調査官から「君はアメリカとかオーストラリアとか先進国で楽をしてきたから今度は環境のきびしい国に行け」と申し渡されました。中東は今でこそ、イランやシリアやエジプトなどで民衆革命などが起きて世界の注目を集めていますが、当時の私は日本が輸入する石油の九〇パーセント以上を中東地域に依存している重要なところだと知識としては知ってはいたものの、イラクがさて中東のどの辺にあるのかと改めて地図で調べる有様でした。

その当時のイラクは、サダム・フセイン大統領が独裁政治を

行っており、しかも中々の野心家で、我こそ中東アラブ世界の盟主たらんと意気込んでいました。一九八〇年、隣のイランと国境線をめぐって紛争となり、九月イラン側に攻め込みました。いわゆるイラン・イラク戦争の勃発です。初めはイラク軍が優勢でイランに攻め入ったのですが、二年経った一九八二年にはイラン側が盛り返し、国境付近で激しい戦闘をくり広げておりました。丁度そのときに私のイラク赴任が決まったのでした。日本とイラクの間は、JAL・日本航空とイラク航空が週一便ずつ飛んでいましたが、戦争が激しくなつて首都のバグダッド国際空港が何時イラン空軍の爆撃に遭うかもしれないと言うのでJALは運航を止めてしまいました。それで日本人乗客はとなりのクウェートまで飛んで、そこから日本航空の連絡バスで十二時間ばかりかけてバグダッドに行っていました。私もそのようにしてクウェートまで飛び、ホテルで一泊して翌日、イラク大使館の物資調達の大型ワンボックスカーに乗せてもらつてバグダッドに行きました。その当時イラクでは唯一の貿易港であるバスラという港がイラン軍の機雷封鎖で使えなくなつて外国からの輸入が思うに委せず大変な物資不足でした。そこでバグダッドの日本大使館は月に二回クウェートに生活物資の調達に来ておりました。

クウェートのホテルを早朝四時ごろ出て、車で一路北上します。市街地を離れてしばらく行くと大きな砂山にぶつかりました。初めて見る砂漠の始まりです。緑豊かな日本の柔らかく温かい風景を見なれたものにとつては何と異様なものでしょうか。さらにイラクにはいつてからは、これが茶褐色に代わる土漠と言うほとんど不毛の大地です。その中のガタガタの一本道をひたすら猛スピードで北上します。途中昼食の時間になつてまばらに生えたヤシの林に車を停めたのですが、車の外は砂嵐が吹き荒れておりました。どんなものかと試しに車から出てみると砂が顔に当たつて痛いこと、慌てて車内に引つ込みました。こんなかたちで海外の事務所に赴任した者は外務省で私人だったようで、まったく貴重な経験ができたものと思つております。

このように大変な思いをしてバグダッドの日本大使館に赴任しました。肩書きは一等書記官・領事で、イラクに在留する自国民つまり日本人の生命財産を守り保護する任務でした。

当時イラクはフセイン大統領の独裁政治のもとで猛烈な勢いで国造りをやつておりました。なにしろ石油資源が豊富にあるのですから資金、つまりオカネには不足はない。田中角栄首相の日本列島改造論よろしく、イラクの北から南まで掘りくり返

すような勢いで公共事業を行っていました。道路や通信施設、石油の精製工場、住宅マンションなどの建設工事ですが、こうした工事には、日本の企業↓例えば鹿島建設、大成建設、千代田化工建設、三井建設など日本の大手建設会社や石油輸入の大手商社が進出していました。従って日本企業の駐在員や技術者及びその家族が多数在留しており、首都バグダッドには小さいながらもこれら駐在員子弟のための日本人学校もありました。

私がバグダッドに赴任したのは六月で、とりあえず単身で、家内と子供を呼び寄せるまでホテル住まいをしておりましたところ、ある朝空襲警報のサイレンがなりました。イラン軍の空襲です。イラク軍の対空砲火がはげしく応戦します。私は怖いもの見たさで部屋の大きなガラスドアを開けてみたらイラク軍の飛行機が一機ホテルの方に飛んでくるのが見えました。本当に恐怖にかられ、これは大変なところに来たものだと思ひました。イラン側の攻撃はそれだけでなく、南部イラク第二の都市バスラも危うくなっているとの情報が伝わりました。バスラの周辺地域には三菱重工業とか東洋エンジニアリングなど日本企業の技術者たちが大勢居りましたが、危険だから日本大使館としては早く避難させた方がよいという判断で、領事の私が

大使館の避難勧告を伝えるために現地に行くことになりました。それでわずか一ヶ月前に十二時間かけてきた道を引き返すことになりました。バスラという町は摂氏五十七度を記録して世界一暑い都市としてギネスブックに載っているとかで、とにかく暑い。夕方街について日本の大成建設が建設したホテルに入ったところ、意外なことに街は戦争しているとは思えない静かでした。ところが何と、太陽が西に沈んだ途端猛烈な大砲の撃ち合いが始まりました。後で聞いた話では昼間は非常に暑いので両軍とも戦車の陰にテントを張って休んで、夜になって戦闘開始するのだそうです。翌日各社の代表者を集めて会議を開き避難勧告を出し、せっかく来たので四・五日滞在して、日本企業が建設中の工場など視察しました。日中、四十五度を超える暑さの中を歩き回ると頭がクラクラしてくる。暑さに慣れていない私には本当に応えました。そのうち宿泊していたホテルもイラン軍の砲撃に遭う危険があるとかで閉鎖になったのでバグダッドに戻りました。くたくたに疲れており、こんな暑いところでこんな厳しい仕事をやらせられては死ぬかも知れないと本気で思ったものでした。実はバスラに出張する前に、東京に残っている家内宛に手紙を書いて、「イラク軍の攻撃を受けているバスラに出張することになった。わが身に万一の事が

あつたら子供達をよろしく頼む」と遺書らしいものを書いたのです。家内はそれを読んで心配で眠れなかったとあとになって言っていました。

首都バグダッドは当時人口約四百万人の大都会でしたが、外人クラブのテニス場があるくらいで娯楽施設などはありませんでした。だから日本人同士でお互い家に招んだり招ばれたり、皆で酒を飲んでカラオケを楽しむぐらいです。イラクの隣国のクウェートとか、サウジアラビアは同じイスラム教でも宗派が違つて戒律がきびしくて絶対に酒は飲めない。ところがイラクは年に一日だけ酒を売らない日があるだけで、あとはレストランに行つてもビールなど好きに飲めるので、どちらかと言うとアルコールに目のない私は助かりました。

バクダッドとは「平和な町」と言う意味で、今から千二百年位前、紀元八世紀ごろはイスラム世界の中心地で文字どおり平和で文化の栄えた都^{メッカ}だったそうです。郊外に出ると、かの有名なバビロンなど古い遺跡が点在していて、歴史好きの私は時間の許す限り古代遺跡の見学に出かけました。もつとも外交官には旅行制限があり、いちいちイラク政府の許可を取り付けなければならぬ煩雑さがありました。

一九八五年、私の任期三年も終わりに近づいた頃、イラン・

イラク戦争は五年目に入り一進一退の膠着状態で、首都バグダッドは比較的平穏な日が続いておりました。

ところがある日、突然爆発音が響き、爆風が窓を揺るがせました。これがイラン軍のミサイル攻撃の始まりでした。ミサイルはソ連製のスカッドミサイルで、カドフィ大佐率いるリビアからひそかに輸入したものと後に判明します。このソ連製ミサイルは精度が悪いらしくどこに落ちるか分からない。おそらくは大統領官邸など政府機関の集まる市の中心部を狙っているものように、日本人が多く住む新興住宅地は比較的安全であるうと思われていました。しかし三日に一発、五日に一発の頻度とはいえ、仮に空港が狙われ空港が閉鎖される事態になればどうなるか。実は五年前の開戦時、イラン軍のバグダッド空襲の際、パニック状態になった外国人居留民は一斉に車で陸路、西のヨルダンに避難しようとして、国境の検問所で大混乱を呈したと聞いておりました。今回そのような事態にならないとも限らない。私はヨルダン大使館の担当官と協議して、バグダッドから西方八百五十キロのヨルダンの首都アンマンまでの避難経路を実地踏査することにしました。早朝にバグダッドを出発して、西へ真直ぐに伸びる一本道をとるところの砂漠のオアシスで休憩をとりながら国境に着き、そこでヨルダン大使館の担

当官と落ち合って首都アンマンに向かいました。十三、四時間はかかったでしょうか。このような経験をしたのは外務省では後にも先にも私一人だったようです。

イタリア・ミラノに転勤

このようにして三年の任期を迎えましたが、事態が落ち着くまでいま暫く居てくれ、との大使の要請で五ヶ月延ばして十一月、北イタリアの中心地ミラノの総領事館に転勤になりました。これにはイラクでのきびしい多忙な任務のあと、御苦労さん、ゆつくり休みなさいという慰労の意味があつたようです。私の専門語学は一応英語となっており、イタリア語やフランス語の知識はないので、ヨーロッパの勤務はまずないものと思っただけにこれもまた思ってもない幸運でした。

ミラノは人口約百五十万、フランスのパリと並んで芸術とファッションの街として有名です。旅行シーズンになると日本から国会議員など訪問客の接待に忙しいのですが、普段は大して忙しくない。休みの日には古いローマ帝国時代の遺跡を見に行ったりして楽しみましたが、何よりも音楽が盛んで、有名なミラノ・スカラ座と言う歌劇場はフランスのパリ国立歌劇場と並んで世界のオペラの殿堂と言われております。ここのチケッ

トを入手するのはなかなか大変でしたが、それでも何とか手に入れて在任中の三シーズンはオペラを堪能できました。

それに、イタリアはワインがうまい。おいしいイタリア料理でワイングラスを傾けるといふ至福の時を持つことができました。

難民支援財団に出向

ここにも三年五ヶ月勤務して、昭和六十四年三月帰国命令が出ました。帰国準備をしているとき、東京の外務省人事課から電話があつて、今度は難民関係の仕事に就いてくれと言うことでした。帰国して分かったのですが、その頃、ベトナムの共産主義体制を嫌って逃げて来た南ベトナムの難民、いわゆるボートピープルやカンボジアからの難民を受け入れて日本語教育をし、日本社会に適応できるように訓練をする施設が東京や神奈川県などに四ヶ所あり、本部が東京都内にありました。そのような施設を外務省が直轄事業としては出来ないのです、アジア福祉財団という民間団体に委託費を出して運営を委託しておりました。その財団の理事長が法務大臣や文部大臣などを歴任した奥野誠亮といううるさ型の国会議員でした。外務省を休職という形をとってその団体に出向して三年間勤めましたが、実は昭

和五十五年にも外国報道関係の財団に二年間出向しておりましてので計五年間休職して民間団体出向で、こうしたことも外務省では私一人ではないかと思えます。帰国前に電話で了解を求めてきたのもこうした事情によるものでした。私としては外務省で外交官試験出の若い課長のもとで気兼ねして働くより、難民財団の総括課長でいた方が気楽でよいし、月給も二割増でした。

それがある日突然変わりました。十五年ぶりベトナム難民がボートで逃げて来て、長崎県沖の小さな岩場に漂着したという知らせでした。その難民たちは長崎県大村市のわが収容施設に入れたのですが、そのあと難民が漁船に乗ってベトナムと書いた旗を立て、来るわ来るわ、全部で二十九隻、二九五〇人でしたが、何とこれが全部中国福建省から来た偽装の難民たちと判ったのです。とは言え、来た以上はわが財団の施設に収容しなければならぬ。これまでは部下委せでのんびりしていたのが、その年の十二月、中国政府差し回しの船で強制送還させるまでの約半年間は、過労と心労が重なってすっかり健康を害し、あとで一週間入院する破目になりました。

平成四年出向期間が終わり外務省に戻るとき、あのうるさ型の奥野誠亮理事長が「君には本当にお世話になった。」と^{ネギラ}労

いの言葉をかけてもらいました。そんなことは減多にないことだったそうです。

タイ・チェンマイへ

このあとタイ北部のチェンマイというところに赴任しました。中国雲南省との国境近くの街で、人口は約二十万。廻りに山があつて丁度都城盆地のような^{たなす}佇まいのところでした。その近郊には北部工業団地があつて、日本の企業が三十社進出していました。ちなみに韓国は一社だけでした。

チェンマイの日本領事館は私一人、あとはタイ人の現地職員三人、タイ人女性と結婚して現地に住む日本人職員一人というこじんまりとした事務所でした。平成四年の六月に着任したのですが、私は正直情けない思いがしたものです。外務省に四十年間勤め、人一倍働いてきたつもりなのに、しかも還暦を過ぎた私に、十年前と同じ一等書記官の発令ですから本当に情けなく、じめな思いがしたものです。この人事には、私をよく知る国際連合局の次長や課長が「全くおかしい人事だ。総領事が参事官にすべきだ」と言っておられたと聞きました。もっとも退職一年前にやっと参事官に昇格しましたが、遅過ぎました。

こうして赴任したチェンマイは、タイの京都と呼ばれるよ

うに千年近い歴史をもつ寺院の多い古い都です。豪をめぐらし、城壁で囲まれた旧市街はしつとりと落ち着いた雰囲気のある町です。これに引きかえ、新市街の方は仲々賑やかで、とくに夜にはメインストリートの歩道沿いにびっしりと屋台の店が並び大勢の観光客で賑わいます。町から離れて郊外に出ると、一面田んぼが広がりとどこか日本の田舎の風景とそっくりです。チェンマイの住民は決して豊かではないのですが、穏やかで宗教心の厚い人達でした。また南の首都バンコックを中心とする地域の人とは人種が少し違うようで、色が比較的白く、お祭のときなど民族衣裳を身にまとったチェンマイ美人は実に魅力的でした。

私はよく北部タイ人と間違われてタイ語で話しかけられることがありましたが、私は北部タイの風土とそこに住む人達のかに、違和感なしにずっと溶け込めるような気がします。庄内は私の故郷、そしてチェンマイは第二の故郷のような心の安らぎを覚えるところでした。

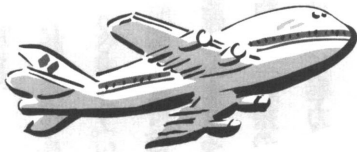
おわりに

こうして私の四十三年間に及ぶ外務省での生活は終わりました。平成七年三月末をもって長い公務員生活を終えた訳です。

最後の任地タイ国チェンマイから帰って外務省に帰朝報告に行った折、そこで会った何人かの人に「あなたはもつと上に行く人と思っていたのに意外だった」と言われました。また、私の親しい友人で兄貴分でもある人からは、私のチェンマイ赴任について「……いい線いっていると思っていたのに、君に対する外務省の処遇を不満に思う」とのお手紙を貰ったこともありました。外務省人事当局の私に対する処遇についての不満はさておき、今はむしろ浅学非才のこの私をこのように温かい目で見、このように評価してくれる人達がいたことを誇りに、かつ有難く思う気持ちを強くしております。

その様なことよりも、私の四十三年間の外務省生活を振り返ってみると、アメリカを最初に、オーストラリア、中近東、ヨーロッパ、そして最後がアジアと、海外勤務十八年間に、世界の主な五つの大陸に駐在できていろいろな国の文化に接し、またそれぞれの文化の違いを体験できた幸運を感謝すべきと思っております。とりわけ中東イラクでの三年五ヶ月の勤務はきびしく、辛いものがありましたが、私にはそれまで全く無縁であり、「日本文化とは対極をなす」（山本七平）と言われるイスラムの社会と文化に肌で接し、大袈裟に言えば自分の世界観が変わる思いがしました。また、次の勤務地イタリアではキリスト教文

化の奥深さを知り、また古代ローマ帝国時代から、ヨーロッパが如何に深く中東イスラムの世界と結びついていたかを知るに及び、私は歴史というもののへの眼が開かれた思いがしました。今から丁度六十年前、二十歳にして上京した時には思いもかけなかった貴重な経験ができた幸運を感謝する思いを今は切にしております。



帰郷

久保原町 宮下俊彦

一、帰郷

昭和十八年四月初旬。青雲の志を立てて、故郷を出でて五年、志半ばにして、今日（昭和二十三年三月）故郷庄内の地を踏む。

晴れて帰郷するのであれば、堂々と、都城本駅に下りて、持永堯民様の言われる平田の牧之原の坂から眺める庄内の街と「高千穂之峯」に「只今帰りました」と晴れやかに挨拶出来るのだけでも、今は裏道みたいな谷頭駅に下りて、谷頭街道を只一人ぼつりぼつりと歩いて帰る。

薩摩藩の北の守り、要衝大口に生をうけた父は、旧名古屋帝國大学医学部の前身愛知県立医学専門学校で医学を修めた後、外科医術の技を磨くため、修業材（怪我人）の供給の多いと思われる福岡の炭鉱病院に勤務していました。或る日、炭鉱の重役の岡村様（庄内町西区の御出身）から、嫁取の話を持ちかけられました。「看護婦資格と欲を言えば産婆の出来る人」を地

元の身寄りに世話したいとの経緯で、病院一の看護婦さんを紹介したのが、町区三班の産婆待木イヨ様でした。

又、或る日、「庄内町東医院が閉院になった。先生が単身でこられても、診療所、病室、医療器具一切と住居迄借りられる」と一報下さったのが待木イヨ様。

この電話一本が縁となり、医院開業に必要なすべてを借りもので始めた医院経営も、地元の有力者、汾陽栄一様、赤木一様同母上様横山本家、分家様、花原イサ様の御力添えを頂いて、数年の年を経て、人並みに、自前の医院及び住宅を、三島通り西端から、末原利夫様の御住居迄、田圃を突きつて出来た新道神田バイパス沿いに、亀沢温様の田一反をお借りして、造ることが出来ました。

この建築に当たっては、医院及び住居の建設に御詳しい山下種一先生より、懇切なる御指導を頂いたと聞いております。私が教育委員会の勤務中に御一緒した東幸哉様の御実家、住居迄貸して家族の方はどうしていらっしたのだろうと、他人ごとと思っていたら、本家筋の三代目が、宮下家縁者の誰にも相談せず、道路拡張の補償金で、宮下家縁者の冠婚葬祭用使用する為に造ったと言う二代目の遺志に反し、医院及び住居一切を他人に貸し、庄内を転出したため本家がなくなり、東家の人々

と同様なことになろうとは「人間万事塞翁が馬」。

今になれば「二代医者は立たぬ」と言う庄内のジंकスを破るために、一家総力をあげての結果に、良かったのか悪かったのか誰も判じられません。

神田バイパス沿いの家は居心地の良い家でした。この家で、両親と子供八人が生活することになりました。前田通り、神田通りは、町区四班として、宮竹常次郎商店の内神様恵比須様を班全体の神様として祭り、家内安全、商売繁盛を祈り、毎年七月十日には、庄内町の六月灯のはしりを勤めてきました。自分の子も沢山いるのに、神田っ子は、仲の良い親達の雰囲気の中で育ち、先日神田会を作りました。

1、昭和十一年四月、私は、隣家の又木茂ちゃんと共に元気よく庄内小学校一年二組、福留富吉先生の教室で二人掛けの椅子に座りました。字一つ知らず、数え方も知らぬ、真っ白な一年生でした。

立派な講堂の演台で、同年の坂元徳郎さんが、大きな紙に、揮毫されるのを見て、吃驚して、どんな家の方だろうと、想像すら出来ませんでした。

2、私は幼児期のポリオの後遺症で右足が悪かったのですが、茂ちゃんと江口寛さんは、侠氣の人手、大人になって迄守ってくれました。

3、汾陽松一郎さんは四月生まれで、出欠簿は一番に呼ばれ、一年二組の誰よりも早く名前を覚えしました。家に帰ると母が、私達一家が庄内に来て、第一番にお世話になったお家だと話してくれました。その様な話を聞いたせいも、真に居心地が良く、松一郎君の家の女の人が皆んな優しく、毎日学校帰りに汾陽さん宅で、一刻遊ぶのが常でした。

4、校歌は低学年の折は、唯気にもかけず唄いましたが、学年が上に行くにつれ、意味が判るにつれ「立志」しました。

私達が唄った庄内小学校の校歌には、一番に

朝日たださす霧島の、南麓に地を占めて

(地の利の良さ)

大淀川の川上に

(母なる川の恵み、治水、用水)

模範の里と仰がれる我庄内のゆかしさよ

(移民三百余りの士族が家族同伴という条件で、堅実善良で、克く土着の人と和合結集し、協力一致の精神は庄内の伝統になりました。)

二番に

維新の当初三島氏が、心尽して後の為

(西郷隆盛の意をうけた三島通庸氏を下級武士と蔑まず、西郷さんも大久保さんも、維新の人々はすべて尊敬し、手本にし、功は素直に称える)

樹てし功の後織りて、日毎勤しむ民あれば

(勤勞の勧め)

郷は年毎榮えゆく

(水谷文江様の文参照)

三番に

徳を修めて関之尾の

(人格の養成「豪氣朴訥、不言実行等」に励む)

瀧の響と諸共に

(有数な人になる)

我学びやの名をあげむ

(少年よ大志を抱け)

在校一、八〇〇名の若者は、この校歌を唄い将来を見つめま

した。

(大正十四年、文学博士 八波則吉作詞)

5、十五年戦争も中期後期になるにつれ、軍事色が強くなり、消耗品と言われた下級将校及び兵の補充のため、小学校、中学校は生徒の鍛錬に励み、行き過ぎも横行した。ノーベル物理学賞の江崎玲於奈先生も人生最初の挫折は京都二中の不合格、鶴とあだなされた体格のことしか考えられないと手記に書かれている。反戦三部作の映画監督の黒木和雄氏も、満州の状況悪化により急遽帰国のため薩摩方言が判らず、小林中に不合格、私も障害が影響してか都中不合格。

冒頭から「天下の野に英世を目指す」とはおこがましく、実は前年都城中学校を受験して、見事不合格となり「一立の涙」を流した男です。涙ってこんなに出るものかと、自分にも不思議な位、涙が止りません。この状況に父の処断は見事でした。戦時色にあふれた時世に、障害者は生き憎いと決断して、私の体を精密に調べ、手術すれば障害から抜け出せると診断し、都市では只一人の医学博士整形外科医の平田善夫に診察を受け、執刀を依頼し平田病院に入院しました。

退院すると学校とどのように話をすすめたのか、高等科一年

二組、担任皆吉先生の級の級長になった私を、一級下になる六年生の村永迪夫先生の級の「聴講生」という名の「落等生」にしてみました。

父は医師になるコースが違っていて、鹿児島師範で小学校教師、東京物理学校(現東京理科大学)で中等学校教師、名古屋帝国大学医学部の前身愛知県立医学専門学校で医師となつていきますので、医学にも学校の事情にも精しいのです。本当におそろいりました。

この時代は天才、神童と言われる人は、飛び級制度で小学六年、中学一年及び四年を飛ばした人は多いと思いますが、反面六年生を二度も念を入れたのは私位と思い、ほとほと我が身の拙なさを思いながら、頭の良い人は素直に認め尊敬します。これは母がくれた血液O型の有難さです。

福沢諭吉先生は実学の必要性を強調するための手段として、表現されたのかも知れませんが、頭の良い記憶力のすごい人はいるのですよね。

孔子も「性相近し、習相遠し」の次に只「上智と下愚は移らず」とありますし、下愚の私は私なりに「砧砧(こっこつ)」と努力して行くだけと思っています。

六年間教えて頂いた先生に、優しく育んでくれた町に、人々

に感謝し、必ず最善の努力をして力を發揮するのだと、健常者となった喜びと希望に満ちて出郷しました。向うは宮崎県立小林中学校、これから新しい人生の門出です。

6、昭和十八年四月、男は牡丹桜の咲き誇る家の玄関を、力強く踏み出しました。三日前に故郷庄内を母の三訓を胸に、「昭和の野に英世たらん」と青雲の志を抱き、家族の期待に応え郷土の名を揚げんとする意気たるや壮！

中学校の校門までは五百米。校門では週番の五年生が銃に着剣して、登校する生徒の服装や態度を見守っている。鬼よりこわい上級生と教えられている。併し格好が良かった。新しい学制服に新しい帽子、棕櫚製ながら軍隊用に模した鞆、足はゲートルを巻いているが、国民学校での指導の裸足である。校門の手前から馴れない挙手の礼をしながら進む。すると立哨を解いて五年生が近づいて来る。

「君は裸足でどうしたのか」

「靴を持たないのか。」

「靴がなければ、下駄でも良いのだ。学校指定の棕櫚の鼻緒の高下駄があるのだ。裸足は危ないよ」

上級生は優しくった。心から心配そうに声をかけてくれました

た。事の意外な成行に戸惑いながら、事情が理解出来るにつれて、今迄小学校から国民学校をとおして先生に非国民、国のお荷物と言われながら、身障者の運をジーツと耐えていた抑圧や不満が、一辺に解けて喜びがあふれました。

「この学校に入れて良かった。この学校を選んで良かった」と喜びにひたりました。

突然のことだったので、この時の先輩の顔も名前も全然覚えていません。申し訳なく思っています。このあと在学五年間に接した小林の人々は皆、善意の人々でした。

7、歓喜

入学して驚いたのは教育の質の高さでした。小学校では身障者のハンデもありましたが、スポーツとはこんなに楽しいものだったかと、健常者の幸福を知りました。小林中の名物丸内ちゃんという教師に巡り合って、聴講生として一年間のリハビリに最後の仕上げをして貰って以後、農作業も工場の作業も苦しいと思ったことはありません。

生物のモダン先生も、国語の田辺先生も急ぐが如くして急がず、急がざるが如くして急ぐ勉学のポイントを学ぶ。歴史は知識にあらずを身をもって教えてくれたタンバグリ先生。体操や

柔道の一見猛者に見える人達が一里も先に逃げて役立たず、女学校から転任の軟弱に評価されていたのに被爆現場での活躍、まさかの友、まさかの師を知りました。

宮崎師範Ⅱ初等普通教育。広島高師Ⅱ中等普通教育、三高・京都帝大出の校長、出自が証明されました。（血縁でなく教育制度上）

8、昭和の十五年戦争も最終年の昭和二十年、中学三年生に進学。学業はすべてなくなり、通年動員令で四月十九日、都城川崎航空機県立小林中学校勤労報国隊第二中隊十二班長として、クラス制を廃しすべて軍隊式の内務班一室十二名宛の高千穂寮に入寮しました。以後班単位で行動を共にする。

第二中隊（三年生百五十余名）の総指揮のための総班長正・副のうち副に任命される。正は通常行動の指揮、副は食券及び郵便を取扱う。内務班は副班長海老原昌生君が班長になり、岩崎東四郎君が副班長になったので、総班長副の仕事に専任することになる。入寮の翌日から訓練が始まり以後百日余で終戦となるが、その中間に被爆し十一名の死者、数十人の負傷者を出す。

終戦で日本国民すべてが素寒貧になった。陸軍大将を目指し

た軍人も、五族協和の実践に大陸に雄飛した人も身体一つで帰り、内地の人もルメイ少将の焼夷弾作戦に、殆んどの都市が丸焼けとなり、なんとか難を逃れた人も、戦後のアメリカ指導の占領政策財産税、農地解放、新円封鎖と立て続けにあびて無一物になった。

誰も助けてくれないので自家調整しかない。父母は兄弟三人揃って進学させられないので、長兄から順次進学することにし、兄貴が先ず県立鹿児島医専（現鹿児島大学）に入り、二番手の私は中学卒で帰郷し、兄の卒業を待つことになりました。

（帰郷の項終）

二、郷に入る

1、昭和二十三年、三月初旬。志し半ばにして、郷に入る。

昭和十八年四月、母の三訓を胸に庄内小学校校歌「我学び舎の名をあげん」を応援歌にして郷を出て五年この間日本国民の誰しみが、言語に絶する経験をして、金も、名誉も地位もすべて無くしました。けれど、吹き荒れた軍国主義の嵐は去り、想像もし得ないほどの民主主義と言う平和な国柄になりました。

2、十五年戦争の最終年、昭和二十年県立小林中学校の三年生

に進級する。

イ、四月十九日、川崎航空機製作所都城工場に、小林中学校勤労報国隊として通年動員され、高千穂寮に入る。

ロ、五月八日、朝七時過ぎに、米軍機の投爆により、級友十名を失い、数十名の負傷者を出す。

ハ、八月六日、B 29、広島市に原爆投下。同日、都城市内及び庄内町が、艦載機の攻撃により、庄内小学校及び周辺の東・西・町区の民家が焼ける。

ニ、八月十五日、日本国はポツダム宣言を受諾し敗戦。戦争が終わる。

3、日本の国体が変わる。

（昭和二十年は八月十五日から二十三年三月まで）

イ、昭和二十一年一月一日、「国運振興詔書」で、神格化されていた現人神アラヒヒトガミの天皇が、「人間宣言」をされる。これは、天皇の権威を利用して、占領をスムーズに進めたいGHQと、日本の国体維持を貫徹したい宮中を中心とした日本側の利害が一致したことによるものです。

ロ、明治の帝国憲法では、国の主権者であり、元首であった天皇が、昭和二十一年十一月三日公布、翌二十二年五月三日施行の新憲法で、「天皇は、日本国の象徴であり日本国

民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく」存在となりました。

ハ、象徴天皇の将来は、現在、世界の三大君主国として、英国、タイ、日本があるが、1、英国王室の行方と、2、国民の七割を占めるに至った戦後世代の天皇観の帰趨にかかっているようです。

4、占領政策

旧軍人、政治家等の公職追放者、外地雄飛組をはじめ、大都市在住の庶民にまで及んだルメイ少将の焼夷弾戦略により、丸裸にされた人々が多くなりました。同様に、他の無傷に終戦を迎えた全国の庶民にも、次々と社会構造を根こそぎ変えるまでに至る、占領政策が施行されました。

イ、財産税

本税は、市町村の課税する固定資産税が一般的には知られていますが、大別して、○一般（個別）財産税、○経常（臨時）財産税に分けられ、戦前も一般財産税が提案されましたが、実施できなかった経緯があります。

第二次大戦後、一九四六年（昭二十一年）戦時補償特別税等臨時財産税が課せられました。次項に述べる金融措置令と相俟って、宅地の地料を収入源とされていた人々は、

宅地を処分するなど、経済的な直撃を受けたようです。

私の家は、東区の亀澤温様より二十年位お借りしていた田一反も、家屋建築と共に宅地となりました。そして年末に地料をお支払いしていたのですが、亀澤様より買ってほしいとのお話があったようです。

当時、預金封鎖により、一世帯あたり月三百円、世帯員一人百円の収入では、当時のインフレ社会の中では、生活するのに精いっぱいでした。

私の家には往診用として昭和十四年に、千五百円で購入した小型車がありましたが、昭和十九・二十年にはガソリンの配給もなくなり、祖国防衛のためと言って、駐屯していた軍隊の司令官用に徴用されましたが、それが返還されていました。

丁度その時、熊本の業者が一万五千円で買ってくれました。お陰で、無事、亀澤様にお支払いが出来てこの件は一段落しました。

ロ、預金封鎖

一九四六年（昭二十一年）二月十七日公布の「金融措置令（通称新円封鎖）」により預金封鎖（新銀行券発行）が行われました。それによって、預金してない手持ちの旧

紙幣は無効になりました。その内容は次のようなものです。

- ・現在流通している紙幣の通用は三月二日限りとする。

- ・新紙幣と旧紙幣の交換期間は二月二十五日から三月七日までとし、交換限度は一人につき百円。それ以上の旧紙幣は、預金として封鎖する。

- ・それ以降の封鎖預金からの現金引き出しは、一ヶ月につき世帯主三百円、家族一人につき百円とする。

しかし、新円の発行が遅れ、一世帯員百円は、旧紙幣に切手を貼って使用しました。

戦後の物資不足はインフレを招き、米一升十円以下であったものが百八十円まで上がり、お金より現物が重要となり、同じ下宿にいたアルコール会社勤務の職員の方は、給料外に現物支給される無水アルコールが、幅を利かせました。

ハ、農地改革

農地の所有制度を改革するもので、GHQの指令により、一九四七年（昭二十二）から一九五〇年（昭二十五）に実施されました。

この農地改革は、不在地主の全所有地と、在村地主のうち、都・府・県で平均一町歩、北海道では四町歩を超えた

分を国が地主から強制的に安値で買収し、小作人には年賦で売り渡しました。この結果、地主階級は消滅し、旧小作農の人々は経済状態が著しく改善されました。

昭和二十年八月十五日に武装解除した日本軍のうち、満州にいた兵隊五十万人以上をシベリア・中央アジアに送り、強制労働に従事させました。ロシアは、この中から共產主義に洗脳された（ふりをした）人を帰国させ、日本の赤化を図りました。しかし、日本の農家が農地解放により地主になっていて、日本の赤化には失敗しました。またロシアは日本の終戦を九月二日として、不条理を合法化しています。

5、社会の風潮

イ、昭和十八年までは品不足ではあったけれども、入学に必要な制服も、辞書など、柔道着、剣道具一式揃えることが出来ました。その後卒業まで、一切のものがなくなりました。兄のお下がりの制服等のある私には支障がありませんでした。しかし、都城空襲で被爆した時、S君は負傷した友を背負って、血に汚れた洋服を着替えることもできませんでした。終戦後、三年経っても食料も衣服も絶対数が不足していました。「もう戦後ではない」と新聞に出るには

十年の月日が必要でした。

口、このように皆苦しいのに、農地の買い上げ、配分に権力のある農業委員で、小作農代表の方たちの中には、毎夜宴会する人たちもいました。

ハ、若い者の仕事もなく、福岡、三池、長崎の炭鉱しか仕事がありませんでした。

このような社会情勢ながら、故郷は、優しく私を迎えてくれました。戦後二年半、女の身で守ってくれた母に代わって、私が地域共同体の中で環境になじんで、労働を出し惜しみせず、返還してもらった五反の田畑を耕し頑張ろうと覚悟しました。兄貴が卒業するまで、晴耕雨読としゃれこむか、と。

今後の投稿予定

- | | |
|-------------|-------------|
| 3 墓の穴掘り | 4 町区青年団員となる |
| 5 町区消防団員となる | 6 松田農場に行く |
| 7 町区六班誕生 | 8 未成年の班長誕生 |
| 9 自治警察・主権在民 | 10 教育委員会 |

「金融措置令」について

一九四七年（昭和二十二）に発令されたポツダム命令（勅令）で、敗戦後の激しいインフレーションの収束を目的としていた。敗戦後、銀行は融資先企業の倒産を防ぐため新たな貸付けをおこなない、国民も戦時中に強制された預金を一齐に引き出したため、銀行は資金不足で倒産の危機に直面した。日銀は民間銀行への貸出しによってこれを防いだ。そのための通貨増発がインフレーションを招いた。

その対策として幣原内閣は秘密裏に金融緊急措置令を準備し、二月十六日の土曜日に突然ラジオで発表して翌月曜日から実施した。これによってすべての預貯金は封鎖されて支払停止となり、そこからの引出しは一ヵ月に世帯主三〇〇円、世帯員一人一〇〇円までに制限された。また、手持ち通貨の隠匿を防ぐため、流通中の日銀券は三月二日限りで失効させ、新円切換えを実施した。これによって通貨量は収縮したものの、復興金融金庫を通じた財政支出の増大のため、新たなインフレが進行した。

佐々木隆爾「昭和史の事典」より

ゆかしき、美しき庄内よ

早鈴町 七牟礼 純 一

牧ノ原の坂を下ると、どこよりも美しい霧島が目に入り、さらに庄内川に架かる安永橋に至ると、庄内のまちが目の前に迫る。少年時代はまさにここが世界であった。一面の豊饒の田の彼方に家並みや石垣、緑の木々を一望したときを今も懐かしく思い出す人は多いだろう。田んぼで勤しむ両親のそばで戯れた日、庄内川で釣りや水泳に明け暮れた夏休み、みるみるそばえ立つ白い入道雲、夕立と虹、にぎやかな商店街や劇場、六月灯、満員バス、何よりも人が多かった昔。そんな庄内の礎を築いた三島通庸（みちつね）公にかかる思いと三島家との交流について書いてみた。なお、歴史上の人物については、敬称を省略させていただきます。

私の三島家との交流

盆過ぎの高校野球テレビ観戦のときに届いた信州名菓方寸。

三島昌子（あきこ）様からの届け物であった。昌子様は、通庸の曾孫にあたり、直系として三島家を継承されている方である。私が初めてお目にかかったのは、平成二年四月、御一家で都城を訪問されたときである。

昌子様は、ガールスカウト日本連盟会長であったため同連盟宮崎県支部長野村芳江氏が案内し、夫の義温（よしやす）様、お嬢さん、お孫さん二人と西那須野郷土資料館職員お二人を伴い、先祖の足跡をたどる目的でおいでになった。私は当時、都市企画調整課に勤務しており、接待担当として歴史資料館、庄内小学校、母智丘、関之尾滝の案内役を務めたのである。岩橋辰也市長表敬訪問のあと、庄内小学校で坂元徳郎氏に説明役をお願いし、遺徳の碑、校長室などをめぐり、通庸の遺徳を讃えた校歌に感激されたことが思い出される。そのときからしばらくして、丁重な礼状をいただき、恐縮したものであるが、これが縁となり、年賀の交換や時々、書簡で交流させていただき、今に至っている。

平成十二年、この年が庄内商工会の四十周年に当ることを聞いて、五月、記念事業として、庄内のまちづくりと近代化に画期的な貢献のあった「通庸公」を取り上げ、まちの活性化に役立ててはどうか、と提案したところ、商工会の快諾があり、三

島様との交渉とパンフレット作成を私が引き受けることとなった。

八月、通庸が開拓とまちづくりに力を注ぎ、その遺徳を偲んで三島神社まで造られている栃木県西那須野町を訪ね、同町郷土資料館の金井忠夫氏に町内の案内をいただいた。かつて三島農場の事務所であった郷土資料館から別荘地跡（現ボーイスカウト日本連盟野営場）、通庸を祭った三島神社、通庸が造営した母智丘神社、建設当時の幅員のままの道路など、何かふつふつと沸きあがってくるものを感じた。

その帰途、記念事業の趣旨説明のため、軽井沢の別荘に三島御夫妻をお尋ねした。瀟洒な軽井沢駅に御夫妻の出迎えを受け、天皇皇后がテニスを楽しまれたテニスコートの前を通り、唐松林の中の別荘へ着いた。十年ぶりの再会であり、涼風が吹きぬけるテラスで思い出深いひと時を過ごさせていただいた。御夫妻は、この企画を大変喜ばれ、出席を約束してくださった。

御夫妻、金井忠夫氏そして市立図書館の山下真一氏の御指導をいただき、パンフレットも整い、十一月九日、記念式典を迎えることとなった。ところが式典の前日、昌子様から「いま空港だけど、間違つて来てしまったのよ」と電話が入り、あわてて出迎えることとなったが、かえってゆつくりしていただく時

間がとれ、幸いした。

式典当日、岩橋辰也市長を表敬訪問したあと、荘内商工会の式典会場に入った。商工会関係者が出席し、亀元勉理事長の挨拶で始まり、岩橋市長はじめ四名の来賓による祝辞、続いて三島義温様の挨拶があり、瀬戸山計佐儀氏の講演「街づくりの原点……三島通庸公の功績を語る」で締めくくられた。御夫妻の御臨席により、庄内の歴史がぐっと手繰り寄せられ、まちの歴史に生気を感じた式典であったように思う。

その日の夜は霧島ロイヤルホテルに宿を用意してもらったところ、「那須塩原温泉は有名だけど、霧島の温泉は、サービスが行き届いて素晴らしい。塩原以上よ」と誉めてくださった。

御夫妻は、「もう高齢なので、これが最後の都城訪問かもしれない」とお話になり、今回の訪問に満足の御様子であった。帰路は、ホテルからえびの高原を経て高速道路にて宮崎空港へ向かった。車中での義温様のお話の中で特に記憶に残っているのは、「太平洋戦争の開戦時、巡洋艦天竜でウエーク島攻撃に当たったとき、小さな島で、簡単に攻略できると考えていたが、米軍は想像以上に強力で、また戦闘機の攻撃にも手を焼き、一時退却せざるを得なかった。自らの力と相手国への理解はそういったところだった。」との回想話である。

三島家の人々

通庸については、後段で述べるが、三島家の方々について簡単に紹介したい。

通庸の妻・和歌子は、三島家とは隣同士の薩摩藩士芝山権次の次女。客を遇することに熱心な通庸ゆえ寄宿人が常時二、三十人いたという家計をあずかり、大学・論語に精通し、儒教道徳を以って子女を教育し、人だけでなく犬猫までも温情厚く、実践躬行を以って範を示す人であった。また通庸の身を案じ、仕込み杖をもって寄り従うといったことから女丈夫ともいわれた。多忙により家庭を顧みることができない通庸に代わって、一家の精神的支柱であった。

通庸の長男・弥太郎は、駒場農学校（現東京大学農学部）を主席で卒業し官費留学生としてアメリカに留学。マサチューセッツ農科大学を優秀な成績で卒業し、コーネル大学大学院にて害虫学を研究。帰国後は農林省、通信省にて調査研究に従事。貴族院議員でもあり横浜正金銀行（東京三菱銀行）の取締役・頭取を経て日本銀行総裁を務めた人。

弥太郎の長男・通陽（みちはる）は、文筆を得意とし、音楽、絵画、演劇、乗馬もたしなむ敬虔な祈りの人。第一次世界大戦講和会議副使牧野伸顕の随員としてパリへ乗り込んだこと

も。昭和六年に貴族院議員となり文部政務次官などを務め、戦後は参議院議員に当選し、こどもの日制定などに尽力。大正十一年、少年団日本連盟が創立されると二十五歳で副理事長に就任。ボーイスカウト運動をこよなく愛し、ボーイスカウト日本連盟総長を務め、戦後のボーイスカウトの再建、ボーイスカウト会館設立、世界ジャンボリー日本開催など日本のボーイスカウト運動に道を開いた人。

通陽の妻・純（すみ）は徳島出身の松岡家が実家で、祖父康毅（やすこわ）は、渡欧して法律・行政・憲法を学び、日本大学初代学長、検事総長、行政裁判所長官、農商務大臣、枢密顧問官等を歴任し、男爵を拝受した人。父は、東京帝国大学をトップの成績で卒業し、ボン、ベルン両大学で博士号を取得し、東京帝国大学教授、貴族院議員を務めた人。

その長女として生まれた純は、華族女学校で通陽の妹・梅子と同級だったことが縁で通陽と結婚し、日本におけるガールスカウト運動の草創期から参加し、ガールスカウト日本連盟誕生とともに会長に就任し、戦後のガールスカウトの再建、スカウト活動の発展に貢献した人。

昌子様の夫・義温は平田伯爵の三男。祖父東助は、米沢の出身で、山県有朋幕下の参謀長として農商務大臣、内務大臣、内

大臣等を歴任した人。父栄二は、川合玉堂門下で松堂と号し、上野の美術学校（現東京芸術大学）の日本画の教授。次兄正治は、松下幸之助の一人娘と結婚。義温は、東大法学部を卒業し、海軍主計中尉として巡洋艦天竜に乗り組みウエーク島攻略戦に参加。戦後、三島農場の経営、栃木県狩野村の村長、新朝日自動車（株）取締役・トヨタ南オート（株）取締役社長・顧問を経て（社）尚友倶楽部理事を務めた人。著書に「三島弥太郎の手紙」がある。平成二十一年逝去。

昌子様は、通陽と純の長女で、昭和二十三年御両親の勧めでガールスカウトリーダー講習会参加を機にスカウト活動に運動の一步を踏み出し、ブラウニーの立ち上げ、ガールスカウト世界会議開催、国際会議への出席、サンガム委員就任などガールスカウト日本連盟の中枢に身を置き、昭和六十二年から四年間、ガールスカウト日本連盟会長として全県支部体制づくりに着手、世界会議に参加、七十周年記念事業の開催など、スカウト活動の発展に尽力し、平成五年に理事を退任。東京在住。

地域と三島家の交流へ

通陽は、土木県令と称される面が強いが、西洋式の急速な近代化を目指した明治という時代にあって、決して地位を利用し

て私腹を肥やすようなことはなく、高い見識をもって、ひたすら国家、万民のため自らの全知全能を捧げた稀有な人物であったと思う。

三島家の人々をみると、まるで通庸の意志を継ぐかのように社会の発展に生涯を捧げるようなものを感じる。三島神社のある山形市七日町、栃木県那須塩原市西那須野の人々が毎年三島家の人々と交流を持って、歴史を大事にしていることは、大変尊いことであり、このことは通庸のまちづくりの原点とされる庄内、三股にとってもしっかりと受け止めていかなければならないことと思う。

平成十七年二月、三股町在住郷土史家の最上川明氏がお出でになり、婦人と町の名士が並んで写っている一枚の写真を取り出され、この婦人に心当たりはないかとのことであった。最上川氏は、私が三島様と交流があることを聞きつけての来訪であった。私は即座に純様と思い、写真を撮影したのは通陽様ではないかと想像した。

さっそく三島家へ写真を送付したところ、純様（このとき百四歳）は「これは鹿兒島へ行く前に都城へお寄りした時ですよ」と即座にお答えになったとの手紙をいただいた。それは昭和十一年、祖先のお墓を鹿兒島から東京都青山墓地に移すための旅

行で、母智丘神社にも参られた由。三股町早馬神社の境内にある三股開拓之碑（大正十年十二月建立）には通陽の揮毫が示されている。そうした経緯があつての三股立ち寄りであつたのかと想像するところである。もしかしたら庄内にもお立ち寄りになったのかもしれない。最上川氏は、このことを「ふるさとみまた第二十三号」（三股郷土史研究会発行）に寄稿され、地域の歴史に新しい風を吹き込まれた。

今、三股町教育委員会では、通庸当時の民家の屋敷跡の保存について事業化に向けた努力がされているとのこと。一方、庄内では、地区まちづくり協議会が設立され、住民によるまちづくり運動が始まっている。この二つのまちには、歴史を感じ、立ち止まってみたくなる情緒豊かな趣があり、そのことが精神風土にもつながっているものであろう。歴史を共有する庄内と三股が一緒になった取り組みや連携交流があつてもよい。

三島家との交流や通庸に関する図書・資料を通して、庄内の人間として、誰かが関係を担い「大事なものを」を継承していくことの必要性を強く感じてきた。

歴史は偉大で、教えられるところ大である。私の個人的交流を超えて、地域としての次元で一つの文化として育てて行けないものだろうか。地域の皆様にぜひ検討いただければ幸いであ

る。

通庸における幕末から明治維新時代

通庸はどんな人かというと、一八三五年に薩摩藩士三島通純の長男として、多くの維新の英傑を輩出した鹿児島市の上園町に生まれ、剛毅な中にも思慮深く、経書、兵法、示元流のいずれにおいても優れ、藩校の造士館では句読師を務めた。

通庸の青年期は、薩摩藩では天下の名君といわれた藩主斉彬が、幕府の相談役として、開国論のオピニオンリーダーとして、外国に対抗するためには、日本一体一致の体制を築き、産業振興と軍備の近代化の緊急性を論じた。こうした薩摩藩の幕府に対する存在感の高まりによって、政治に目覚めた下級武士の関心は藩内に留まらず、その言動は中央政局に向かってますます先鋭化していった。西郷隆盛や大久保利通をリーダーとする藩内の若手集団は精忠組と呼ばれ、通庸もその中の一人であった。一八五八年、斉彬が急死し、ときあたかも井伊直弼の決断により日米修好通商条約が締結され、さらに將軍家定の後を家茂が継いだため、尊攘派と一橋派（外国から国を守るには、優秀な將軍が必要と考えて、斉彬などが一橋慶喜を推した）が共闘して井伊の失脚を図ったが井伊はこれを厳しく断罪した（安政の

大獄）。西郷は謹慎の身となり薩摩藩も動けなくなった。

一八六〇年、井伊が桜田門外で暗殺されると、幕府は公武合体へと動き、家茂と皇女和宮の結婚に際し、孝明天皇は「鎖国に戻すこと、重要政策は朝廷に奏上すること」を条件に認めた。このことにより、朝廷の政治的優位が明らかになった。

一八六二年、島津久光は兵一千名を率いて上洛。これを尊攘派の論者たちは討幕への示威行動と勘違いして集まってきた。精忠組も公武合体派の公家や京都所司代を殺害しようとしていた。そしてこの中に通庸もいた。伏見の寺田屋に集まった精忠組を諫めるため、久光が藩士を使わしたところ、有馬新七ら七名が死んだ。残りの精忠組の者は帰藩し、謹慎となった。久光は、慶喜を將軍にとの勅書を引き出し、江戸へ乗り込み幕府に吞ませた。久光は幕政改革に手を貸したつもりであったが、かえって幕府の衰退を促進した。長州藩は公武合体から尊攘派に転向し、土佐藩がこれに追隨し、開国論の薩摩藩の影が薄くなった。

一八六三年、攘夷決行。長州藩はアメリカ商船を砲撃し、アメリカ・フランス艦隊の来襲を受けた。薩摩藩は生麦事件の報復としてイギリス艦隊の攻撃を受けた。八月、薩摩藩と会津藩は尊攘派公家を排除（文久政変）。

一八六四年、久光の上洛により、通庸は京都の守護に着き、

まもなく周旋役（各藩との外交折衝）を命じられた。公武合体が色あせ、薩摩藩の主導権回復の打開策として、沖永良部流罪となっていた西郷が軍務役に任命され、藩の政治と軍務の総責任者として京都に赴任した。西郷の登場によって、薩摩藩は武力討幕へと方向転換していく。

このころ、通庸は和歌子と結婚。ほどなく京都へ戻り、八月、長州藩は勢力の挽回を図って京都に攻め上った。幕府は、薩摩・会津・桑名の藩兵をもつて対抗。通庸は西郷の指揮のもと、小荷駄方として、武器弾薬、兵糧の輸送を受け持ち、補給部隊の幕僚として活躍している。この禁門の変で長州は駆逐されたが、勅命による第一次長州征伐が行なわれた。このとき、イギリス・フランス・オランダ・アメリカ四国連合艦隊が下関を攻撃し、長州藩を屈服させた。これによって長州藩は攘夷から目を覚ますことになる。

一八六六年、第二次長州征伐が行なわれたが、薩長連合の密約により洋式武器を調達した長州藩が征伐軍を撃ち破り、将軍家茂の急死により休戦となった。

一八六七年、将軍慶喜は大政を奉還。不意をつかれた朝廷は、幕府統治の現状を容認するとともに、外交事務についても現状継続を容認した。慶喜は死中に活をつかんだ。

徳川の有利な展開に焦慮した西郷と大久保は、岩倉具視や王政復古派公家と組んで、十二月九日、王政復古のクーデターを敢行する。岩倉は、幼い明治天皇の面前で、王政復古の大号令を読み上げた。慶喜からの大政奉還を受納して幕府を廃絶し、代わりに天皇のもとに総裁・議定・参与の三職を置いて国家統治にあたる旨を、天皇の名で発表した。

天皇政府は、内部の統一が図れず、混乱していた。十二月十六日、慶喜は、イギリスなど六カ国の公使を招き、内政不干渉を要請するとともに外務事務は徳川が責任もって行なうことで了承を取り付けた。さらに十二月十九日、慶喜は、総裁に宛て王政復古の大号令を取り消せとの要求書を提出した。二十二日、天皇政府は、慶喜の要求をほぼ承認するかのような告諭を諸藩に示し、もはやクーデターは骨抜きとなったも同然であった。

焦った薩摩藩討幕派は、戦争に訴えて死中に活を求めるほかないと腹をくくった。西郷は、浪士達に江戸市中で放火や強盗を行なわせ、徳川を挑発した。怒った徳川政府が江戸の薩摩屋敷を焼き払い、慶喜も沸き立つ勢いに押され薩摩藩討伐の兵一万五千を京都へ差し向けた。天皇政府内の主導権は、宥和論の公議政体派（徳川も含めた列藩会議で政治を執り行う）から主戦論の薩摩藩へと移り、岩倉と長州藩が同調し、薩摩藩三千と

長州藩千五百が鳥羽と伏見に陣を敷いた。

一八六八年一月三日、両軍は鳥羽、伏見で激突。四日、錦の御旗が翻るや慶喜の戦意が崩れ、朝敵となったと受け取った慶喜は六日の夜、大阪城を抜け出し江戸へ逃げ帰った。ここに徳川軍は総崩れとなり、天幕政府と徳川政府との力関係は一挙に逆転し、西日本諸藩は雪崩をうって天幕政府へとなびいた。そこで朝廷は、総裁の有栖川宮親王を東征軍大総督にし、東海、東山、北陸から江戸に進撃を始めた。このとき通庸は人馬奉行として参加。二月十二日、慶喜は退城し謹慎の意を表した。

四月十一日、江戸城は無血開城され、徳川幕府は、大名統括権を最終的に放棄し、十一カ国と締結した条約書の原本すべてを天幕政府へ引き渡し、外交権も委譲した。ここに徳川幕府二百六十五年の歴史は閉じた。

江戸に入った通庸は、その後、鎮撫総督の西園寺公望にしたがって山陰道に黒田清綱とともに兵を率いて進軍し、戦いが終わって京都に引き上げた。八月にふたたび命を受けると、一個大隊を率いて官軍に合流し、越後路へ参戦した。さらに九月には会津へと転戦し、会津鶴ヶ城の落城を見届けて京都に帰還した。戊辰戦争が終わると、薩摩藩士たちは、それぞれ鹿児島に帰還しはじめた。

一八六八年十月二十八日、明治政府は、藩を地方統治の機関と位置づけ、藩の職制を統一するため、藩治職制を發布した。（藩という言葉は、江戸時代には俗称であり、正式にはこのとき初めて用いられた。）藩治職制は、第一に藩の幹部を執政、参政、公議人の三職に統一すると定めた。これらは藩主が任命するが、家柄にとらわれず実力本位で任用し、太政官に報告することが求められた。

第二に藩主の近くに藩政に関わらず藩主の家事のみを行なう家知事を置くことを命じている。薩摩藩庁では、守旧派と維新に功労のあった下級武士との間で勢力争いがはじまり、藩主島津忠義は、西郷に参政の職を与えて藩政改革への協力を要請した。

藩庁に入った西郷は、大鉾を振るった。守旧派は藩庁から一掃され、版籍奉還後、知藩事となった島津忠義の名で藩政改革が布告された。藩治職制として、家老の座にかわって知政所を設け、その下に軍務、会計、糾明、観察の四局を置き、知藩事の家事は内務局を設けて処理。局にはそれぞれ総裁が置かれ、その補佐職として奉行が置かれた。

通庸公への思い

明治維新により、版籍奉還から廃藩置県の間、薩摩藩下では、百十三の外城に地頭が置かれ、最大の外城ともいえる都城には、薩摩藩庁で会計・民事奉行であった通庸が拔擢人事により着任したのである。しかしながら当時の都城は、時代の変化（家柄にとらわれない実力本位、守旧派の一掃、維新に功労のあった下級武士の登用など）に適応できず、旧体制維持の考えが主流で、通庸への強い反対行動があり、通庸はやむを得ず都城を三つに分割し、上荘内郷（庄内・西岳・山田・志和池）管轄の地頭となった。併せて下三股郷の地頭も兼ね、町並みの整備と近郷からの人材を集め、広域道路の整備、兵制、教育、産業振興など二年有余の短期間で近代化の先端となる政策を矢継ぎ早に実施し、その手腕には目を見張るものがあつた。このことは、通庸の将来に、西郷隆盛はじめ明治政府の期待を確実にするものであり、通庸を生かしきれなかった都城の不明、不運といえるようか。

通庸の偉大さについては、徳川幕府が崩壊し、明治政府が立ち上がるまさに政治的には混沌とした時期に、他の誰もが出来ない画期的なまちづくりをやつてのけたところに政治的・行政的手腕を見て取ることが出来る。並外れた先見性と先頭に立つ

て人々を引っ張って行く度量たるやまことに見事である。庄内小学校に掲げてある肖像写真は、そうしたことを彷彿とさせるものがある。

そして、このうち、東京府参事、教部省教部大丞、酒田県令、鶴岡県令、山形県令、福島県令、栃木県令、内務省土木局長、警視総監、子爵と手腕を発揮していくが、いよいよ中央政府での活躍が期待されていた矢先、五十三歳にて逝去。青山葬儀場には一万二千人の会葬者があり、伊藤博文は、国会運営の困難に直面したとき、「こんなとき、三島がいてくれたら……」と深いため息をもらしたという。

庄内小学校校歌（大正十四年、八波則吉作詞）二番は「維新の当初三島氏が 心尽くして後のため 樹（た）てし功のあと おひて 日ごといそしむ民あれば 郷は年ごと栄え行く」と歌う。これが昭和三十二年荻部哲三氏により改作詩され、「維新のはじめ三島氏が 心尽くして世のために 残せし功したいつつ 日ごといそしむ民あれば 郷は年ごと栄え行く」となっている。

口ずさむたびに味わい深い思いである。

参考文献

- 明治維新 坂野潤治＋大野健 講談社現代新書
未完の明治維新 坂野潤治 ちくま新書
幕末維新と佐賀藩 毛利敏彦 中央新書
明治維新の再発見 毛利敏彦 吉川弘文館
日本の歴史二十 維新の構想と展開 鈴木淳 講談社
評伝三島通庸 幕内満雄 暁印書館
三島弥太郎の手紙 三島義温 学生社
バーバはガールスカウト ―翼をもらって― 三島昌子 東誠印刷
三島和歌子覚書 尚友ブックレット二十二
内藤一成 尚友倶楽部
庄内閑話十八（平成十一年九月二十九日） 庄内小学校

庄内の思い出

東区 馬籠 京子
(旧姓 原)

庄内を離れて四十八年になります。

昭和二十年の秋、今の韓国のソウル（その当時は京城）から、私が小学一年の時、日本に引き揚げて来ました。

初めは母の故郷の鹿児島に、次は父の故郷庄内に、そして父の仕事の関係で京都に移り、三年生の三学期に、又、庄内にもどり、それから十七年いろんな思い出をつくりました。

七十三歳になった今、これまで何気なく、通りすぎてきたことにも感動して、昔を思い出しています。

そのいくつかを書いてみました。

一．椎茸

母の料理には、よく椎茸が使われました。煮物、汁物、天ぷら等、その味、香り、感触どれも好きでした。

やがて結婚し、東京に住むようになってすぐ、お歳暮の時期になりました。私は迷わず椎茸にしようと決め、西岳高野町の椎茸農家から取り寄せました。

四十八年間のお中元、お歳暮は、ずっと椎茸にしています。お付き合いの度合いで、椎茸の箱の大きさはちがいますが。お渡しする時は、毎回同じことを添えています。

「子どもの頃から馴れ親しんだおいしいふるさとの味です。」と自慢気に述べています。

みなさんにはとても好評で、「よその椎茸とちがいが、水のもどりもよく、ふつくらして、味も香も色もスバラシイ。」「又、いただけるのを予定して、期待しています。」とのことで、うれしくなります。

お中元、お歳暮の時期になると、ご近所さんは時間をかけてデパートに行き、品物を選ばれますが、私には、そのわずらわしさがなくても満足しています。これから先も椎茸でいき、私と一緒においしいふるさとの味を共有してもらいます。

二. なつかしい遊び

「お手玉」

九月に入り、いつものように広々と畑がつづく畔道を、犬の

散歩をしていたら、道路と畑の境にじゅう玉が植えてあるのに気づきました。まだ粒が小さく青々していました。いつも通っている道なのに、今までどうして気づかなかったのでしょうか。畑の持ち主の方が作業していらしたので、声かけました。

「なつかしいですね。子どもの頃は、おはじきにしたり、お手玉の中に入れていたのですよ。」

と話したら、

「熟したら声かけるよ。となりの畑の持主の方にも声かけといてあげるから。」

と親切に言って下さいました。楽しみです。

今四年生になっている孫が幼稚園の時、スーパで小豆を買って、小豆のお手玉を作りました。お手玉の重さ、手ざわりは、やはりじゅう玉のお手玉にはかないません。じゅう玉のお手玉は、孫と二人で作る予定です。本人も楽しみにして布地選びをしていました。三個のお手玉を操れるようになってほしいですね。

三. 焼酎

父は、焼酎党です。

「酒は悪酔いするが、焼酎にはそれがない。酒をこぼすとシミ

になるが、焼酎は大丈夫。」

と言っていました。

お中元、お歳暮で酒が届くと、大浦商店（酒店）まで霧島焼酎と交換してもらいに行くのは、長女の私の役目でした。縄で編んだ一升ビン入れの手さげを持って、庄内小の運動場の中を突つきます。背が低い頃は、一升ビンの底が地面につかえるので腕をまげて、力を入れて歩きました。東京に住んでいた頃は、近くの店ではまだ霧島焼酎は見かけませんでした。父が出張で上京する時は、泊まる日数分の数だけ、都城本駅で小ビンを持って来ていました。

埼玉に住むようになり、今は、どのスーパーや酒店でも霧島焼酎は売っています。きれいな黒の化粧箱に入った一・八リットル、二十五度の霧島は、一本千七百九十円です。

おとなりで年二回、近所の仲良しおばさん五人で暑氣払いと忘年会をしています。料理は持ち寄りです。ビールが主でしたが、三年前に都城でできる「霧島」を差し入れました。父は温かくしていました、ここでは水割りです。

「クセがなく飲みやすい。」と好評で、それからはこの会では、霧島焼酎が主となりました。ある日、おとなりの奥さんが、大ニユースを知らせるように「一本千五百八十円で売っている店

を見つけたよ。二本も買ってきちゃった。」と教えに来ました。

私の夫はアルコールはダメなので、梅酒を作る時ときんかん酒をつくる時にだけ買っています。勿論、千五百八十円の焼酎です。

母が生きている時、年に一回、ゆうびん局のふるさと便できんかんを送ってくれました。「たまたま」という粒の大きい、木で完熟したきんかんです。生でおいしく食べていましたが、母が亡くなってからは、直接山之口のきんかん農家にファックスで注文しています。生でも食べますが、二十五度の霧島焼酎と砂糖で煮るのです。きんかんには、包丁で一本のすじを入れます。煮えてくると、切れ目が広がりまるで鈴のようです。初めて煮ている時、アルコールがとんで、台所の火災報知機がなりだしました。それからは窓もあけ、換気扇もまわしています。夜なべ仕事です。

きんかんには、焼酎の味がつき、焼酎にはきんかんの香りがついて上品な味です。

一月末から三月初めまでに数回注文しますので、豊富な生のきんかんと、きんかん酒は鈴のきんかんも入れて、親しい人に味見していただいています。「宮崎の方は、おいしい果物が多くていいですね。」と好評です。

四 俳人の山頭火

個人病院の院長先生と仲良しになりました。

蜂に刺された時、足の指を骨折した時、インフルエンザの予防接種、健康診断とお世話になっています。

新燃岳が噴火した時、

「都城は灰の被害で大変ですね。」とお見舞いの言葉を下さいました。

そして「山頭火の本、読んだことがありますか。」と聞かれました。私はテレビで旅する山頭火を見たことはありません。あまり関心がなく、ただ「きたない格好しているけど、風呂には入っているのかしら。荷物が小さいけど着がえは持っているのかな。」くらいのことでした。

院長先生は「読んでみるといいよ。あなたのふるさとの都城、そして庄内も出てくるよ。」と言って、本を紹介して下さいました。

すぐ本屋で山頭火の行乞記「あの山越えて」を注文し、取り寄せました。昭和五年の九月の旅のところに、庄内町の事が簡単ですが、紹介されていました。

「庄内町の自動車乗り場の押揚げポンプの水はよかった。ずんぶん飲んだ。」とか、「子どもたちが、みんなはだしで嬉しかつ

た。」とか、「庄内町に於ける小さい娘がとても気のきいた親切をしてくれて、ありがたいやら、おかしいやらで微苦笑しつつ行乞を続けた。」と書いてあり、その時代の情景、人情が少しわかるような気がしました。

院長先生の人柄に感謝です。

長々と書きすぎたようです。でもうれしかったです。むかしの庄内での事を次々と思い出しました。



過ぎし日々

川崎 福村 修

秋の季節になると思いだす。集落から約四キロ、自称「きかんたる仲間」と、六年間通った庄内小学校までの通学道路の距離である。今思うとこのわずか四キロ程の距離に「春夏秋冬」それぞれの季節にあった遠い昔の思い出が詰まった道でもある。

七十歳半ばになった今も毎日のように利用しているこの道。日によつては一日に二〜三回通ることもあるが、とくに忙しいわけでもない。ただ最近忘れものが多くなり同一方向に二・三か所の用事があるのに時々ぬけてしまいい往復しているだけのことである。（そう言えば親父もバイクで）よく一日のうちに何回も出入りしていた。親父はよほどバイク乗りが好きなんだと別に気にもしないで眺めていた。ただ、今自分が当時の親父の年齢に近くなり親父と同じ事をやっている。でもこの忘れもすてたものではない。物忘れで通るたびに季節ごと、場所ごとの

懐かしい思い出が蘇る。時には物忘れもいいものだ。

今回は、物忘れのおかげで思い出した「きかんたる仲間」にまつわる思い出話を、恥を偲んでご披露？

「学校を忘れた登校日」

先ず最初に「きかんたる仲間」の名誉のため紹介をしておきます。仲間は七人同級生。決めたことのない決まり、上下なし、時々取っ組み合いの喧嘩もあるが止める者なし、部外者は終わるのを待つだけ、終わったら皆で当人たちの服のほこりとり、「きかんたる仲間」と言われながら、自分たちはいたって真面目と誤解しているところあり、ただはつきり言えるのは仲間以外には迷惑をかけた話は卒業までありませんでした。

ある秋晴れの爽やかな朝の登校時の事件です。場所は「下川崎橋」から「小田川橋」を渡り、短い坂を上ったところ。右下の田んぼ横に道路と鋭角に流れている用水路がありました（現在もあります）。季節は田んぼ全体が黄金色に染まる今頃、前の日に用水路の落水があったのでしよう。用水路は膝ぐらいまでの水溜りになっていました。運悪く用水路を覗いた者がいて、大声で「うわー、いおがおっど」と。その声を聞いた途端、残りの仲間も用水路めがけて突進。「かばん」を投げると用水路

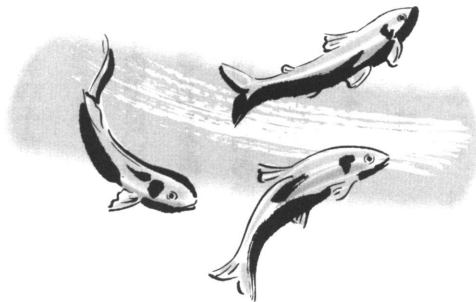
の中へ靴も脱がずに（皆裸足でした）足で水をかき回します。苦しくなった「いお」が口を水面に出してパクパク。どこから探してきたのか、縁の欠けたバケツに「いお」を入れました。「ふなんこ」「鯉のこ」「なまつ」「じょじょっくろ」「あぶらめ」「ししゃむし」は人のポケットへ。川の中のにぎやかなこと、にぎやかなこと。その上ご丁寧にも捕った「いお」を仲間の家にあずけにひきかえす（すべて団体行動）。目的は帰ってから子供たちだけの食事会のため。作業終了。

……何か気になる……「かばん」「学校」、皆走り出しました。顔が真っ赤になり、学校が見えたとき顔面蒼白。途中から「はんべそ選手」もいて学校到着。…四時間目が始まっていました。その後「きかんたる仲間」は各自、学校、家庭で、それぞれ極刑に処せられたとのこと。

あくる日、一部盛りあがったお互いの頭をなでながら小さい声で「いてな」。

一つの物も皆で食べて夢のような時間をともに過ごした七人の仲間のうち、四人が若くして逝ってしまった。二人は都会暮らしで長い間合っていない。思い出の道を時々通るのは（たまに二、三回）地元に残る自分だけ、「事件の生き証人」になっ

てしまった。衣食住すべてに不自由を強いられながらも「登校日」を忘れるぐらい熱中できる大自然の中で過ごせた子ども時代を、幸せに、そして懐かしく思うこの頃である。



庄内に対する思い

庄内町 池田 忠夫

其の一

金石城跡の裏に冷たくきれいな水が流れている川があります。その川の名前を新田溝または前田用水路と呼んでおりました。子供の頃、友人たちとトンネルの出口で泳いだり、牛や馬を川の水で洗ったりした思い出があります。

その頃の川は土のままでした。トンネルの中だけは石積みの仕上げて作ってありました。今はコンクリート溝で出来あがっています。関之尾の滝の上流から始まり山あり谷ありの道のり（関之尾、西区、東区、今屋、千草、谷頭、志和地）この長い何十キロの距離をよく手掘りで完成させた事だと驚いております。

はなしを聞くとところによると初めに手がけた方が関之尾の坂元さんとおっしゃる方で、後に前田正名さんとおっしゃる方が引き継ぎ、長い年月をかけて完成させたそうです。今ならば重

機（ユンボやダンプカー等）で作業も効率よくできるようになりましたが、あれだけの長い距離の用水路を仕上げるのは大変な事です。地域の為にご尽力いただいた前田さんに感謝と敬意を表します。前田さん本当にありがとうございました。

其の二

子供の頃の思い出として、隣の名字の下に〇〇ドンと言う呼び方をしておりましたね。例えば（乙守ドンや得能ドン）等と呼んでおりました。今思えば、薩摩の西郷ドンの呼び方からそういう風に呼ぶようになったのかなと懐かしく思い返しています。

じさまとガグレ

―子供の時爺さんから聞いた話―

今屋 鵜 島 節 男

じいちゃんの、そのまたじいちゃんがある秋の暮れ、昼ごろ、持ち山の藪払いに行くことにした。鉦・鎌なたを腰に差し、山道を登って行った。それから奥深い谷坂を下りると、そこに小さな川が流れている。いつも慣れ親しんだ谷間の景色である。川は大人の膝ぐらいの深さである。その傍らを通ってまた山道へと続く。そこを登りかけた時、近くで「おじちゃん」と言う聞き慣れない声がある。その声の方に振り向くと、そこに四・五歳ぐらいの男の子が二人しゃがんでいた。

「こげな山奥に子供ばツかいで居おいはつがねが」、と思つていると、

「おじちゃん、相撲を取ろうよ」と聞えたような気がした。少し気味が悪くなつて、

「じいちゃん、今いそがし、またんとつすいが」というと、

「もし、叔父ちゃんが勝ったら、きつと良かこつがあいよ」

という。

「よし、そんなら、やいか」と構えると、

「おじちゃん、腰ン着けちよいもんのはずせつせ、どっかん置いてよ」

と言うので鉦と鎌を近くの土手に置いて構えると、二人だけと思つていたのにいつの間にか三人、四人、五人と増え続け、とうとう八人から九人になっているではないか。

子供たちは、四・五人私の両足にしがみつき、持ち上げながら少しずつ川の方へ持つていこうとする。私は、一人ずつ離そうとするが、どうも捕まえることが出来ない。

「あッ、こんたガグレじゃ」と直感した。「手がヌルヌルして、掴めがならんはっじゃ」。そこで手に砂をつけて、一匹ずつ離して、やつと最後の一匹（こいが確か親分）を投げ飛ばしたら、

「おじちゃん、降参！」と言つて頭を下げた。

「おいも、やつとかつとやったが」と言うのと、

「おじちゃん、これからはこの川で人間の子供がおぼれることはないよ。」と、そのあと続けて、

「でも、小さい子供だけで泳ぎには絶対に来ないようにね。」と言いながらごそごと山の中へ消えて行った。

じさまは、ふツと我に返つて、「今のは夢じゃなかったらか。

それとも、幻じゃったらかい」と思った。

その日はもう藪払いはずに我が家さえ帰った、と。

あとがき

昔は、子供たちが川で溺れたということはほとんど聞かなかった。これは「じさまとガグレ」のような言い伝えの言葉を守り、必ず上級生と一緒に泳ぎに行っていたからである。

今も「ガグレ相撲」は十五夜の晩に各地域で行われているようだし、また、相撲界においても地方巡業の余興として「五人抜き相撲」をして観客を沸かせている。これも「ガグレ相撲」の変形で、その源は、やはり先のような言い伝えからきているものであろう。

昔から伝承されているこうした「言い伝え」や「民話」などは、今の日常生活への教訓であり、貴重なものである。

みやこんじよ弁

チンガラッ……木端微塵	ドッサイ……沢山
チェストイケー……突撃	サヒカブイ……久しぶり
トゼンネ……さびしい	ワヤッ……冗談
ウギリフツ……ほらふき	セカラシ……うるさい
オマンサー……あなた様	ネツカイ……全部
ボツケモン……大胆者	ヨダツゴロ……無精者
ダイヤメ……晩酌	ケスギッタ……意地悪をする
カゼガヒツチタ……風邪をひいた	
ヒッタマガッタガ……びつくりした	



庄内の食と習慣

西区 池田良子

行 事	習 慣	食
正月 (1月1日)	家族で神仏におまいりした後ご馳走を食べ挨拶回りをした。 (家で飼っているにわとりを年末につぶしてお正月のご馳走とした)	雑煮(丸餅、おやし、椎茸、大根、人参、里芋)、煮しめ、煮豆、かずのこ、かしわの刺身、おば など
七所祝い (1月7日)	数え年7歳の子供がいる家庭ではお寺や神社にお参りしてから、近隣7件の家を「ななとこずし」をもらってまわった。 家族や親戚で厄払いをして子供の成長を願った。	ななとこずし(米、大根、人参、里芋、ごぼう、せり、おやし など) (今の七草とは少し違うが、7種類の野菜を入れてななとこずしを作った)
鏡開き (1月11日)	正月に神仏に供えた鏡餅を下げてぜんざいなどを作って食べた。(神仏に感謝し、供えられた物を頂いて無病息災を願った。)	ぜんざい(小豆厄除け説=赤い色は邪気を払う)
十五日正月 (1月15日)	小正月ともいう。 榎木の枝にピンクや黄色の色をつけた餅や白餅を小さな角餅にして刺し、それを先祖に供え玄関、台所などに飾った。(メの餅)	餅、小豆粥(昔は脚気が多かったためビタミンB1を多く含む小豆を食べたのでは?)
おねっこ	神仏に供えたしめ飾りなどを燃やして、餅など焼いて食べ家族の健康を願った。	餅、ぜんざい
節分 (2月3日)	大豆で豆まきをして厄払いし、炒った大豆を歳の数食べる。	
ひなまつり (3月3日)	女の子が生まれた家庭では厄除けの桃の花やおひな様を飾り、健やかな成長と幸せを願ってお祝いをした。	ちらし寿司 ひなあられ(お供えした餅を小さくして揚げ、砂糖を絡めた)
春分の日	先祖を敬い、亡くなった人を偲んでお墓参りをする。	ぼたもち
彼岸祈念	人々が集って、一年の締めくくりとし、班長の交代、班員の親睦を図る。	煮しめ、がね おはぎ(彼岸団子)、草餅
桜祭り (4月)	家族や友人とお弁当を持って母智丘まで歩いて行って、桜の見物をする。 (祭り期間中はたくさんの露店が並び賑やかな様子は今も続く)	
端午の節句 (5月5日)	男の子の生まれた家庭では魔除けの鎧兜、五月人形、鯉のぼりを飾り、健やかでたくましい成長を願ってお祝いをした。	あくまき、かからん団子、だごまき(保育園、小学校では鯉の形をしたお菓子が配られた)
田の神講	神への感謝と五穀豊穡を願う。 集落によっては女性だけが集って祭事をする。	赤飯、煮しめ、そうめん汁

行 事	習 慣	食
田植え (6月)	手植えの為、親戚や近所の人達に応援をもらう。(結い)	煮しめ、がね、ガランツのてんぶら、田植え団子(小麦粉の団子で溶かした黒砂糖をからめる)
さのぼり	田植えが無事終わったことを、神や手伝った人々に感謝してお祝いをする。	飯、煮しめ、がね、といもがらの酢の物、白和え、ネッタボ
六月灯(7月) 七夕祭り	神社、お寺の夏祭り 笹竹に千代紙、折り紙で作った鶴や輪を連ねた飾りなどと、願い事を書いた短冊を飾った。 (ほうせん花で爪を染めて魔除けとした。)	
お盆 (8月)	先祖を迎えて、精進料理でもてなす。	煮しめ、がね、ソーメン、炒り上げ、いもんぬた、団子(米粉の団子に小豆のあんこをかける)、落雁(もすこ)
敬老の日 (9月)	お年寄りの健康と長寿を集落でお祝いする。	
秋分の日	祖先を敬い、亡くなった人を偲んでお墓参りをする。	おはぎ
十五夜 (10月)	中秋の名月ともいい、澄んだ夜空に輝く満月を楽しむ。 縄を編んだ綱でのつなひきや手作りの土俵でのすもう大会などが催される。	各家庭で(せつなもん)や、枅に米、柿、栗、芋、米粉の団子などを供え、一升瓶にすすきやおみなえしなどを飾る。
運動会(町民祭) (10月)	全町民(庄内、乙房、菓子野)が集まって色々な競技をして楽しんだ。	
田の神講	人々が集って農業について話し合い、五穀豊穡のお礼をする行事。 ※おっとい(豊作の田んぼから田の神を盗んで自分の田に置き、豊作ならお礼をして返す。)	
文化の日 (11月3日)	様々な文化歴史に親しみ、健全な情緒を育む日に祭典が行われる。 五穀豊穡に感謝してのお祭り	甘酒、こんにゃくを手作りして神仏に供える。 赤飯、煮しめ、ゆべし
年末 (12月)	正月の準備(餅つき、庭のシラスまき、門松たて、しめ飾り、年越し用のそば作り ※そばは細く長く達者に暮らせることを願う。風で倒れてもすぐ起き上がるのでその逞しさにあやかって健康を望む。 ※シラスは雪に似せ、庭にまくことで家を清める習慣があった。	

史跡探訪

坊津・枕崎、史跡探訪旅行

町区 山下 謙二郎

平成二十四年九月十八日、朝五時に起きる。快晴。朝食後七時三十分家を出る。地区公民館にはもうすでに何人かの人々が集合されている。役員で集金、資料（参加者名簿、旅程表）配布を始める。大型バス到着。参加者の皆さん乗り込んで行かれる。

八時前、出発。三十二名の参加である。母智丘神社の参道を横切り末吉財部町インターチェンジで高速道に入る。国分に入ると鹿児島湾が目の前に開け、海の眺めが見事である。谷山から一路坊津へ。私は三十数年前、坊津の鑑真記念館まで行ったことがある。そのときは雨の中、曲がりくねった道を車で走ったものである。その頃からすると道路は全く様変わりしている。

枕崎を通り過ぎ、しばらく山道を登って行く右前方に風力発電の大きな風車が見えてきた。そして下って行くと左手に坊津の海がキラキラと光っていた。坊津歴史資料センター「輝津館」に着く。バスから降りて海寄りの柵下の眼下には港があり、右手前方の岩礁の間に二本の尖った大小の岩が並んでいる。「双剣石」である。

むかし唐人がつけたという。左側に立つ大きな方は二十七メートル、小さい方は二十一メートルという。しかし見た目にはもつと高さの開きがあるように見える。



輝津館へ入る。こんな薩摩半島の南の端の町にしては立派な建物である。かつて、海外貿易（密貿易）が盛んであったと言われるように、琉球や中国の漆器類、陶磁器などが陳列してある。特に目を引いたのは「絹本着色八相涅槃図」（レプリカ）である。実物は国指定重要文化財に指定されているという。ただ残念だったのは、展示場所の光がうすく見るのにかなり苦勞した。

坊津というと、鑑真が七五三年に日本への渡航を目指して、六度目の挑戦でやっと坊津へたどり着いたということと昔からよく知られていた。鑑真と唐招提寺は有名である。しかし、鑑真は初めから唐招提寺に入っていたわけではない。来日して五年間は東大寺で過ごしていたと言われる。その後七五九年に、戒律を学ぶ人々の修行の場として現在地に「唐律招提」という道場を開いた。金堂は七百年代後半に、鑑真和上の弟子の一人であった如宝の尽力により完成したという。

また、遣唐使船の寄港地でもあった。海へむかって開かれていた坊津は、古代から海外との交流をもっていたと思われる。坊津は、伊勢の安濃津、博多の那ノ津と並び、日本三津（さんしん）と呼ばれた港町で、中国や南方諸国の受け入れ口として栄えた。そのことが、輝津館の中にあった品々からも想像され

る。今度は行けなかったが「商人の館跡石垣・石畳に昔の『繁栄』をしのぶ」物が残されている。

次は一乗院跡である。バスから降りて坂道を登る。道の両側は民家立ち並び石垣が素晴らしい。一乗院跡はもとの「坊泊小学校」で、いまは四校統廃合され「坊津学園小学校」となっている。昔のままの石段を登った左側に仁王像が立っている。その横にある案内板には、次のように記されている。

敏達天皇12年（583年）百済の僧日羅が仏教弘布のため建立した。その末寺は薩摩大隅の国内47ヶ寺、坊津でも18ヶ寺あったという。日羅上人は自ら仏像三体を刻み、上中下の三坊舎を設けてそこに安置した。坊津の名称はこれに由来する。敏達、推古両帝の御願所となり長承2年（1133年）には鳥羽上皇から紀州根来寺の別院、西海の本寺として如意珠山一乗院の勅号を賜り勅願寺となった。

本院は歴代学徳すぐれた名僧知識が多く、42世の住持がつづき朝廷の御帰依はもとより、藩主島津氏にあっては、多くの寺領を寄進し保護につとめた。しかし、莊嚴目をうばう堂塔伽藍も明治2年の廃仏毀釈の時、多くの宝物とともにむなしく崩壊散逸してしまい、今は仁王石像一对と校舎の西方の丘に歴代上人の墓が往時しのばせている。

今ある仁王像も明治初年の廃仏毀釈の犠牲となったのだろう。右側に立っている仁王は、顔が削られ、腕の先が欠けて、あちこち修復の跡が見える。この仁王像の前方、上の敷地には「上人墓」があると言う事だったけど、そこまでは足を運ぶ気力・体力がなかった。

昼食は「枕崎お魚センター」である。焼酎を飲みながら楽しいひと時であった。

枕崎市は「漁業のまちとして栄え、水産加工業のかつお節は量、質とも日本一、カツオ漁業とともに二大基幹産業」「太陽とカツオのまち枕崎」として宣伝している。昭和二十三・四年頃まで「まくらざつのかつおごあんどん、こやはんかー」と独特の抑揚でカツオ売りのおばさんが、台所口へ来ていたことを思い出す。

また、昭和二十年（一九四五年）九月十七日～十八日の枕崎台風は終戦直後の猛烈な台風で宮崎・鹿児島両県に多大の被害を与えた。私の家もミシッ・ミシッと揺れたことを覚えていた。その後も枕崎は台風の通り道となり台風銀座と呼ばれていた。「枕崎の漁港は、一七七五（安永四）年に長さ百二十m、幅二十mの石造の防波堤が建設されたのにはじまる」と言われている。現在はカツオだけでなく、アジ、サバ、マグロなどが水揚げ

され、総合的な遠洋・近海漁業基地となっている。

最後は明治蔵へ行った。ここは「薩摩酒造花渡川^{けどがわ}蒸留所」となっている。かつては「さつま白波」で全国的に売り出されていた。私なども学生時代「白波」をよく飲んだものである。

枕崎市内のまん中を流れる花渡川^{けどがわ}の上流には、桜山という地名になるほどの、桜の名所があったという。春になり、その桜の花びらが、川を渡って海に流れて行く様子から花が渡る川「花渡川」と呼ばれるようになったという。そんな由縁から、花渡川のほとりに建っているのが「薩摩酒造花渡川蒸留所」と名付けたという。

この見学、買い物が終わり一路帰途に就く。バスの中でも残りの焼酎を飲みながら帰って行った。午後五時二十分ごろ公民館に帰着。

素晴らしい天候に恵まれ、楽しい史跡探訪であった。

事務局便り

平成二十四年度 事業計画

庄内の昔を語る会

一、季刊誌「庄内」の発行

テーマ ふるさと「庄内」く子どものころの思い出く

ふるさと情報

研究など

執筆者…三十名ほど呼びかける

原稿締め切り…九月末

発行…十一月

編集委員会を組織する

二、史跡探訪（庄内地区ライフセミナー）バス等を利用し県内外の史跡を探訪する

① 時期…平成二十四年九月ごろ

探訪先…未定

② 時期…平成二十五年二月ごろ

探訪先…未定

三、庄内歴史講座（庄内地区ライフセミナー）

① 庄内の歴史について…月一回程度、五月頃から年十回程度開催

古代から現代までの庄内の歴史について

庄内地区公民館で開催

② 古文書講座…年二回程度開催

家にある古文書などを題材に、読み方・意味など研究する

庄内地区公民館で開催

講師…坂元徳郎氏、坂元勲氏、山下謙二郎氏、武田

浩明氏、山下真一氏

そのほか外部からの講師も考える

四、その他

① 庄内中学校地域巡見学習

庄内中一年生に庄内地区の史跡などを案内

② 庄内ふるさと祭りに参加

写真展示、「庄内」の販売など

③ 庄内地区まちづくり協議会

構成団体として代議員一名参加、教育文化活動部会に所属予定

平成二十四年度 会 員 名 簿

庄内の昔を語る会

氏 名	住 所	番 号
坂元 徳郎	庄内町一二五七一	三七〇〇三五〇
江口 保	庄内町一三九〇八一三	三七〇〇二八一
鎌田 康正	庄内町一二五五一	三七〇〇二六五
海老原 宗平	庄内町一二三四五一三	三七〇〇三二九
佐藤 幸三郎	庄内町一二五四八	三七〇〇二五二
坂元 勲	庄内町一三九三八	三七〇〇七七五
園田 満彦	庄内町	
池田 平八郎	庄内町八〇四五	三七〇〇六一一
持永 節	庄内町一二五三八一一	三七〇〇三六八
奥田 ミキ	庄内町一二五七二	三七〇〇二五一
曾我 ハマ	庄内町一三六八三	三七〇〇一八三
永井 カツ子	庄内町一三九一九	三七〇〇三〇〇
松元 郁子	庄内町一二五七八	三七〇〇一一七一
永盛 政子	庄内町一二五三九一三	三七〇〇九一五
別府 サキ	庄内町一三七〇七八	三七〇〇二九四七
今村 トミ	庄内町一二五四〇一八	三七〇〇二一四一
溝下 和子	庄内町一二五三四一一	三七〇〇二一三九
瀬戸口 マルエ	庄内町一二五四四	三七〇〇一四九九
西嶋 正文	庄内町一二七〇八一	三七〇〇二七七五
猪俣 剛	庄内町一二七〇八	三七〇〇一七七一
朝倉 脩二	庄内町一二六九四	三七〇〇〇七八
田代 加代子	庄内町七四三二	三七〇〇二〇五六
池田 良子	庄内町七九九五一	三七〇〇三〇一四
山下 謙二郎	庄内町一二四六九一二	三七〇〇〇八三一
萩原 忠子	庄内町一二六八二	三七〇〇一一二二
城村 勇	庄内町一二三六四一四	三七〇〇一一二八

年神 シキ	菓子野町一一七一〇	三七〇〇三〇一
大池 列子	庄内町一二三四六	三七〇〇二一八三
江口 高見	庄内町一二三四〇一ロ	三七〇〇一六一
永山 豊子	庄内町一二三四九	三七〇〇一六五五
佐藤 とし	庄内町八九八六一	三七〇〇一六九六
帖 佐ミヤ	庄内町九〇一九一イ	三七〇〇〇二一
花原 恵子	関之尾町六三一四一二	三七〇〇二〇〇
鶴島 節男	菓子野町一一六二一	三七〇〇八九三
馬籠 英男	乙房町一七八二	三七〇〇二五六五
武田 浩明	乙房町三七七一	三七〇〇一二三八
山下 真一	鷹尾一丁目二一一一六	二六〇〇三六四五
井上 ミツル	庄内町一二三四三三	三七〇〇四二三
満木 敏公	庄内町一二四九三	三七〇〇三一八
山下 紘一	庄内町一二四六九	三七〇〇一九一七
山下 和代	庄内町一二四六九	三七〇〇一九一七
福村 修	関之尾町五四二四	三七〇〇三〇四七
池田 昭子	庄内町八〇四五	三七〇〇〇六一一
七牟礼 純一	早鈴町二〇一一九	二五〇〇一八六七
坂元 道代	庄内町一二二五〇	三七〇〇一七五
門松 房子	庄内町一二七四六一	三七〇〇二〇六七
釘村 美千也	庄内町七八七四一二	三七〇〇〇六六六
大川原 紀美生	庄内町一二五二四	三七〇〇二二〇〇
鶴島 兼貞	庄内町八六七八一	三七〇〇一四四七
宇野 勝利	庄内町一二六五九	三七〇〇二二二八
宇野 秀子	庄内町一二六五九	三七〇〇二二二八
田中 ミヤ	庄内町八六八八一	三七〇〇二二一五
山元 芳子	庄内町一二五〇一	三七〇〇〇六七〇
財部 千鶴子	庄内町一三八七〇	三七〇〇〇六四七
新田 幸夫	庄内町一二四五〇	三七〇〇〇三九七
宮下 俊彦	久保原町四一五〇	二二〇〇六九四一
乙守 保正	庄内町一二七三九	三七〇〇〇七三七

編集後記

(編集子)

再発行二年目『庄内』十八号を発行する運びとなりました。これもひとえに『庄内』をこよなく愛して下さる皆様方の賜物です。

平成二十四年十一月吉日

今年度のテーマはテーマ、①ふるさと「庄内」→子どもへの思い出→②研究 ③ふるさと情報など、といたしました。①については、「追憶・随想」の項に掲載させていただきました。故郷「庄内」を遠く離れていらっしゃる方々の「庄内」への思いなどをはじめ、貴重な体験などの寄稿も頂きました。②については、今年度「庄内の昔を語る会」主催の「歴史講座」を月一回（八月は休み）の割で開催してきましたが、その際の講義内容を講師の御協力により「研究」の所に記載いたしました。

③では、先人たちの築き上げられたものの紹介を掲載いたしました。また現在の「ふるさと庄内」の動きも事業報告などの中で紹介しています。今、庄内では自分たちの手で元気な町にしようと、「庄内地区まちづくり協議会」（会長・釘村美千也）を中心に活動しています。

地元のかうした人々のご協力にもあずかって「庄内の昔を語

る会」も会の更なる発展を目指して努力しているところです。

庄内第十八号

平成二十四年十二月十五日 印刷

平成二十四年十二月二十日 刊行

刊行・編集

庄内地区まちづくり協議会
庄内の昔を語る会

宮崎県都城市庄内地区公民館
電話（〇九八六）三七〇八八八番

印刷

株式会社 文 昌 堂
都城市東町十八街区一
号
電話（〇九八六）二二一一二二番

